

俳句の街 まつやま  
俳句ポスト365  
作品集2016

<http://haikutown.jp/>



# 目次

## 季語解説



### 第102回 春の風

〈春〉春に吹く風。その中でも特に、東または南から吹く、暖かく穏やかでのどかな風のことをいう。「春風(はるかせ/しゅんぷう)」。

### 第103回 水菜

〈春〉アブラナ科の1〜2年生野菜。京都付近が原産といわれ、畦(うね)の間に水を引き入れて作るのでの名がある。関東地方では「京菜」とも呼ばれる。

### 第104回 三月

〈春〉陽暦の三月のことで、仲

春の頃にあたる。暖かさと寒さが交互に続きながら、次第に春の気配が見え始める。

### 第105回 水草生う

〈春〉水がぬるむ三月から四月にかけて、池や沼、川などにさまざまな水草が生えはじめる。水底に根をおろすものや、水面に浮かぶものなど、様々な種類を総じていう。

### 第106回 花種蒔く

〈春〉夏から秋にかけて咲く花の種を蒔くこと。「鶏頭蒔く」「朝顔蒔く」などと特定の花について

て言う場合もある。なお、季語において単に「種蒔」と言った場合は、花の種ではなく「糊(おみ)を蒔くことを指す。

### 第107回 花冷

〈春〉ちょうど桜の咲く頃には天候が定まらないことがよくあり、それによって一時的に急に寒さが戻ることという。

### 第108回 暖か

〈春〉季語として「暖か」と言った場合は、春になって陽気が温暖であることをいう。季節の変化に関係のない物や心理的な暖

### 第109回 春の月

〈春〉春の夜の大気中には水分が多く、空気の透明度が低くなり、物の形がくつきりと見えないう。月も大気中の水分や塵のために、輪郭がにじんだように潤んで見える。

### 第110回 黄金週間

〈春〉4月29日昭和の日、5月3日憲法記念日、5月4日みどりの日、5月5日こどもの日と、4月下旬から5月上旬にかけて祝日が集中していることに加え、週休二日制や振替休日によって生まれる大型連休。「ゴールデンウィーク」。

### 第111回 初夏

〈夏〉5月上旬の「立夏」から夏が始まる。以降、初夏、仲夏、晩夏と、立秋まで続く夏のうちのはじめの時期。強い生命力にあふれる季節。

### 第112回 滴り

〈夏〉夏に崖の岩肌を伝わったり、苔などにしみ込んだ水が、雫となって真下にぼたぼたと落ちる清水。季語として「滴り」という場合は、雨後の雫や鍾乳洞などの水滴は含まない。

### 第113回 高菜

〈夏〉アブラナ科の越年草。芥菜(な)の一種で、高さ1.5メートルほどにも育つのでこの名がある。皺がある大きな楕円形の葉には少し辛みがあり、漬物や炒め物に用いる。

### 第114回 六月

〈夏〉陽暦の6月。立夏が5月上旬にあたるので、6月は仲夏(なつ)の時候であり、いよいよ夏らしくなってくる。本州・四国・九州では中旬頃から梅雨に入り、蒸し暑くなる。

### 第115回 金魚玉

〈夏〉玉状に作られたガラスの器に金魚を入れ、軒先などに吊して、その涼感とともに楽しむ。最近では金魚鉢や水槽で飼うことが主流となり、見かけることが少なくなった。

### 第116回 南風

〈夏〉夏に南方から吹く暖かな季節風のこと。「みなみかぜ」とも、単に「みなみ」とも読む。また、地方によって「はえ」などというところもある。

### 第117回 目高

〈夏〉体長約3cmのメダカ科の淡水魚。川や湖沼に群れ泳ぎ、

観賞用として水槽で飼われたりもする。普通は背中が淡褐色をしているが、白色、緋色の変種もある。

第118回 登山 21

〈夏〉夏は日が長く、気象が安定しており、また軽装で出掛けられることから、登山には良い時期と言える。信仰としての登山もあるが、現在ではレジャーやスポーツとしての登山が主流である。

第119回 百物語 22

〈夏〉夜に数名が集まり百本のろうそくを立て、各々が怖い話を語ってはろうそくを一本ずつ消していくという怪談会。最後のろうそくが消え真つ暗になった時に妖怪が現れるともいわれる。

第120回 葛餅 23

〈夏〉くずもち。葛粉を熱湯で練り、型に入れて冷やし固めた菓子。三角などに切つて、きなこを蜜をかけて食べる。古く元来は小麦の澱粉(正麩)を練り、長期醗酵させてから蒸しあげたものだった。

第121回 ハンカチ 24

〈夏〉暑い季節に汗を拭くための「汗拭い」としては最も一般的。ハンカチ自体は一年中使うこと

から季節感にやや乏しいが、季語としては汗を拭く目的のものをいう。

第122回 蟋蟀 25

〈秋〉秋の虫の中では最も一般的なもののひとつ。畑や草原はもちろん、部屋の中へも入つてきてリーリーリーと鳴く。秋深く、他の虫の音が聞かれなくなる頃になつても鳴いている。

第123回 桔梗 26

〈秋〉秋の七草のひとつにもかぞえられる代表的な秋草。茎の分枝の先にひとつずつ紫の五裂鐘形の花をつける。風船のように膨らんだ五角形の蕾も恰好の句材となる。

第124回 枝豆 27

〈秋〉大豆のまだ実の青いものを、枝のまま採取したもの。主に茹でて食べる。ビールのつまみとして人気のほか、すりつぶして餅などにつけて食べたり、「月見豆」として十五夜に供えたりする。

第125回 秋の蝶 29

〈秋〉蝶は厳寒期を除けばいつでも見られるが、秋に見られる蝶のことを総じていう。春の蝶の優しさ、夏の蝶の華麗さとはまた別の、どちらかといえば地味な印象の蝶が多いことに趣がある。

第126回 蓮の実 30

〈秋〉蓮は、花が終わると漏斗状の花托となり、蜂の巣のような孔が並び、種子は黒く熟す。やがて熟しきつた実は巢孔の中から飛び出して水中に落ちる。実は食用にもなり甘い。

第127回 秋風 32

〈秋〉「しゅうふう」とも読む。秋に吹く風のこと。「秋の風」。初秋の頃になると、肌身に冷気をもつて吹きすぎるので、この風に心のさびしさを託して詠まれることが多い。

第128回 秋の雲 33

〈秋〉一般に「罽雲」と呼ばれる巻積雲や、刷毛でさつと塗つたかのような巻雲、高い空に薄く広がる巻層雲など、6千メートル以上の上空に現れる上層雲が多い。

第129回 栗 34

〈秋〉ブナ科の落葉高木。また、その実。主に山地に生え、果樹として栽培もされる。栗の実の毬は初秋の頃は薄い緑色だが、晩秋には暗褐色となつて裂け、中の光沢のある実をのぞかせる。

第130回 秋刀魚 36

〈秋〉北太平洋や日本海を大群

をなして回遊する、体長30〜40cmの、青鉛色の細長い魚。8月頃より日本近海を回遊する。七輪などで焼くと煙がもうもうと立ち上がり、辺りに溢れる。

第131回 葱鮪 37

〈冬〉葱、鮪肉、豆腐を醤油で煮たもの。碗に盛つて食べるが、これを熱々の鍋物にしたものが葱鮪鍋(鮪鍋)である。鮪は中ごろを使うため、脂肪分があつて温まる。

第132回 ねんねこ 38

〈冬〉乳幼児を背負つた上から着る、防寒用の縮入れ半纏のこと。寝ることや赤子を意味する幼児語の「ねんね」からきている呼び名。

第133回 蜜柑 40

〈冬〉ミカン科ミカン属のうち、皮のむきやすい温州蜜柑の類。あるいは柑橘類を総称している。一般的な温州蜜柑は10月〜12月に出荷される。果肉は酸味が少なく、果汁が多い。

第134回 山眠る 41

〈冬〉落葉しつくした山々が、冬の日を受けながら静かに眠っているようである、と、冬のあるものを擬人化した表現。

第135回 歌留多 43

〈新年〉正月の遊びのひとつ。最もオーソドックスで競技会なども行われる「小倉百人一首」の「歌留た」のほか、「花がるた」、「いろはがるた」などがある。「トラップ」を含めていう場合もある。

第136回 冬風 44

〈冬〉とかく風が強く吹きすぎ、海の荒れる日が多い冬にあつて、風向きが変わるときなどに、しばらく風が止んで、海の波がおだやかになること。

第137回 伊予柑 46

〈春〉ミカン科ダイダイ類の品種のひとつ。原産地は山口県だが、明治中期に愛媛県での栽培が盛んになつたことから伊予柑と呼ばれるようになった。

第138回 野焼 47

〈春〉早春、晴れて風の無い日、草原や堤などに火を放つて枯草を焼き払う。焼けた灰は馬や牛などの飼料となる青草の成長を促したり、また害虫駆除にも役立つ。

出張俳句ポスト報告 表5

365オプ会報告 表6

# 春の風 はる かぜ

## 天

### 狒犬の毬は何色春の風

ぐわ

「春の風」はちょうど5音の季語ですから、上五なり下五なりに「春の風」と置いて、残りの12音でひとかたまりのフレーズを作れば、それなりに俳句として成立します。

さらに「春の風」は、暖かくてのどかな風、前向きで明るい青春性を持った風でありつつ、春の愁いや、激しい春風のイメージも内包していますので、どんな12音のフレーズでも許容してくれるのです。

が、そうなつてくると逆に、これこそが「春の風」だと推せるだけの必然性を持った句を探し出すのは、なかなかの難問。しかも今週は「愛媛マラソン応援企画」ということで投句数は二千を軽く越えていましたので、玉石混淆の選句作業は、ちと大変でした。

そんな中、何度も読み直しているうちに、やっぱりこれを推そう！という気持ちがあつたのですが、中七「毬は何色」と

いう発想が実に素敵です。

石の「狒犬」が手を置いている「毬」はやはり石の色をしていますから、私は今まで、あの「毬」は何色だろうなんて考えたこともありませんでした。中七「毬は何色」というフレーズに続き、下五「春の風」という季語が出現したとたん、その「毬」の一点からみるみるうちに色が生まれ、色が広がり、石の色をした「狒犬」も色を取り戻していくような心地でした。季語「春の風」が見えない色を見せてくれる驚き。これこそが、季語の持つ力を発揮させた一句ではないかと、強く肯いた次第です。

## 地

### まへかごに卵うしろに春の風 どうかいて

「春の風」が持つ明るさを軽やかに表現した作品です。「まへかご」というモノを提示するだけで、自転車なりバイクなどの映像は浮かんできます。そこに「卵」を入れている状況を「まへかごに卵」というフレーズだけで読み手に伝える言葉の経済効率の良さ。「まへ」に対して「うしろ」と対比させてから、最後に季語「春の風」を吹かせる技法も確かです。

### 春風や父にもどらぬブーメラン

でこはち

「父にもどらぬブーメラン」は父子が

遊んでいる光景ではあるのでしょうか、このフレーズが作者の喪失感めいた感情を表現している点に惹かれます。「春の風」ではなく「春風や」と詠嘆したこと、その気分がさらに強くなっているのかもしれない。

「父」が投げた「ブーメラン」は地に落ちたのか、見えないところに飛んでいつてしまったのか。それを見ている子と「父」の間に通う心理を思う時、短編小説を読んでいるかのような心持ちになりました。

### 春風に追越されたねレトリバー 三重丸

「春風に追越されたね」という会話が軽やかで優しい一句。単純に「犬」としないで、「レトリバー」としたこと、その大きさや色合いが見えてきます。私は、ゴールデンレトリバーを想像しました。上五中七のフレーズから、盲導犬かもしれないなあとも思いました。ゆつくりと歩くことを楽しむ気持ちが「春風」という季語を豊かに彩ります。

### 春の風にはかに猫のなまぐささ 小市

「春の風」と「猫」の句も色々ありますが、この句の向こうには生々しい恋猫が臭ってきます。「にはかに猫のなまぐささ」という実感が、「春の風」の生ぬるい触感を表現。「春の風」は明るくのどかなだけの季語ではない、ということとを嗅覚で教えてくれる作品です。

春風を混ぜて麻雀中華街 四万十太郎

こんな発想も愉快です。「春風を混ぜて」というフレーズがまず浮かび、混ぜるといえば「麻雀」だな、なんて連想を繋げていったのかもしれない。「混ぜて麻雀」というマ音のリズムから、一気に「中華街へと着地する勢いが楽しい。「中華街」の赤と金色の彩色イメージが、案外「春風」に似合ってるんだなあと思いました。

### サーカスのテントは魔窟春の風 雪うさぎ

「サーカスのテント」と「春の風」の取り合わせならば、これぞ明るく楽しい一句になるのかと思えば、ちよつと妖しい「春の風」です。「魔窟」の「語が「サーカス」という言葉の裏側にベツタリと張り付いているかのような感触。そういえば、昔は、駄々をこねてる子に向かって「サーカスに売ろぞ」なんて脅す大人がいたよなあ。「サーカス」とは、非日常の夢と恐怖に彩られた言葉ですね。

### 春の風丘の上より馬賊去る

クズウジュンイチ

「春の風」「丘」というと「春風や鬨志いだきて丘に立つ／高濱虚子」を思い出しますが、そんな巨匠の先行句に怯むこともなく、堂々とやってくるのが、この作家のふてぶてしい実力。

「馬賊」とは「馬に乗って荒らし回る賊」特に、清代末頃から中国東北部（旧満州）を中心に荒らし回った騎馬の群盗のこと」ですから、この一語で一気に満州の大地へと、読者をワーブさせます。「春の風」は、遅い満州の春を告げる風でありつつ、馬賊たちの乗る馬のたてがみを光らせる風であります。映画のワンシーンのような一句でした。

### 俺たちはまだ春の風を許さない

森田欣也

面白いなあ、この「春の風」ってなにを象徴してるんだろう、どんな出来事があったんだろう。そんな想像の球を読者に向かって投げ込み、作者自身はそれ以上の上のことは語らない。俳句にはこんな作り方もあります。ただ、なかなか成功しにくいタイプの句であることも肝に銘じておくべきです。

この一句には、「俺たち」という共有する感覚、「まだ」という時間の経過、「許さない」という心情などの要素がうまく盛り込まれているから、読者を巻き込む力を持ち得ています。お見事です！

### 春風や息の重なる給水所 蘭丸

「愛媛マラソン応援企画」からは、以下の四句を推します。まずはこの一句「給水所」の一語で場面が立ち上がってきますね。「息の重なる」が「給水所」の

描写としての実感。優勝争いしているようなランナーじゃなくて、完走をめざしす！的ランナーたちの「息」なんだろうなと思わせるのが、「春風や」という季語の明るさかもしれません。

### ランナーへ手を振る車窓春の風

このはる紗耶

作者のいる場所が明確に描かれているので、映像がしっかりと立ち上がってきます。「ランナー」から、「手」振る「車窓」と語順が巧く配置され、方向を示す助詞「へ」の効果もバツチリ！下五「春の風」が開いた車窓から入ってくる感触もありありと伝わってきます。

### 動脈は春風のリズム空は四角なれど

妹のりこ

「動脈は春風のリズム」という発想をうまく破調に溶け込ませました。「マラソンをしている」動脈と読んでもいいし、もっと普遍的に「生きている」動脈と読んでもいいですね。後半の「空は四角なれど」が理屈っぽくなっていないのも絶妙のバランスです。

### 吸う吸う吐くすうすうはくはく春の風

笑松

ははは！これは、マラソンかもしれないし、出産のラマーズ法かもしれない？と思ったけど（笑）、目で見る表記の面

白さ十声に出した時のくだらなさが、これまた絶妙なハーモニー。「はくはく春の」というハ音もまた楽しい作品でした。

第103回 2015年3月16日掲載

## 水菜

天

武州某町水菜と言へど猛々し 雪うさぎ  
「水菜」といえば「京菜」という呼び名がすぐに浮かんできますが、取えて「武州」という無骨な響きをもった地名を使ってイマドキの「水菜」を表現しようとした発想のオリジナリティ。やってくるれるなあど、痛快な気分になりました。

「武州」とは武蔵国。現在の東京都埼玉県、さらに神奈川県の川崎市や横浜市の大部分が含まれるようです。木曜日の並選に「迷つたまま茨城産の水菜買う」という小木さんの句をいただいたのですが、かつて「武州」と呼ばれていた大消費地に近い茨城県産の「水菜」も広く出回っているようです。そんな現在の現状を「水菜と言へど猛々し」と述べることで、京菜という言葉の持つ嬾やかなイメージと対比。逆説的に「水菜」の特徴を表現するとは、いやはや見事な発想です。

「武州某町」という上五の置き方も巧いですね。仮に「武州産」と言い換えてみると、その効果は一目瞭然。「武州産」だとスーパーに並んでいる商品っぽくなりますが、「武州某町」は行きずりの視点。「武州」の某かという町で栽培されている「水菜」をたまたま目にしての、これ水菜？ ずいぶん勢いのいい水菜ねえ！なんて会話が聞こえてくるかのようです。京の壬生菜ではない、まさにイマドキの「水菜」がありありと表現されています。

俳句はこんなふうにして、時代とともにどんどん新しい視点が生まれてくるのだなあど、頼もしく受け止めた一句でもあります。

## 地

光りたる水菜より振り落とす水 吾平

「水菜」の、水だけでも育つという特徴を考えたとき、「水」「光」の二語を使つた句が量産されるに違いないという予想は立ちます。その発想の中でいただいたのが、この一句。「光りたる水菜」の光と、「振り落とす水」の光はそれぞれ性質が違います。その質の違いを読み手の脳内に再生させる、それがこの句の魅力です。

水と水ぶつけて洗ふ水菜かな 菜月

「水菜」を洗うシーンを詠んだ句もたくさん届きました。その中で金曜日に残

したのがこの一句。「水菜」を「洗ふ」ときの水の動きを「水と水ぶつけて洗ふ」と感じる作者のアンテナ。「水」という字が三つでてくる視覚的效果も見事です。

### 湧き水を水菜と競ふやうに飲む

クズウジュンイチ

「湧き水」で育つ「水菜」を描いた句もありましたね。この句のオリジナリティはなんといいても、その「湧き水」を作者（あるいは句中人物）が飲んでいくという設定です。飲むことができるよいうな「湧き水」で育つ「水菜」ですから、その味は言わずもがな。「競ふやうに飲む」という勢いもまた、春の躍動感です。

### 鳥のごと腹に水菜のうすみどり てん点

「水菜」をたくさん食べる時、「腹」のなが綺麗になつていくような心持ちになります。それをこんなふうに表示できるんだなあと感心しました。「鳥のごと」という比喩も率直な感覚。「腹」の中の「うすみどり」の部分がほんのりと光っているかのような感覚が新鮮です。

### 水耕の水菜も供へ地鎮祭 午後

「地鎮祭」に何を「供へ」てもよいのですが、「水耕の水菜」の瑞々しさがいかにも相應しい供物。みっしりと大きき育った株、真っ白な莖、茂ったさみどりの葉のなんと清々しいことでしょう。

俳句では散文的になりがちだという理由で嫌われる助詞「も」が、この場合は的確に機能しています。「水菜」の他にも供えられているものがあるという情報が豊かな隠し味となります。

### 水菜から食む南座の幕の内 るびい

「水菜から食む」の後にでてくる「南座」の一語からストレートに京都が連想され、さらに「南座」で食べている「幕の内」であることが分かると、前半の行為に納得が生まれます。

本場京都の「水菜」であることを思いつつ、まずは最初に味わう「水菜」。もうすぐ始まる芝居の前に腹ごしらえ。華やかな舞台への思いもふくらみます。

### ぶぶづけに水菜をそえて楽屋裏

中原久遠

こちらは「楽屋裏」としかありませんので、どの土地のどんな劇場であるのかは分かりません。が、上五「ぶぶづけ」の一語で京都に違いないことが分かります。「ぶぶづけ」とはお茶漬けのこと。「水菜」の漬け物を添えての軽い腹ごしらえです。こちらは京都ならではの壬生菜の漬け物かもしれませんね。

### ふた抱へ京菜納むや相撲部屋

このはる紗耶

「水菜」ではなく「京菜」としたこと

によって、大阪場所かもしれないと想像が広がります。三月の大阪場所ならば季語「水菜」にもびつたり。この「京菜」の「ふた抱へ」とは、何株もを二包みしてあるのが「ふた抱へ」なのでしょうね。

### この句で最も誉めたいのは、「納む」という動詞の選択。これによって、「ふた抱へ」の「京菜」を運び込んでいるのは

ご近所の八百屋さんなんだろうということが分かります。毎年三月場所では必ず注文を受けているお店かもしれません。「相撲部屋」の活気、大阪の春の風物詩でもある大阪場所の盛況が、一句の向こうにありありと感じとれる作品です。

第104回 2015年3月23日週掲載

## 三月

### 天

#### 三月の銅像の栗鼠濡らす雨 井上じろ

「三月」は春が本格的に躍動を始める季節。健やかな太陽、明るい風、匂やかな芽吹き、動き出す生き物たち、「三月」という季語の持つ躍動感をさまざまに表現してくれた今週の投句の数々。楽しんでいただきました。どの句を「天」に推すか大いに迷ったのですが、この静かな作品をいただくことにします。

「三月の銅像」とあるので、偉人の銅像めいたものを一瞬思うのですが、それが「栗鼠」である点に、最初の意外性があります。偉人の銅像の足下？に配置されたリスではなく、芸術作品の一部として表現された「栗鼠」なのだろうと想像しました。

「三月や」で切れるのではなく、「三月の」となっていますので、この季語はどれかの語に係っていくわけですが、さて？と考えてみると、「銅像」にかかつていくのか？「銅像の栗鼠」？はたまた「雨」にかかると読みを迷います。が、次の瞬間、あ、そうかこの「三月の」は、これら全ての語にかかつていく働きをしてるに違いないと気づくと、季語「三月」の懐の深さになすかされます。

三月の雨が濡らす三月の銅像の栗鼠は、くるぐると豊かに濡れています。今にも走り出しそうな栗鼠の表情も想像されますし、ひよつとするとこの「銅像」は春を待つ人物とともに春の来る方向を見つめているのかもしれないと、さまざまな想像も広がります。それもこれも、季語「三月」の持つ言葉の力でありましょう。

### 地

#### 三月を生き延ぶ静かなる海と るびい

二〇一一年三月十一日以降、季語「三月」は追悼と祈りの意味を色濃く持つよ

うになりました。東日本大震災を詠んだ句もたくさん届きましたが、その中でこの句を推したのは、「三月を生き延ぶ」という言葉に籠められた思いの深さに心を打たれるからです。後半の「静かなる海と」の助詞「と」に籠めた切々たる祈りにも、ハッとさせられます。

### 三月の色とするマティスは激し トボル

「三月の色とする」という詩的断定が、一句に強い躍動感を吹き込みます。画家「マティス」の激しい色使いを「三月の色とする」と断定された瞬間の鮮やかな印象。単純化された人物が、鮮やかな色の中で飛び跳ねているかのような印象が、生き生きと飛び跳ねる「三月」です。

### 階段の踊場は三月の場所 ぐわ

これも一種の断定です。「階段の踊場」は学校でしょうか、職場でしょうか。どこかからどこかへ動いていく時、ほんの少し立ち止まる「場所」が「踊場」であり、それが「三月」という季節であるよという詩的断定。

ちょっと迷ったのは、「踊場」とあれば「階段」は要らないか?という点だったのですが、この句の場合は最初に明確な場所を提示することで、「三月の場所」という抽象的な言葉が認識されやすくなるのかと、納得した次第です。

### 三月やころころ水を飲みに行く 百草千樹

「ころころ水」って何だろう?と考えることが楽しい作品。「ころころ」した石の中から湧き出てくる小さな噴井かな?と想像しました。きっと美しく美味しい湧き水なのでしょう。春が来れば「ころころ水」を飲みに行く、というのが、極めて個人的な季節感であるのに、それが詩として詠われると、読者の心に共感を誘う。この17音が詩としての力を持っている証拠ですね。

以下、作者の解説を読むとますます実感が湧きますよ。

●ワタクシが現在暮らす奈良県にはころころ水と呼ばれる名水があります。ころころ水は天川村の五代松鐘乳洞によって半世紀かけて磨かれて湧出するそうです。五代松鐘乳洞は観光スポットになっているのですが毎年十二月一日に閉鎖され三月中旬に再開されます。／百草千樹

### 三月の雲はしつかり旅慣れて ぐべの実

春になると旅に出たいね、という発想の句も多いのですが、「三月の雲」が「旅慣れて」いるよという感知そのものに詩があります。「しつかり」という言葉を浮き上がらせることなく、一句に馴染ませているのが、言葉のバランスの妙というヤツですね。

### 三月のおはじき口に含みたし カリメロ

こんなこと考える人大好きです。「おはじき」は年中遊べるものですが、「三月のおはじき」を見てると「口」に含みたくなるよ、という発想が実に楽しい。赤ちゃんが何でも口に入れるのを見ての発想かもしれませんが、「三月」という季語のおかげで、なんだか甘そうな「おはじき」が味わえましたよ。

### 三月の噂を押し込めばロッカー 紗蘭

これは学校の部室のロッカーでしょうか、職場の更衣室でしょうか。「ロッカー」に押し込めた「噂」とは上級生との恋の話でしょうか、はたまた転動やら左遷やらの話でしょうか。「ロッカー」を開いたとたん「三月の噂」たちが勢いよく飛び出してきそうな春であります。

### 三月や木管楽器は花の息 花屋

「木管楽器」と言われると、私はオーボエの音色を連想します。「花」は桜を意味する季語ではありますが、この場合は桜と限定しない一般的な「花の息」というイメージで受け止めればよいでしょう。オーボエの柔らかく表情のある音色を「花の息」と表現した感性に、おおいと共感します。吹く楽器である「木管楽器」の手触りが、「息」という言葉にも響き合います。

### 三月は卵で俳句産んでみる ミル

こんなこと言ってくれるのが、ミルちゃんワールドの楽しさ。「三月」という季節の明るさがこんなことを思わせるんだろいうなあ。「卵で俳句産んでみる」と言い放った後に、コロんと真つ白な俳句の卵が転がってくるような楽しさが好き♪

第105回 2015年3月30日週掲載

## 水草生う

天

老頭兄の憩う長椅子水草生う 竹庵

「老頭兄」とは「ロートル」と読むのか?と調べてみると、ネット辞書には以下のような解説がありました。「ロートルは中国語で年寄り・老人という意味の老頭兄という語を由来とする単語。中国語の発音としては「ラオトウ」あたりの方が近く音程も上下するので、日本人が普通にロートルと発音しても中国人には通じない。」

なるほど。ならば、意味としては「ロートル」を思い浮かべつつ、「ラオトウ」と発音したいなあ。声に出してみると実に豊かな響きを持つ言葉です。

水草の生う春ともなれば、「老頭兄」たちはそれぞれお気に入りの椅子に座っ

て、行き過ぎる人を眺めたり、麻雀やトランプに興じたり、煙草をふかしたりしているのでしょう。若々しい春と「老頭兒」という字面や音を對比させつつ、春の心楽しさを「憩う」「長椅子」の二語で穏やかに表現しており、実に味わい深い作品です。

私は、かつて訪れた中国の水の都・蘇州を思い浮かべました。町中を巡る運河や水路、その水辺に置いた「長椅子」に集う「老頭兒」たち。古い民家の窓に、錆びた鳥かごが吊してあり、名前を知らない美しい鳥が鳴いていた光景まで思い出しました。

中国の町角を思わせつつ、心の中で「ロートル」と意味を反芻すると、ゆっくりと年老いていく自分自身を慈しむような読みも生まれ、その二重の味わいを楽しませていただきました。

## 地

水草と千の光の泡の生ふ こま

「水草生う」という季語に対して「光」「泡」という言葉を用いた句は沢山あるのですが、敢えて季語を分断させる工夫が成功しました。「水草と千の光の泡」という映像が文句なく美しい一句です。

水草生ひ水草に雨の打つ音も

えらいぞ、はるかちゃん！

「水草生ひ」という状態が広がってくと、ある日ある時から雨の音が変化してきます。水面を打つばかりだった「雨の音」が、水草を打つ音になっていく！それに気付いたことが手柄であり、その状況を詩語として明確に表現できたことを誉めたい作品です。

水草生ふボールは沼の臍となる

とりとり

水草の生えた水面に「ボール」が浮かんでいる様子を描いた句も沢山ありましたが、「沼の臍」という表現が楽しいですね。「ボールは沼の臍となる」の飄々たる語りには、あんな沼の真ん中に落ちてちゃ取れないよ〜という諦めも雑じっていて、そのニュアンスが伝わってくるのも巧いなあと思います。

ほくほくと田の神笑い水草生う

カンガガワ孝川

「ほくほく」から始まる語順がいいですね。春になると山も笑い始めますが、「田の神」が笑い始めるようになれば、そろそろ田起こしの準備も始まります。一句の向こうに「水温む」という季語も感じさせます。「水草生う」という季語の明るさが、長閑に広がってくる作品です。

水草生ふばん馬百貫越えてをり

三島ちとせ

「ばん馬」は、北海道ばんえい競馬に使われる頑丈な馬ですね。実際に見たことはないのですが、ドキュメンタリー番組などで観る迫力は半端ではありません。「水草生う」という優しい季語、「百貫」という強い印象を持つ数詞、「越えてをり」という的確な動詞が、光景をありありと描きます。

水草生ふ情死のきはもそののちも

とをと

一読、大宰治が情死した玉川上水を思い浮かべました。「情死」の現場とならうがなるまいが、「水草」は淡々と生い続けていきます。「情死のきはもそののちも」という淡々たる語りが、空恐ろしさを助長します。

「水草生う」という明るい季語と取り

合わせることによって、それとは異質な恐怖や不安を表現しようと試みた句も沢山届きましたが、17音の世界にてこの複雑なバランスを調整するのはなかなか高度な技。さすがは、この作家ならではの一句だと感心した次第です。

わかれましたよ水草生うてをりますし

渡辺郁子

「水草生うてをりますし」という不条理な理由による、あつけらかんとした宣

言。「わかれましたよ」と切り出すのは、やはり春のほうが精神衛生によからうかと思えます(笑)。口語を歴史的仮名遣いで書いた視覚的效果も充分承知のうえで一句でしょう。

引継ぎの二つ水草生う水槽 ぐわ

ありそうだなあ、こんな「引継ぎ」。重要事項の最後に「これも前任者からの引継ぎなんだけど」と切り出されたような感じで笑えます。「水草生う水槽」の中には、何が生息しているのでしょうか。メダカ、金魚、熱帯魚、鯰、濁った水槽いっぱいには太った得体の知れない白い魚(@某学校の某校長室で見た)等、それを想像するのも楽しい一句です。

水草生う千代田区千代田一の

四万十太郎

え？と思いつつ、この住所は皇居に違いない！と気がきました。「千代田区千代田一の」とは、なんとまあ壮大な「水草生う」住所でありましょうか。コロンプスの卵みたいな発想の一句。やられましたよ、四万十太郎くん！(笑)



# 花種蒔く

はなだねま

## 天

蒔き切つてまず花種の袋咲く 不知火  
「花種蒔く」という6音の季語をどう扱うかという点において、この句の工夫は見事です。季語そのものの語順を入れ替え、一句全体を読むと季語「花種蒔く」が見えてくる上級テクニク。うっかりやると失敗しかねない技ですが、巧く使いました！

「蒔き切つて」という動作から始まりですが、「蒔」の一字でなにかの種を蒔いていることは読み手に伝わりません。さらに複合動詞「蒔き切つて」でその作業が終わっていることまでもが「一気にいえますね。次に巧いのが「まず」の一語、「蒔き切つて」という動作の後ですから、「まず」によって展開される短い時間が示唆され、この伏線によって「花種の袋咲く」という後半の映像が鮮やかに広がってくるのです。

どこにどの花種を植えたかが分かるように、「花種の袋」は蒔いた場所の端っこに。風で飛ばないように軽く土を置いたり、割り箸に挟んで立てて置くというお便りも今週届いてましたね。「花種」を蒔き終えた静かな土には、花種が入っ

ていた袋が色とりどりの写真の花を咲かせています。ここにはこれが、あそこにはこの色が、と全ての花が咲いた様子を思い浮かべる楽しさ、満足感。如雨露でたっぷり水をやると、土はくろくろと豊かな色となります。

一種の機知としておわりがちな言葉「花種の袋咲く」が、映像の言葉として機能している点も、実に巧い一句。「物仕立て」で仕上げるには難しい季語「花種蒔く」を、見事に成功させた点にも拍手を贈りたいですね。

## 地

痒さうな土に花種蒔きにけり

ハラミータ

季語「花種蒔く」には「土」という言葉は付きものですが、「花種」を蒔く前のふんわりと整えた「土」を「痒さうな土」と表現したところにオリジナリティがあります。同時に、この擬人化が「土」の様子を映像として想像させる力も持っているのですよね。

「花種蒔く」という6音の季語を、後半に「花種蒔きにけり」とゆつたり置くのも一つの型で、この句の内容に似合っています。

花種蒔く遊具の影が届く場所

三島ちとせ

こちらは上五に字余りで「花種蒔く」とするパターン。上五の字余りは最も許容しやすい型ですので、中七下五でリズムを取り戻せば何の問題もありません。

「花種蒔く」から「遊具の影が届く場所」という映像の描き方が実に的確。この句の場合、どんな「遊具」を想像してもよいわけで、「遊具」の一語から子どもたちが遊ぶ姿や声が生まれ、「遊具の影が届く場所」で、土も見えてきます。地味だけれど巧い一句です。

花種を蒔きて仔犬を覗む妻

ちびつぶぶどう

季語「花種蒔く」を、「花種を」として上五を作ること可能です。こうなると一句の調べがゆつたりときますね。

それにしても、なんて可愛い「妻」の表情でしょう。彼女が花種を蒔いているあいだ、「仔犬」は好奇心いっぱい、作業の邪魔をしてたんでしょね。「仔犬を覗む妻」の若々しい表情、そんな「妻」と「仔犬」を見つめる夫の視線のなんと優しいこと！これも「天」に推したかった作品の一つです。

花種を蒔く件マロン去勢の件 隣安

「花種を」と5音で上五を作っているのは、先ほどの句と同じですが、さらに

工夫しているのが、「句またがり」の型を使った対句表現です。「く件く件」とリフレインすることで、一句に調べも生まれます。

「花種を蒔く件」は命をつなぐこと、「マロン去勢の件」は人間の都合によって命を操作すること。二つの内容の対比もよく考えられています。「マロン」は犬だと読みました。勿論、他の名前でも良いのですが、響きの可愛さ、「マロン」は栗、植物つながり？というような意味でも、良い名前を選んでると思います。これもまた「天」に推したかった作品です。

新しき校歌斉唱花種蒔く うに子

言葉の経済効率が良い作品です。「新しき校歌」で、新設校が統合校かという状況が分かり、「校歌斉唱」で今、その校歌が歌われているという現場が立ち上がってきます。「新しい校歌」が響く校庭の一角には、新しい花壇も出来、子どもたちの手によって「花種」が蒔かれる日も近いに違いありません。新しい学校の歴史が生まれる日の「花種蒔く」です。

花種を蒔く学校へ行けぬ子と

矢野リンド

一方ではこんな光景もあるはずですよ。「学校へ行けぬ子」と「花種」を蒔いているのは、お母さんでしょうか、お父さんでしょうか。閉じこもってばかりで

は……という親心、花の咲く頃には学校に行けるだろうかという思い。「学校へ行けぬ子」の表情もさまざまに想像される一句です。

### 几帳面に花種を蒔く鶴を折る こま

一読した時は「几帳面に」という上五が散文的な説明ではないかと思つたのですが、全体を読み通してみると「几帳面には「花種を蒔く」にかかると同時に「鶴を折る」にもかかつてくることが分かります。「鶴を折る」行為は希望への祈り、平和への願い。折り紙の鶴の一片を「几帳面に」折る行為に、作者の心を読み取ることが出来ます。

### 雲のやうに老いてふうせんかづらまく

#### 紆夜曲雪

「ふうせんかづら」は、風船葛ですね。兼題「花種蒔く」に対して具体的な植物名を詠み込む傍題投句も、幾つかありました。その中で金曜日に残したのがこの句。「雲のやうに」という比喩の言葉を手余りで上五に置き、「老いてふうせんかづらまく」と中七下五で12音を構成しています。

「雲のやうに老いて」という比喩は、悠然たる老い。「ふうせんかづら」という植物の気分に似合います。こんな余生の気分を、俳句新聞『いつき組』1号の「放歌高吟く鶴」にて、ワタクシは「鶴を抱

くような余生をたのしまん」と表現しましたが、紆夜曲雪さんのような若い方がこのような感慨を感じられていることに、軽い驚きを覚えました。

### 十四五本欲しくて鶏頭を蒔きぬ ぼたんのむら

正岡子規「鶏頭の十四五本もありぬべし」への尊敬を込めた本歌取りです。やつたもん勝ちみたいな一句ではありますが、こんなことができるのも当意妙妙な俳句の楽しみ方。時空を越えて子規さんと会話している、ぼたんのむらさんです。

第107回 2015年4月13日週掲載

## 花冷

はなびえ

### 天

#### 花冷やブルーチーズの微びりり トボル

時候の季語なのに、「花||桜」の映像を内臓しているのが「花冷」の特徴です。この季語をどう表現するか、ストレートに温度としての体感で表現しようとした句は沢山あったのですが、味覚で表現する発想に、おぉーこうきたかーという喜びがありました。

「ブルーチーズ」は、慣れない人にとつては実に面妖な食べ物。表面の青い「微

に驚きますし、恐る恐る舐めてみると「びりり」と舌を刺す風味。いつぞや、「あれ腐つとったけん」と高級なブルーチーズを母に捨てられてたことを思い出しました(苦笑)。

「花冷」という季語の奥に広がる桜の色が、「ブルーチーズ」の「微」の青と対比され、「冷」の一字が持つ負の感覚に對し、「微」の味の表現である「びりり」が呼応します。

さらに興味深いのは、「花冷」と「ブルーチーズ」が単純に取り合わせられているだけでなく、「ブルーチーズの微びりり」という措辞全体が、季語「花冷」を表現する比喩的效果も持っている点です。「花冷」を味覚で表現すれば、「ブルーチーズの微」であり「びりり」と舌を刺す刺激であり、「花」を楽しむように堪能される「ブルーチーズ」であるよ、ということなのです。こんな句を読むと、今夜はブルーチーズをつまみにウイスキーでも飲みたくなってきました。

### 地

#### 快晴の夜の青鈍や花の冷

#### 野風

月の明るい夜に空を見上げていて、雲以外の部分が青空なんだ！という当たり前が、非常に新鮮に感じられたことを思い出します。「快晴の」で昼間の快晴を思わせ、「夜の」で一気に時間が動き、さら

に「青鈍あおにじや」という詠嘆が美しく広がります。「青鈍」とは①染め色の名。わずかに青みを含んだ灰色。②襲かさねの色目の名。表裏とも濃い緑色。と辞書には解説してあります。「快晴の夜」の色である「青鈍」と、季語「花の冷」が内包する桜の色が、格調高く響きあう佳句です。

#### 花冷えや湯気立ち上る中華街 加和志真

時候の季語なのに映像のイメージを持つている「花冷」ですから、こんな取り合わせも鮮やかですね。「花冷えや」の後に立ち上がる白い「湯気」の勢い、「中華街」の赤と金色。「冷」に對する「湯気」の温度感の対比も巧い作品です。

#### マウスの青き光芒花冷の書齋 鈴木麗門

今週の鈴木麗門くん、かなりの数が「人」に残っていましたね。その中で金曜日に推したのがこの一句。「花冷」が内臓する色彩に對して「マウスの青き光芒」というかすかな光を対比させた感覚に共感します。変速的リズムの対句表現も、句の内容に似合っています。「花冷の書齋」という箱の中で、ほのかに光る「マウス」です。

#### 採譜するペン先の音花の冷え

えらいぞ、はるかちゃん！ 季語「花の冷え」を音で表現しようとした句もありました。「ペン先」から発

せられるかすかな「音」が、しのびよってくる。「花の冷え」の音なのだという詩的実感。ただのペンの音ではなく「採譜」の一語で、場面が見え始め、「ペン先の音」とは違う音もあふれ出します。

### 電気むさぼる花冷のドライヤー

中原久遠

同じ音系でも、こんな音もあるのだ！と愉快になりました。「花冷のドライヤー」が、温度としての対比イメージを持つていることは言うまでもありませんが、「電気むさぼる」という擬人化が巧いですね。「ドライヤー」ほど、使用している「電気」の量を思わせる電化製品はないかと納得。一句に隠された濡れた髪の毛のイメージもまた「花冷」という季語を引き立てます。

### 彼方漂う花冷えの呼鈴

ミル

広いお屋敷でありましょうね。玄関で押した「呼鈴」が鳴っている空間の深さ。古い洋館かもしれませぬ。「彼方漂う」という映像を持たない措辞からはじまり、「花冷」というかすかな映像イメージを持つ季語が置かれ、最後に「呼鈴」という音のみが静かに響く。一句の構造の巧さを誉めたい作品です。

### 壁紙に天使の眠る花の冷え 紆夜曲雪

先ほどの呼鈴の句の舞台となる洋館

には、こんな「壁紙」が貼られた部屋もあるのかもしれない。「壁紙に天使の眠る」絵柄を想像したとき、「天使」たちの薔薇色の肌がやわらかに浮かんできました。「花の冷え」を感じさせる「壁」の一字と、そこに描かれた「天使」たち。「眠る」の二語も優しい印象の一句です。

### 船便のタグの破れて花冷ゆる

小雪

「花冷」という季語の持つ心理的なイメージを「船便のタグの破れて」という出来事に重ねた作品。ただの「タグ」ではなく「船便」という状況が、長い時間をかけて異国から渡ってきた品物を想像させます。原因理由を発生させない「破れて花冷ゆる」という述べ方も巧いですね。

### 花冷の太陽の塔唸り出す カリメロ

おおうこんな発想があつたか！と、ワタクシも唸りました。「太陽の塔」の聳えるあたりには桜もたくさんありますが、こんな取り合わせができるとは考えてもなかったのです。やられた！って感じですよ（笑）。

「花冷」という季語と「太陽の塔」という建造物を取り合わせることで、ある種の言葉の火花が飛び散るわけですが、下五「唸り出す」という擬人化に凄みがあります。「太陽の塔」の頭にある顔らしきものは、いつもしかめつ面。彼奴を

唸り出させるような「花冷」の体積と濃度を思うと、この季語に新しいイメージを与える一句だなとささやかな感動を覚えます。これも「天」に推したかった作品です。

第108回 2015年4月20日週掲載

## 暖か

あたたか

## 天

鯉と鯉ぶつかる匂ひあたたかし

小木さん

兼題「暖か」からの発想で「鯉」のいる光景を思い浮かべる人たちが多かったのは、暖かくなり水が温んでくる気分を身近に感じる場であるからかもしれない。多くの人が同じ発想をする「類想」は、俳句では嫌われるのですが、逆に考えると「類想」は一種の共通理解であるともいえます。「類想」という名の共通理解を味方につけ、5音分ほどのリアリティあるいはオリジナリティをプラスすることで、俳句は新しくなれます。今週の「天」に推したいこの一句は、「鯉と鯉」が「ぶつかる」時に感じる「匂ひ」に焦点を絞りました。「匂ひ」という3音の嗅覚表現が、作者の感知した光景を読者の脳裏に鮮やかに伝えます。

「あたたか」くなってきた水辺に佇むと、餌が貰えるのではないかと思う「鯉」たちが集まってきました。「鯉と鯉」が身を翻し「ぶつかる」時、池の水は大きく揺らぎ、水は「匂ひ」を放ちます。その匂ひの中に「あたたかし」という時候を感じる一句に、感覚的な共感が生まれま

す。さらさらと春の日を弾く水面、「鯉」たちに採まれる水の音、その生臭い「匂ひ」、視覚と聴覚と嗅覚を、上五中七の12音で見事に表現し得てこそ、「あたたかし」という実感です。

## 地

朝鳥は水の声帯あたたかし めいおう星  
「鳥」に「あたたかし」を感知する句も沢山ありましたが、「朝鳥は水の声帯」という表現にオリジナリティがあります。朝の鳥の声はなぜこんなにも澄んでいるんだらう、という思いが「水の声帯」という言葉をつかみ取ったのでしょう。季語「あたたかし」に美しい透明感を添えた一句です。

### 暖こうなつたと機関長手決

理酔

こんなリアリティに勝負を賭けた一句も発見しました。「暖こうなつた」という「機関長」の台詞に対し、いきなり「手決」という言葉が出てくるとは！船上

の風の冷たさを感じる時、「暖こうなった」という言葉と「手漬」という行為が、強い実感となって迫ってきます。

暖かや造花は水を欲しがって 紗蘭

こんな感じ方もあるのかとハッとさせられた作品です。「造花」が「水」を欲しがるわけではないのですが、「暖かや」という時候を感じるようになると、「造花」ですら「水」を「欲しがって」いるように見える。「欲しがって」いるに違いないという発想に詩があります。最近の「造花」の精巧さを思うと、なおさらの詩的実感です。

暖かやさざれ石とはこれなるか あい

「さざれ石」とは国家「君が代」の中に出てくる言葉でもあります。「さざれ石（細石、さざれいし）は、もともと小さな石の意味であるが、長い年月をかけて小石の欠片の間隙を炭酸カルシウム（CaCO<sub>3</sub>）や水酸化鉄が埋めることによって、1つの大きな岩の塊に変化したものも指す」とネット辞書には解説してあります。

私が初めて「さざれ石」を認識したのは、ある小学校の校長室に飾られていたものでした。その時の実感がまさに「さざれ石とはこれなるか」という台詞でありました（笑）。

長い時間をかけて一つの石塊となった

「さざれ石」のゴツゴツした表面に、「暖かや」という手触りを感じている作品です。

暖かや畑ヘラヂヲの「ぞ自慢」

とうへい

終日「畑」仕事をしている人たちにとつて「ラヂヲ」は日々の友ですね。「暖かや」の詠嘆の後に、「畑へ」という場所が、続いて「ラヂヲ」の音が、さらに「のぞ自慢」という歌が聞こえてくる語順に工夫のある一句です。

あたたかや紙縫ききれいに縫れました

小市

こんな小さな行為も俳句になるんですね。「紙縫」が「きれい」に「縫れ」たよ、という小さなよかつた！こそが、「暖か」という季語の思いに近い感覚だということでしょうか。「あたたかや」という季語の持つささやかな喜びが、読者の心に届きます。

暖かや同じあだ名を子がもらふ

四万太郎

今週の俳句道場で「暖か」という季語を心理的に使うことに対する是非の問題がありました。両方の意見があるとなれば、そのギリギリに位置しているのが、この句の感じではないかと（個人的には）思います。

思わずも我が子が「同じあだ名」を付

けられていることを知った微笑まじさは、心理的な「暖か」。寒さが緩み「暖か」てなってきた心の余裕もあるような一句です。

一駅も乗り越したんだ暖かだ せいち

ははは！こんな言い訳ありか（笑）。あつけらかんとした言い訳もまた俳句になるという愉快。「暖か」という季語のおかげで成立する言い開きですな。「乗り越したんだ暖かだ」と畳みかける口語のリズムも楽しいぞ！

第109回 2015年4月27日週掲載

## 春の月

天

産気づく象舎や春の月は望 長緒連

月の満ち欠けがお産に関係するという話を聞きますが、その発想をこのような素材で表現したところに、作者の意志を感じます。その意志を最も強く発揮しているのが、「産気づく象舎」という措辞です。「産気づく象」ではなく「象舎」ですものね。産気づいている母象だけでなく、出産が始まる緊張感と喜びが満ちる象舎の人々の様子も想像させます。

「産気づく象舎や」で象舎内を描写し、「や」の強調からカットが替わり、象舎

の上へのぼっている「春の月」の映像となります。句またがり×切字「や」によるカットの切り替えというテクニクが、一句の映像を鮮やかに表現。さらに「春の月のぼる」ではなく「春の月は望」としたところが巧いですね。「望」は「望月」つまり満月のことです。「象舎」では母象が「産気」づいて、いよいよお産が始まるよ。折しものぼってきた「春の月」は、見事な「望」の月であるよという詠嘆がいよいよ始まるお産への期待感となります。「春の月」が命のはじまりのイメージとして表現された悠々たる作品です。

地

春の月臨月の臍初々し

祐

月と出産という発想を下敷きにして、こんな瑞々しい作品もありました。「春の月」「臨月」と言葉を重ねるところまでは機知が勝っているのですが、後半の描写が実に巧いですね。「臨月の臍」という部位が現れ、それを「初々し」と述べる優しいまなざし。「春の月」の柔らかさ、若々しさを、初々しい視点で描きました。

同時投句「君を喰ふ猿となりたし春の月」も秀逸。春の夢のような「君」を思う愛の一句です。

春の月生まれ変わるなら毬藻 菅茂子

月と出産のイメージから「生まれ変わる」という発想にたどり着いたのがこの作品。「生まれ変わるなら」というフレーズが、季語「春の月」と「毬藻」をつなぎます。丸いという共通点だけでなく、湿度のある「春の月」と水底に生きる「毬藻」の哀しみのようなもの感じる取り合わせです。

### 歌姫のどに春月滴れば

台所のキフジン

「滴れば」は、確定条件（原因理由）・偶然条件・恒常条件の三つの意味がありますが、この場合は偶然条件で読んでみましょうか。

「歌姫のどに」偶然にも「春月」が滴ったので、と語る一句。今宵の「歌姫」の声の潤いの秘密を、ともに共有するのかなような語り口が素敵な作品です。

### 春の月昇れよ安田講堂に

小市

激しい学生運動の地となった、東大「安田講堂」の記憶に「春の月」が重なっていきます。「春の月昇れよ」は、自分自身の若き日々へのレクイエムでしょうか。「安田講堂に」という措辞は、映像とともに、ある時代への訣別を思わせます。

### サイゴンに旅して春の月に座す

いとやべえ

「サイゴン」という地名と「春の月」という季語の取り合わせ、いいなあ。な感じで似合うのか説明できないけど、豊かな感じがするね。「サイゴンに旅して」から「春の月に座す」への映像の流れがとても自然で、「春の月に座す」時間の充実も感じます。

### 鳥はみづになる春の月のめざめ

脇々

不思議な感覚の作品です。「鳥はみづになる」という美しい幻想は、「春の月のめざめ」からはじまる物語。「春の月」の瑞々しく濡れたさまが、「鳥はみづになる」という詩語を支え、破調のリズムが一句の内容に寄り添います。

### しらまゆみ春の月まで打ちてけむ

有櫛水母男

「しらまゆみ」とは、白木のマユミで作った弓であり、「はる」「ひく」などにかかる枕詞でもあります。一種の機知の句ですが、機知が出しやばりすぎてないので、「春の月」が主役としての美しさをもって凜と存在しています。

「打ちてけむ」という措辞ですが、「けむ」は推量の助動詞なので基本的には「打ちけむ」となるべきだと思います。が、時々このような使い方をしているものに出くわすこともあり……これに関しては、少

し調べてみますね。

### 球場を眼下針路は春の月

このはる紗耶

「球場を眼下」という俯瞰の光景。球場の持つ光量が深い夜景の中にくつきりと浮かび上がってきます。「球場を眼下」という下へ向く視線から、一気に「進路は春の月」と切り替える構成が巧いですね。まるで魔女の宅急便のキキみたいに、箒に乗って飛んでいるような気持ちにさせてくれた作品です。

### 春月の昇らば左翼席の上

もね

兼題「春の月」は、坊っちゃんスタジアムで行われたヤクルトスワローズ応援企画でもありました。野球場行を想像しての一句ですが、「春月の昇らば」という措辞が巧いですね。「昇らば」は仮定条件ですから、「もし昇ってくるならば」という意味になります。もうすぐ「春月」が昇ってくるならば、きつと「左翼席の上」にでてくるよ、という月への期待感が、一句の眼目。「春の月」が、始まったベナン・トレースへの期待にもつながります。

### のぼさんの頭のような春の月

小田宮ゆうき

球場で投げられた句の中から一句「地に推すことになっているのですが、応援しながらこんなことを考えている人がいたことの愉快に一票！」「のぼさん」は正

岡子規の幼名。松山人は親しみをこめて、のぼさんと呼びます。野球場に昇ってきた「春の月」を見て、「のぼさん」の横顔の写真の、あの「頭」みたいな月だなあと、くすくす笑ってるみたいなお品。坊っちゃんスタジアムへの御挨拶句ともなっています。

第110回 2015年5月4日週掲載

## 黄金週間

おうごんしゅうかん

### 天

黄金週間の朝日射し来る救急部

スズキチ

働く人たちの「黄金週間」を描くという発想は当然想定していたのだけれど、一句一読、そうなのだ！こんな朝を迎える現場もあるのだ！と、（佳い意味で）ねじ伏せられた気持ちになりました。「黄金週間」は8音の季語ですから、上五中七下五ごに置いても字余りになります。ならばいっそ「黄金週間の」と上五の音を大きく余らせ、中七下五で調べを取り戻すのは、字余りを成功させる正攻法のテクニクです。

勿論、上五の「の」を外せば1音減るのですが、この句の場合は「黄金週間の朝日」として「朝日」を限定する必要が

あります。色んな朝はあるのだけれど、「黄金週間の朝日」なのだという意味の押さえがあつてこそ、下五「救急部」という言葉に、読み手の心はハッと動くのです。

次々に運び込まれた救急患者、救急車の音、手術室のランプ、緊張の夜を終えて迎えた「救急部」の「朝日」に目を細めているのは、医師でしょうか看護師でしょうか。なんとか乗り切った充実感の中、嗚呼そういえば世間では「黄金週間」が始まってたんだ、という思いがふくふくとわき上がってきます。

家庭を持つている人物ならば、我が家の「黄金週間」の予定が心を過ぎていてるのかもしれないし、夜勤明けとなる「黄金週間」の一日をさあ、寝るぞ！と欠伸をしているのかもしれない。いずれにしても、下五「救急部」の一語で一句の世界をありありと立ち上がらせてつ、「黄金週間」という季語を主役として立てる作者の力量に感服した次第です。

## 地

**虫愛つる黄金週間のルーベ あつちやん**  
「黄金週間」の数日を趣味に使うという発想もありますね。この句の巧さは「虫愛つる黄金週間」という措辞で、過ごし方を述べつつ、下五で「ルーベ」というモノに焦点を絞っている点です。しかも

この8音の季語を中七の12音のなかに溶け込ませてしまう手法も見事！虫愛つるための「ルーベ」に、「黄金週間」という豊かな時間が象徴された、こころ楽しい作品です。

### 4Bと黄金週間一日目 大塚迷路

こちらも趣味系です。「4B」という数字とアルファベットの一語で、スケッチしてののだということを読み手に分かってしまうのですから、大したものですよ！

中七に「黄金週間」を置いているので、ここが字余りになってはいるのですが、「黄金週間一日目」というフレーズが混然一体となつているので、調べの点では全く気になりません。あつちやん&迷路さん、ベテランの技を盗んで下さいね。

### 黄金週間ああ累と象の糞 くろやぎ

季語「黄金週間」から、動物園へ発想を飛ばした人たちもいましたね。「象」を句材とした作品も何句かありましたが、その中からは「象の糞」の一句を金曜日

に推します。  
季語「黄金週間」の後に「ああ累」ととくれば、長い連休に疲れてゆく大人の心身と財布の中身……と一瞬思うのですが、この中七が実は「象の糞」の描写であることが分かった瞬間の愉快！「黄金」という字面のイメージが、「あ

あ累と」という中七、「象の糞」という下五の展開を、愉快に際立っています。「象の糞」の大きさ、ボタボタと落ちていく迫力が、まさに「ああ累累」ぢや(笑)。

### ゴールデンウィークペンギンの餌の放物線 あるきしちはる

こちらは「ゴールデンウィーク」という傍題の一句。「ゴールデンウィークペンギン」とカタカナが続きますが、上五が「黄金週間」では字面が重くなりますね。「ペンギン」に向かって投げる「餌」の「放物線」が、軽やかに「ゴールデンウィーク」という季語の明るさを表現します。

「ゴールデンウィーク」は9音。「餌」を「えさ」ではなく「え」と読めば中七が7音に収まりますので、下五「放物線」の6音があまり気にならなくなります。

### 黄金週間キレイに揃うイルカの歯 シツ女

こちらも動物の句材です。「黄金週間」の心楽しさ、明るさ、賑わいを「イルカ」という素材で表現しました。「キレイに揃う」という措辞が「イルカの歯」をありと描写。このリアリティが作品の魅力となりました。明るくい水しぶきに彩られた「黄金週間」です。

### 黄金週間NARITAへ向かうドーベルマン 紀貴之

季語「黄金週間」から海外への旅行を発想する句も多かったのですが、この手の発想の中で異彩を放っていたのがこの一句。「NARITAへ向かうドーベルマン」は犯罪捜査の警察犬か、はたまた災害現場で活躍する救助犬でしょうか。季語「黄金週間」にはこんな場面も存在するのだよ、という事実にハッとさせられる作品です。

### 黄金週間マンガローブの苗植えに ポメロ親父

海外に出掛ける「黄金週間」という発想は類想のど真ん中ですが、「マンガローブの苗植えに」と目的を述べるだけでオリジナリティを掴み取れる！という事実に、目からウロコな気分です。

ボランティア活動のための「黄金週間」であるという内容と共に、「マンガローブ」の一語で、どの辺りの国に出掛けるのかも想像させるテクニク、さすがだなあ！と思います。

### 歌舞伎座のロビーのをんな黄金週間 鈴木麗門

「黄金週間」を下五にもつてくるのはバランスが取りにくい型なのですが、「歌舞伎座のロビーのをんな」と焦点を絞っていく手法が成功しました。

## 初夏しよか

「歌舞伎座のロビーのをんな」とは、沢山の女ではなく、或る一人の「をんな」という意味でしょう。「黄金週間」の記憶として、なぜか脳裏に深く刻まれている「をんな」。下五に別な季語を置いても成立はしますが、「黄金週間」という季語に物語的な陰影を添えた異色の作品です。

### 黄金週間光まみれに過ごしけり

香山のりこ

季語「黄金週間」を描くためには、具体的なモノや場所や人物を配するのが定石ではあるのですが、思い切ってこんなやり方してみるのもアリ！なんだなあ「黄金週間」という限定された時間を「光まみれに」過ごすという心理的実感に共感します。

今年の「黄金週間」前に、紫外線にやられてしまったワタクシとしましては、「光まみれに過ごしけり」という措辞が、まことに眩しく羨ましい一句でありました(笑)。



## 天

初夏や跳ねては沈む野の兔 でこはち

兼題「初夏」を「しよか」と読むか「はつなつ」と読むかで、ずいぶん印象が変わります。火曜日「俳句道場」にも書きましたが、個人的な感覚としては、「初夏しよか」は時候という意味が優先する感じですが、「初夏はつなつ」は明るい光と風の匂いが吹き込んでくるような感覚です。

今週は「初夏」の素敵な句がたくさんあって、迷いに迷いましたが、掲出句を推す決め手となったのは躍動感です。上五「初夏や」の詠嘆から、「跳ねては沈む」という描写へ。何が跳ねて沈んでるんだろうと思ったとたん「野の兔」という生き物が飛び出してきました。この語順が一句の世界を生き生きと立ち上がらせます。試みに語順を替えてみましょう。「野の兔の跳ねては沈む夏はじめ」、述べていることは同じですが、一句の勢いは全く違いますね。掲出句の「初夏や」という切れ字の勢い、「跳ねては沈む」という描写のリアリテイ、「野」という広さを思わせてからの「くの兔」という生き物の焦点の絞り方。まさにあるべき言葉

が見事に選択され、適所に置かれています。

「跳ねては沈む野の兔」は「初夏」のひかりを弾きながら、あつという間に「野」のなかに消えていきます。その速さがまた「初夏」の躍動感となって、読者の心に清々しく印象付けられます。

## 地

初夏を乾けヒザ窠用の薪

ウエンズデー正人

これもいいなあ！なんといつても「初夏を乾け」という命令形が、明るくていい。何に向かつて命令してるのか？と首をかき上げたとたん、「ヒザ窠用の薪」がでてくるこの語順も巧いなあ。このフレーズによって、「ヒザ窠」の存在、ヒザの香り、踊る炎、弾ける「薪」、それを囲む人々などの映像が立ち上がってきます。

湿度をもった春から、からりと乾く「初夏」への転換が、前半の「初夏を乾け」で表現され、映像を持たない季語「初夏」が、提示された映像「ヒザ窠用の薪」によって生き生きと匂い立つてくる手法が鮮やか。これも「天」に推したかった作品です。

初夏の手押しポンプの水甘し

こりのらはしに

こちらは、映像を持たない季語「初夏」

を味覚で表現した一句。「手押しポンプ」というモノが、読者の脳内にて、この句の「水」の味を見事に再現させます。

この句の場合は「初夏や」ではなく、「初夏の手押しポンプ」とすることで、条件づけが成立。一年の中でも「初夏の手押しポンプの水」こそが甘いのだよ、という意味になります。このあたりの叙述もよく考えられている作品ですね。

ぱんつと抜く初夏いつせいに発泡す

トボル

「初夏(はつなつ)」ではなく「初夏(しよか)」のイメージをこんなふうを描くこともできるのだなあ、感嘆した一句です。「ぱんつと抜く」で、私はシャパンを想像したのですが、中七下五を読み通してみると、「初夏」そのものが「いつせいに発泡」するのだという発想が、実に爽快！ 時候の季語をイメージでもって一物仕立てにしてしまうとは！これも「天」に推したかった作品です。

青い実の初夏のひかりを身ごもれり

はまゆゆう

イメージという意味では、これも美しいですね。この「青い実」は「初夏のひかり」を身ごもっているのだよ、という発想がなんとも素敵です。「初夏(しよか)」という季語が「青い実」の存在をもっと表現されていて、この季語そのものの

美しい響きを改めて認識した次第です。

### 乳臭く遍くはつなつの原野 めいおう星

「初夏(しよか)」に対して「初夏(はつなつ)」は、新鮮なひかりと風を内包しているように感じるので、「はつなつ」と平仮名で書かれると、その感覚がさらに強くなるように思われます。

「はつなつの原野」という詩語に対して「乳臭く」という特有の感知が鋭く、この作家ならではの味わい。「はつなつ」という季語を持つ生臭さのようなものを、こんなふうに表示できるのだと感心しました。「遍く」の一語の広がりも一句に奥行きをもたらします。これも「天」に推したかった作品です。

### 初夏のひよこに小さき肉の冠

ジャンク堂

生き物の様子を述べることで「初夏」らしさを表現した句もたくさんあったんですが、この句の生々しさに惹かれました。「肉の冠」という措辞にハツとします。「ひよこ」の頭にでき初めている鶏冠をこう表現したとたん、それは紛れもない「肉」であるという事実を突き付けられます。こんな形で生命というものを「初夏」という生命が動き始める季節を表現できると思ってもいいかもしれません。

### 初夏の音なく浮かぶフリスビー

いもとやべえ

惹かれたのは「音なく浮かぶ」という描写です。「フリスビー」が空中にあるさやかな時間を、このように切り取る力量を誉めたい一句。「初夏」の明るいひかりの中で「音なく浮かぶ」という美しい違和感?とでもいうべき感覚をキャッチしているのが、俳人としてのセンスですね。

### 縦走の夜は丸く寝ぬ初夏の風 蘭丸

「寝ぬ」は「いぬ」と読みます。(意味は、寝る、眠る。)

上五「縦走」の一語で、状況を二挙に伝えます。「縦走」とは、登山で尾根根元いにくつかの山頂をきわめ歩くことを意味しますから、「縦走の夜」とは野外での仮寝。一日を歩き抜いての「夜」を、一人用のテントの中で過ごしているのでしょう。「丸く寝ぬ」という描写が巧いですね。「初夏の風」の心地よさを満喫しつつ、初夏の夜は更けていきます。

### グッピーのざわめく初夏の治験の夜

クズウジュンイチ

この句も「治験」の一語で状況を語っている点では、同じテクニクです。「治験」には、「治療のききめ。治療の効験」「治療試験の略」と二つの意味があります。「グッピーのざわめく」「初夏の」「治験の」

は、全て「夜」の一語にかかっていきます。水の中の「グッピー」のざわめきに、「初夏」の気配を感じ取っている作者の感覚も鋭敏です。

## 滴り

第112回 2015年6月1日週掲載

### 天

したたるしたたる樹海に鳥の声ゆがむ

Y音絵

今週の兼題「滴り」に関して、火曜日「俳句道場」にて以下のような解説を紹介しました。「下垂る」がことばの原義。夏に崖の岩肌を伝ったり、苔などにしみ込んだ水が雫となって真下にぼたぼたと落ちる清水をいう。(中略) 雨後の雫や鍾乳洞などの水滴は滴りとはいわない。」

季語「滴り」は名詞として使われるのが本来の形かとは思いますが、いきなり「したたるしたたる」と動詞のリフレインから始まる調べは魅力的です。原義が「下垂る」だとのことですから、動詞として使うこともあってよいだろうと思います。

上五「したたるしたたる」の後に出現する「樹海」の一語は、青木ヶ原の樹海を思わせます。1200年前、富士山の噴火により溶岩に埋め尽くされたこの地

が、動植物の命を育む環境へと変化していくために、大きな役割を果たしたのが苔である、もの本で読んだことがありません。念のためネットで調べてみると、以下のような記述も発見。

【樹海には多彩なコケ類が生えています。実はこのコケが樹海の環境にとって最も重要な要素の一つとなっています。なぜなら、薄い表土と多孔質な溶岩は雨水を地中に早く浸透させるため、樹木の生育に必要な水は保水力をもつコケが供給しているからです。】

ふかぶかと水をふくんだ苔からおちる清水の一滴。その美しさに思わず足をとめます。一滴一滴の「滴り」は、この地に生きるさまざまな命のたち。見上げれば「樹海」という名の天幕が頭上を覆います。「したたるしたたる」滴りのひかり、「樹海」のひんやりとした空氣の匂い、いきなり響きわたる「鳥の声」、その声を「ゆがむ」と聞き止める作者の感知。五感すべてで感じ取った「滴り」という季語の現場に、読者である私たちを瞬間にしてワーブさせる力を持つ作品です。

### 地

滴りと陽はさかしまに膨れけり

このはる紗耶

「滴り」というものを一物仕立てて表現しようとした句も沢山ありましたが、

## 高菜たかな

天

高菜畑月こわこわとなめてゆく 花屋

ううーむ、悩みました、今週の夏の季語としての「高菜」の個性をどう表現するのか、どう評価するのか。存分に悩ませていただきました。悩んだ末にこの句を推そうと決めた理由は、「高菜」という植物に対するイメージを共有できなからです。

夜の帰り道でしょうか。放っておくと手の施しようがないほどの大きさとなる「高菜」。それがひしめき合うように育っている畑の横を通る時、雲のあいだから急に「月」が顔を出したのでしょうか。雲を動かした風は、「高菜畑」をぐらりと揺らします。「高菜」の大きな葉の一つ一つに、月光がざわりと揺れます。帰途を急ぐ足が、思わず速まる一瞬です。「こわこわ」とは、「高菜畑」を通り過ぎる時の作者の感情であり、「月」への感情移入であり、一句の世界の手触りでもあります。ピリリと辛く苦い「高菜」ですので、「月」も「こわこわ」と舐めていってには違いないよ、という発想には怖ろしさもユーモアが入り混じっています。

「月」は秋の季語ですが、「高菜畑」と

この「豊足ノ村」がなまつて「託羅の郷」となったといわれています」という記述を見つけました。また北海道の小樽にもこの名の神社があるようです。

「豊足と言はれし山」の「滴り」の美しさ、心地良い冷たさ、甘露たる味が思われます。「豊足」という地名のなんと豊かなことかと感嘆いたしました。

滴りや河童橋まで走ろうか 津葦

「河童橋」はきつと、河童が出るぞと大人たちから脅されている橋なんでしょうね。「河童橋まで走ろうか」が誰かに向かつて発せられた言葉ならば、小暗い森の中で子どもたちの小さな冒険。自分自身のつぶやきならば、ここを通らなると帰れないお使いの帰り道かな、と想像しました。二つの読みがあること、一句が豊かになるタイプの句ですね。

滴りや黄河は何処より濁る 鞠月

一滴の「滴り」が大河となっていくという発想は、類想でんご盛りでしたが、中七下五をこう表現すると、類想の山から堂々と抜けだしてしまうのだなあと感心感嘆。「滴り」という季語の現場を鮮やかに描くというタイプの句ではありませんが、「黄河は何処より濁る」という措辞によって、「滴り」の一滴の清浄を逆説的に表現している点も、他の句との大きな違いでした。さすがだなあ、鞠月さん！

「巨樹」の洞に「をり」という状況までが、きつちりと描写できている点を誉めたいですね。「巨樹」の一語の存在感が、「滴り」という季語の鮮度をあざやかにします。

「うろ」は「洞」と書いてもいいかな……とも思うのですが、「ほら」と読まれたくないという意図もあるのかもしれない。悩ましいところです。

滴りやけものどわける水と影 うに子

奥深い森の中の「滴り」でしょう。その「水」を飲んだ人間の「影」が見えなくなると、「けもの」たちが「水」をもとめて「影」のような姿を現す、「けものどわける水と影」という措辞に詩的リアリティがあります。

滴りや往時五百の修行僧 てまり

「往時」の一語で一気に時間を巻き戻し、「五百」という数詞で当時の様子を描写するテクニクに感心しました。かつて、この「滴り」で口を潤しては荒行に励んでいた「修行僧」の姿をも彷彿とさせる作品です。

豊足と言はれし山や滴りぬ すえよし

どんな由来があるのかと調べてみると、佐賀県太良町名の由来として「肥前風土記によれば、景行天皇がこの地へ行幸の折「地ノ勢ハ少クアレドモ、食物ハ豊ニ足ヘリ。豊足ノ村ト謂フベシ」といわれ

描写力という点ではこの作品がぬきんでておりました。「滴り」の中に映り込んでいる「陽」を「さかしまに膨れ」と表現できたところが大いなる手柄。また、上五「うごと」はさりげない措辞ですが、中七下五の映像を成立させた影の功労者だと思えます。これも「天」に推したかった作品です。

滴りや沢筋青き山の地図 江戸人

こちらの「滴り」は岩肌を伝う水を思いました。「滴り」の傍らに開く「山の地図」。その「沢筋」を示す「青」が「滴り」という季語の持つ清涼感に似合います。地図を仕舞い、「滴り」を口に含み、一息ついてまた歩きだす姿もありありと見えてきます。

右肩に滴りを受け崖の道 笑松

一句一読、読み手が「滴り」を体感できるのは、「右肩」という部位の具体的提示のおかげです。「落ちる」「濡れる」ではなく「受け」という動詞の選択も巧いですね。下五「崖の道」によって、我が「右肩」が擦る岩や「滴り」に濡れるシャツの感触まで、追体験させてもらえた作品でした。

滴りをくぐりて巨樹のうろにをり

紀貴之

「滴り」を「くぐり」という動作から、

いう映像が先にありますので、夏の月であることは一目瞭然。「こわごととなめてゆく」という措辞が、夏の夜の少し腥い風の匂いを感じさせてくれます。

## 地

一畝は高菜の為すがままである

大塚迷路

もうこれは実感！というしかない一句。

「一畝は」の「は」という助詞によって、他の「畝」はちゃんとコントロールできている、つまり整然と耕され、作物が育っていることを伝えていきます。「為すがままである」という諦めが、いかにも「高菜」らしい実感です。

大いなる高菜紫紺の筋いくつ ぞかてい

「大いなる高菜」で軽く切れ、さらにクローズアップした「紫紺の筋いくつ」という映像がリアルに見えてきます。「いくつ」の3音に関しては、別の展開も考えられますが、ひとまず「高菜」の一物仕立てに挑んでくれた意欲に拍手を贈りましょう。

阿蘇を這ふ水脈無尽なり高菜折る

とおと

「高菜」以外の植物を入れても成立する句にはしたくない……となれば、「高菜」らしさを表現する言葉と組み合わせ

ていくしかありません。「阿蘇」が「高菜」の産地であり、「高菜」は摘んだり刈ったりするのではなく「折る」の点という知識をきつちりと使ってまとめている点が手堅い一句です。上五中七の「阿蘇を這ふ水脈無尽なり」も「阿蘇」の広さと豊かなイメージを表現。堂々たる阿蘇への挨拶句ともなっています。

高菜畑圧倒的な雲の脚

未貫

「圧倒的な雲の脚」という措辞に迫力があり、夏らしいエネルギーを感じさせます。「高菜畑」の上にもりもりと育っている入道雲が、本格的な夏の訪れを伝えます。「高菜畑」の緑と「雲の脚」の白とのコントラストも鮮やかです。

湯の宿の一家総出や高菜漬く スズキチ

「一家総出」で「高菜」を漬けているだけだとあまり面白くないのですが、「湯の宿の」という上五の限定によって、一句の場面にオリジナリティが生まれます。「湯の宿」を営む家族が、年中行事の一つとして毎年やっている作業なのでしょう。湯治で長逗留しているお客さんもやってきて、「これは何という青物ですか？」うちのほうでは見たことないなあなんて、珍しそに「高菜」を眺めているのかもしれない。「湯の宿」の御膳にならば「高菜漬」も想像させます。

桶に全身で押し込む高菜かな 睡花

「高菜」の大きな葉を一枚一枚丁寧に洗っていただくでも大仕事ですが、桶の中に押し込んでいく作業も大変。「桶に全身で押し込む」という語順によって、読み手も一緒に「桶」に頭を突っ込んで「全身」でぎゅーぎゅー「高菜」を押し込んでるような追体験を味わえます。語順の勝利ってヤツですね！

高菜は出来んよこは風の里だあ

関野無一

「風」の強い場所では「高菜」が育たないのかどうかは、不勉強にしてよく知らないのですが、「高菜は出来んよ」に続く「こは風の里だあ」という呟きに惹かれます。轟々と吹く風の音と、そこには生えない「高菜」を語ることによって、「高菜」を描く。逆説的な発想にもまた惹かれます。

高菜茹で強欲婆で押し通す みちる

ははは！伸びすぎるぐらいに伸びた「高菜」の茹で汁は、実に「強欲」な色をしてます（笑）。ぐらぐらと沸く大鍋そこに放り込まれる「高菜」、みるみるうちに赤紫色に変じていく熱湯。「高菜」の茹で汁の臭いが充滿する中に、すつくと立つ我等が「強欲婆」！「強欲婆で押し通す」という開き直りも好き！

高菜盛る昔話のやうな飯 理子

ははは！この「飯」の形容が面白い。「高菜盛る」は、高菜の葉っぱというよりは、高菜漬けがどんぶりにてんこ盛りしてある感じなんだろうな。「昔話のやうな飯」って、これまたどんぶりに山盛りてんこ盛りしてある飯なんだろうな。いきなり箸を握ってこの「飯」を食べ出すのは、龍の子太郎だろうか、三年寝太郎だろうか。いやはや愉快な作品でありました。

第114回 2015年6月15日週掲載

## 六月

## 天

六月の狂ったように咲く密度 藤紫ゆふ

2週間のお休みのあとの再開というところで、待ちかねて下さった皆さんからの投句は、投句者数560名。投句数は約2300句という嬉しい悲鳴！でございました。

兼題「六月」も面白い句が沢山届いて、

こころ楽しい選句でした。が、やっぱり時間かかるね、数が多いと〜（笑）。

「六月」というとすぐに思い出すのが正岡子規の「六月を綺麗な風の吹くことよ」という名句ですが、その一方でジ

メジメした鬱々たる季節のイメージもあり、一筋縄ではいかないのがこの季語です。「六月」の複雑な要素を内包している句を求めて悩んだ今週ですが、やはりこの句を推そうと決めました。

「六月の狂ったように」までは抽象的なイメージしか述べてないのですが、後半の措辞によって一気に魅力が噴き出します。「狂ったように」の後に続く「咲く」という動詞が絶妙。この一語によって「六月の狂ったように」という措辞が、何らかの花の形容であることが分かる。さらに「咲く密度」と畳み掛けることで、その花が怖ろしいほどびっしりと混み合っていることが分かる。一見抽象的に終わりそうな「狂う」「密度」などの言葉で、映像を描いてみせるという一種の荒技であります。

さらに季語「六月」は、「この時期に咲く花には白が多い」という事実を思い出させます。ありとあらゆる白い花が「狂ったように咲く密度」に、季語「六月」を感知する俳人のアンテナ。狂気という言葉には「白」が似合うのだなあと、改めてこの句を味わった次第です。

## 地

六月のはじめは灰の降るやうに

森 青菊

こんな感知もあるのだなあと、ハツと

させられました。明るい五月のあとにやってくる「六月」は密やかな「灰」を降らせているのかもしれないという発想に惹かれます。「六月のはじめ」という時候の季語を表現しているのは、「灰の降るやうに」という比喩のみ。このシンブルな作りも魅力です。

六月の空は六回脱皮する 山香ばし  
「六月の空」の目まぐるしく変わっていく機嫌を、これは夏の空へ向かって「脱皮」しているのよねと捉えるのが、実に愉快な発想。「六月」「六回」という数詞のリフレインが、発想の楽しさを演出します。

六月のシャレーに鬱を培養す Y音絵  
「六月」鬱」という発想の句は色々届きました。「鬱」の一語が発するイメージが強いものですから、この感情に引っぱられ、季語「六月」が添え物になってしまいがちな句材です。

が、掲出句は「六月」がちゃんと主役の位置に立っていますね。「六月のシャレー」には、微のような「鬱」が繁殖し、作者はそれを客観的に「培養」しているわけです。その視点が「六月」という季語をクローズアップできた一番の要因だろうと思います。

モディリアーニ泣きさう六月の画廊

おせどのすずめ

「モディリアーニ」の描く人物の表情は、まさに「泣きさう」な感じなのですが、それだけだとよくある発想に過ぎません。「六月の画廊」という措辞と組み合わせることで、「泣きさう」のイメージが後半にささやかな影響を及ぼします。「六月の画廊」そのものが六月の雨に包まれていて、「モディリアーニ」の絵も「六月の画廊」も「泣きさう」という措辞にひたひた濡れている感じ。この句も「六月」という季語が動きません。

六月の忌や鯨ペーコン色の空 くらやぎ  
私も「○○色の○○」という表現は好きなのでよくやるんですが、「鯨ペーコン色の空」にはやられました(笑)。この発想を巧く生かしているのが、「六月の忌や」という措辞。「忌や」というニュアンスがないと、季語「六月」と比喩「鯨ペーコン色の空」はうまく親和してくれません。このような言葉のバランスの微差を

実に鋭敏にキャッチできるのが、この作家の持ち味でもあります。  
以下、ご本人のコメントにも共感。

●先日なにかの弾みでふとこの懐かしい食べ物思い出し、その名前がこの数日頭の中を木霊のように響き渡っていてどうにも消えてくれません。脳味噌にこびりついたこの言葉に成仏していただく

めに謹んで一句したためました。／くらやぎ

六月の百葉箱に雨の熱 てんきゅう  
ややもすると尖鋭な表現ばかりを偏愛しがちですが、この句のように、普通の言葉を淡々とつなぐことで、リアリティのある作品を作れてこそ俳人だと強く思います。

中学生の頃、校庭の隅の「百葉箱」を開けた時の感覚が、否応なく蘇ってきました。傘を差して覗き込む時の、「百葉箱」に籠もっている湿気を「雨の熱」と表現できるところが見事です。「くのくに」という助詞の選択も、ゆるぎなく置かれるべき位置に置かれています。

六月のミニナガヤギの垂れる耳

マーペー

「ミニナガヤギ」という生き物を見たことがない人にも、この名前ならある程度の想像がつかます。その「ミニナガヤギ」の「垂れる耳」とさらに念押ししたところに、味わいがじわりと滲み出てくる一句。鬱たる季節「六月」には「ミニナガヤギ」の「耳」がさらに「垂れる」んだよ、といわんばかりのユーモアは、「六月」という季語のせいで少しブラックがかった味わいすら醸し出します。

「六月の傘」という発想はベタの中のベタではありますが、それ以外の部分の表現によって、いくらでも新鮮になれるのだなあとと思います。「六月の傘の骨」までは現実の光景で、「くから出帆せむ」は虚実の世界に船出していくような味わい。私は、「骨」が一本折れた「傘」に溜息をつきつつも、「出帆せむ」と己を鼓舞する人物を想像しました。今日もこんな「傘」を持ち歩いている人いるに違いないね（笑）。

六月のガスの火をあをく養生す 紆夜曲雪

この場合の「養生」は「病気やけががなおるようにつとめること」の意と読めばよいのですが、他に「作業箇所の周囲を保護すること」という意味もあります。一見全く関係のなさそうな後者のニュアンスが、意外にも良い作用をもたらしている点に興味を持ちました。

「六月のガスの火」の「あを」を見つめながら、熱いお茶を入れようとしているのでしょうか。汁物を温め直しているのでしょうか。この句にささかな陰影を添えているのが「あをく」という連用形の効果。仮に「六月のガスの火をあをし」と終止形にすると場面がはつきりと切れますが、「ガスの火をあをく養生す」は境界線が曖昧な感じになります。作者自身は自分の身を養生しつつ、「ガスの火」

を青く保つかのようにそこに佇んでいる（ガスの火の周囲を保護している）、そんなニュアンス。こういうフアジーな言葉の効果を嗅ぎ分けるのが、この作家は実に巧いですね。

いざ情死六月を待たねばならぬ 花屋

「情死／六月」というと、否応なく「太宰治の忌・桜桃忌」を連想させられます。勿論、作者はその連想を踏まえた上で、一句を鑑賞してもらおうと企んでいるわけです。

「いざ情死」と声高に語り、いやいや「六月を待たねばならぬ」と畳みかけられると、読者は否応なく太宰を思い浮かべ、何を気取ってるんだよ、いやいやひょっとすると「六月」という季語に何か特殊な意味があるのだろうか、なんて想像し始める。こうなるともう作者の思うツボ。「待たねばならぬ」は、そんな魂胆を秘めた措辞なのですよね、花屋さん。以下作者のコメントにも笑わせてもらいました。

●桜時は人目が多いし木芽時の錯乱と思われるのは嫌だし夏は腐乱が早いし秋は気取り過ぎだし冬は行き倒れと間違えられるし／花屋

金魚玉 きんぎょだま

天

ほろびのちとはの晴天金魚玉 とおと

こりや難しいのを選んでしまったなあと思いつつ、この作品の世界にうつつりと浸っております。

最初読んだ時、前半の平仮名表記の意味を読み取るのに少し時間がかかりました。勿論、それも作者の企みのうち。「ほろびのちとは」を「滅びの血とは」「滅びの地とは」などと読んでみた後に出現する「の」の一字に困惑し、再度読み直し、ハツとします。「滅びのち永遠の」という意味があぶり出されてきた時の鮮やかな驚き。

「金魚玉」の名句に、波多野爽波の「金魚玉とり落しなば鋪道の花」があります。「とり落とすなば」は「とり落とす」とすれば」という仮定の意味になりますので、実際に落としているのではなく、危うい硝子玉である「金魚玉」をもし落とすしてしまつたら……というハラハラする気持ち「とり落しなば鋪道の花」という美しい妄想を広げているのです。

季語「金魚玉」には滅びの美しさという詩的要素も内包されているわけですが、「ほろびのちとはの晴天」という詩語が

紡ぎ出す世界は、割りたくない「金魚玉」が割れるかもしれないという美しい緊張感に満ちています。さらにこの詩語は、人類の滅びの後の痛々しいまでに青い「晴天」をも示唆し、読み手の心を哀しく満たしていきます。

地

金魚玉しばらくながめはづしけり 雨月

「金魚玉」は、今でいう（金魚掬いで掬った金魚を入れて帰る）ビニール袋の役割をしたものですから、ここに金魚を入れて長く飼うわけにはいきません。でも、この硝子玉に泳ぐ金魚のひかりを樂しみたい気持ちもありますよね。「しばらくながめはづしけり」は、誰もが持つそんな真理をさらりと詠んでくれた作品です。

二尾ともに光る死角へ金魚玉 白豆

「金魚玉」は球体です。球体に水が入った時の不思議な屈折率がこんな光景を生み出すでしょう。特に普めたいのが「光る死角」という詩語。「へ」という助詞の働きで「二尾」の動きもゆつたりと見えてくるあたりが、上手い表現です。

金魚玉澄めり金魚の腸以外 Y音絵

「金魚玉澄めり」と言い切った後の視点の展開が巧いですねえ。「腸」は「わ

た」と読みます。こんなに澄んだ水の中で、たった一つ濁っているのが「金魚の腸」であるとは、なんと皮肉にして美しき生の証でありましょう。季語「金魚玉」の句に敢えて「金魚」という季語を持ち込んで、見事に成功させているのもさすがです。

### いつびき捨てて金魚玉またきれ

紆夜曲雪

死んだ金魚を「いつびき捨てて」、改めて「金魚玉」を眺めます。「金魚玉またきれい」は無情にして冷酷で美しい感想です。「金魚玉」の美しさは、死の穢れと接しているからこそそのものかもしれないと、改めて思わされた作品です。

### モルワイデ図法のやうに金魚玉

クズウジュンイチ

この比喩も秀逸でした。球体の「金魚玉」の中を泳ぐ金魚を目で眺めていくと、脳内には「モルワイデ図法」のような映像が形成されていくような感覚。

比喩は、AII Bであると断定するところに詩を生み出す技法ですが、AとBに落差がありつつ、読者を納得させる詩的リアリティが必要です。「金魚」と「モルワイデ図法」という取り合わせの妙。やってくれますね、クズウジュンイチ君。

金魚玉蕎麦掻き込んで南座へ 登美子

この「蕎麦」は涼しげなざる蕎麦でしょう。もう時間がないワ、と言いながら、急いで掻き込む「蕎麦」。店の窓辺にはこれまた涼しげな「金魚玉」が吊してあります。最後の「南座へ」で周りの光景が一気に立ち上がり、作者の目的も見えてくる。上手い下五です。

鏡台にマダムジュジュ瓶金魚玉 白豆

「金魚玉」にはノスタルジックな味わいもありますので、昭和とか町家とか妓楼とか、そういう単語に連想を飛ばした句もたくさんありましたね。そんな中、「マダムジュジュ」という商品名でそれらの気分を醸し出そうとしたのが、上手い工夫。「鏡台」「マダムジュジュ」「金魚玉」の三点セットが、良いバランスを作っています。

火星つて暑いのかしら金魚玉

多事@レイ・ブラッドベリ三回忌

こんな発想ありかと笑ってしまいました。レイ・ブラッドベリ三回忌に捧げるという発想に共感。涼しげな「金魚玉」を見上げながら、「火星つて暑いのかしら」と呟くような人、好きだなあ。

勿論「暑し」は夏の季語ですが、この句の場合は「火星」を夢想しての言葉ですから、季語としての力は弱く、むしろ「金魚玉」の涼しさを際立てる言葉とし

て機能しています。季重なりの成功例として、記憶しておきたい作品です。

## 南風

第116回 2015年6月29日週掲載  
みなみかせ

### 天

砂売りが幾度も通る南風 田中ブラン

季語「南風」を、明るく清々しいイメージで受け止める人たちが世間には多いのですが、実は「湿気を含んだあたたかい風」であることや「時に強烈に吹く」ということは、この季語の本意として押さえておきたい事項です。「南風」をリアルに描いた句を選ぶうと思っていたのに、この一句がどうにも心から離れてくれません。深読みしていることを承知で、今週はこれを「天」に推させて下さい(笑)。「砂売り」とはどんな仕事なんだろうと思つたとたん、安部公房著『砂の女』の世界にワーブしてしまいました。海の近くの砂丘に昆虫採集にやって来た男が、掘られた砂の穴の中に住む女の家に囚われてしまふ、という物語です。女の家は蟻地獄みたいな穴の中にあります。出入りするための縄梯子は、外の村人たちによつてはざされていきます。どんどん砂が崩れてくるので、砂掻きをしないと

ない家という状況の怖ろしさ、そこに住む女の砂嵐に爛れた目の怖ろしさが、強烈に脳裏に焼き付いています。

勿論、小説の中に「砂売り」はできません。が、『砂の女』たちが掻きだした砂を売り歩く男がいたかもしれないという幻想に、季語「南風」の皮膚感が生々しく蘇ってきました。

あれ、今日は「砂売り」が幾度も幾度も通ることだねえ。今日は「砂売り」から砂を買う必要はないんだけど、「南風」に吹かれた砂が家の中にもしきりに入ってくるよ。砂が「南風」の湿度で肌にしっとりとかくっついてくるよ。潮の臭いと汗の臭いが雑じるよ。舌がザラザラしてくるよ。砂の味がするよ。ふと窓の外を覗くと、我が家が蟻地獄の砂の中にあることに気付く……そんな妄想。

「砂売りが通る」(Le marchand de sable passe)とは、うつらうつら眠くなるというフランスの慣用句(砂売りが眼に砂をかけると人が眠る)なのだそうです。『ピーターパン』の物語では妖精のティンカーベルが、子どもたちに眠りの砂をかける場面もありますね。「砂売りが幾度も通る」うちに、「南風」の熱と湿度と砂にまみれたまま眠りこけていく自分を想像すると、さらに怖ろしくなつてきた作品でした。

わたつみを嗅ぎて白南風なほ熱し

有櫛水母男

「わたつみ」は「わたつみ」ともいいます。「海の神」を意味しますが、「海」そのものを言う場合もあります。「わたつみを嗅ぎて」ですから、この句の場合は「海を嗅ぎて」と読めばよいでしょう。「わたつみ」を嗅ぐと擬人化されているのは「白南風」。海の臭いをかいで「白南風」はますます熱を孕んでくるよという把握が、季語「南風」の本意を真つ直ぐに表現しています。

船足を南風に任せ握り飯 しげる

「南風」は時に強く吹くため、その船の針路にとつてもってこいの「南風」が吹き出せば「船足を南風に任せ」という状況も起こります。さあ今のうちに「握り飯」にありつこうではないか、という漁師たちの表情までもが見えてくる作品です。

ねっとり錆びつく錨海南風

問野ぶうちや

「ねっとり錆びつく錨」というモノだけを提示しました。「ねっとり」は「海南風」の熱と湿気と潮気と思わせる描写です。「錨」というモノが、下五「海」の一語に直結したとたん、潮の強い臭い

が立ち上がってきました。

鉄亜鈴臭きえんびつ南風吹く

神楽坂リンド

「南風」をこんなモノに感じ取る人もいるのですね。「鉄亜鈴」というモノを描くのかと思いきや、「鉄亜鈴臭きえんびつ」と嗅覚の情報が一句を支配します。「南風」の中にこんな臭いを感じ取れるのも、俳人ならではのアンテナです。

黒糖にわづかの塩気南風吹く 凡鑽

味覚によって「南風」を感じ取る人もいます。「黒糖」は強い甘みのかたまりみたいな印象がありますが、そこに「わづかの塩気」をキヤッチする舌の精度も大したものですよ。「黒糖」「潮気」「南風」の三つの言葉が、がっちり組み合わせられた作品です。

イスパニアに血と金の旗海南風 初蒸氣

「イスパニア」はかつてのスペインですね。スペインの国旗が「血と金の旗」と呼ばれていることを、私は初めて知りました。「国章の柱（ヘラクレスの柱）」に巻き付いた帯には国の標語であるフテン語「PLUS ULTRA (Plus Ultra) 「より彼方へ」の意」が記されている。新大陸発見以前は「Non Plus Ultra (ここは世界の果てである)」と記されていた」というネット辞書の解説を読んで、さらに、ほお

と納得。下五「海南風」は「より彼方へ」という思いを受け止めて、さらに夏の熱気を帯びていくのでしょうか。

海南風遺跡に埋まる明の銭 檜の木

同じ「海南風」ですが、中国系の句もありました。「遺跡に埋まる明の銭」は、かつて「海南風」に乗って貿易をしていた時代の「銭」なのでしょう。錆び付いた「銭」には、海の湿気の臭いがするに違いありません。

黒南風や那覇空港は灯油の香 灰色狼

「黒南風」は雨を連れて来る黒い雲を運ぶ風です。「那覇空港」に降り立った瞬間の、熱気と湿気の印象の中に「灯油の香」を嗅いだ、あるいは風の印象をその嗅ぎ取ったという一句。「黒南風」の広がり方と「灯油」の臭いが不穏な思いを掻き立てます。

白南風に二帆の行く一行詩 登美子

「白南風」は黒い雲を吹き払ってくれる南風です。「白」の一字が中七下五「二帆の行く一行詩」という詩語を美しく彩ります。「二帆」の一語で帆船の姿を、「帆」「二行詩」という数詞の調べもいいですね。「白南風」ならではの味わいの一句です。

孕みたる蝶の体温南風吹く めいおう星

「孕みたる蝶の体温」という微細な温

度によって「南風吹く」という季語を表現する感覚と発想に驚きました。「人選」にいたっていた中に、「未だ濡るる触角に聞く南風／空」「南風吹く展翅の針のふるへたる／ウエンスデー正人」の二句もあり、季語「南風」にこのような発想を促す要素があるのだなあと、納得もいたしました。

掲出句を「地選」に推したのは、「孕みたる蝶の体温」という熱のリアリティが、季語「南風」の湿気と熱気を表現している点です。「孕みたる蝶」の高めの体温を想念の世界にキヤッチできるのが、この作家の鋭敏な感知。季重なりを見事に成功させた作品です。

第117回 2015年7月6日週掲載

## 目高

天

水騒ぐ目高生まれたかもしれぬ 勿忘草

知らない人はいない兼題「目高」ですから、類想類句も多かったですね。類想類句が多いと、自作との比較によって句想や叙述の巧拙を学ぶことができます。さあ、今週の天に推した句をご一緒にながめていきましょう。

まずは上五「水騒ぐ」からの展開、な

かなか面白いです。いきなりの「水騒ぐ」ですから、湖や川のような「水」から柄杓一杯の「水」まで想定できるのですが、中七「目高」という季語から光景が一気に立ち上がります。

いつもの水槽の「水」が、いつになく騒いでいるように感じられるある日、ある朝。水槽にしずかな力が満ちているような気がする瞬間。ひよっとすると、これは今、ぞくぞくと「目高」が生まれているのかもしれない！と思う心の動きが、詩的リアリティとなつて読み手の心に広がります。

騒ぎ始める「水」は夏の光にさらさらと反応します。小さな「目高」の小さな命がつきつきに孵化してゆく光を、読者の心はそれぞれにキャッチしていきます。親目高たちが歓び跳ねて「水」がさらさらと騒ぐ今朝は、平然と卵を食い始める残酷な夏の始まりでもあるのだと思うと、一句にはさらなる陰影が生まれます。

## 地

### 緋目高の心臓太陽の律動 檜の木

「緋目高」の透きとおった体の中にある「心臓」と、頭上にある「太陽」がドクンドクンと脈打つ「律動」。この二つが一瞬にしてスパークするのが、この十七音詩の魅力です。対句の形が句想をうまく表現しています。

### 緋目高のみづ怖がつてゐる尾びれ

三島ちとせ

「緋目高」たちのおどおどした様子は「みづ」を怖がつているのだ！ということに気付く。その発見に詩があります。心情的な「怖がつて」だけではなく「尾びれ」へ焦点を絞ることで映像が確保できる点も巧い叙述です。

### 川あれば子ら子らあれば目高ある

江戸人

今の「子ら」の様子というよりは、昔前の「子ら」の日常というイメージでしょう。懐かしい光景をパッキングした一句ですね。「川あれば子らあれば」という叙述によつて絞り込まれていく映像の作り方も上手いですね。

### 甕壁に目高の鼻のぶち当たる 木好

「目高の鼻」つてどこ？という単純な疑問も生じてはくるのですが、つーんと泳いできた目高が「甕壁の壁」の前まできて、はたと止まる時の表情が、まさにこんな感じです。「ぶち当たる」が大袈裟といえは大袈裟ですが、「目高の鼻」という表現の愉快が、一句の味わいを広げます。

### 目高散りさみしき昼に囲まれり 葦信夫

「目高」というベツトは、飼い主と直接触れあつてくれる生き物ではなく、生

きている様子を飼い主が勝手に愛でる、という類いの関わりです。何の意図もなく、泳ぐ「目高」の影と光が散り散りになるさまに、「さみしき昼」を実感する心情に共感します。

さらに、下五「囲まれり」という叙述によつて、作者自身が単純に「さみし」と言っているのではなく、「さみしき昼」という時間と空間がひたひたとそこに在ることを述べている点も巧いと思います。

### 身もれる目高と笑はない少女 とおと

「身もれる目高」と「笑はない少女」という二つのフレーズが取り合わせられているだけですが、それぞれの言葉がイメージの上からみ合つてくるのが、この句のからくりです。「身もれる」のは目高なのに、その一語のイメージがさざなみのように「少女」の一語に及んできます。さらに同じように「笑はない」のは少女なのに、「目高」も笑わないまま身もつているような、ささやかな不気味。そんな言葉マジック。気がつけば痛々しい日常が水槽越しに在ることに気付く……という作品です。

### 抹香のごとく目高の餌降らす

神楽坂リンダ

さつきペランダの「目高」に「餌」をやつたばかりなんで、まさにこんな感じやくと納得してしまいました(笑)。3本の

指でちよいとつまむ「餌」の感触も、なるほどいわれてみると「抹香」のようでもあります。「抹香」と「目高の餌」をイコールで結ぶ、比喩の発想を楽しませてもらいました。

### 今日突然見なれぬ目高現る 井上じろ

実際に睡蓮鉢で「目高」を飼っている人間として、これは実感の一句です(笑)。毎日、ちゃんと目高の数を把握して、餌を食べる姿を楽しんでいるにもかかわらず、なぜかある日「突然」に「見なれぬ目高」が鉢のなかを泳いでいたりするのです。なんで？ いつ生まれた？と思うのですが、悩もうが何であろうが、そこに「見なれぬ目高」がいることは事実。不可解なまま愛で始めるといのが、不可解な「目高」との付き合いなのです。

### めだか殖ゆ肉屋に貰うて医者に遣る

有櫛水母男

「肉屋」から貰つて「医者」にあげるという展開に、妙なりアリティがある作品です。「めだか殖ゆ」という動詞の使用方も適切ですね。殖えて殖えて困つてるといふようなことは一切述べず、「肉屋に貰うて医者に遣る」というフレーズが、妙にリアル。生きてあつた命を売る「肉屋」から、生きてある命を救おうという「医者」へという展開も、ものを思わせる仕掛けです。

# 登山

とざん

豪雨の登山ふれたれば遭難碑

理酔

兼題「登山」には「登山宿・登山小屋・

山小屋・登山杖・登山笠・登山帽・登山馬・登山口・登山地図・ザイル・寝袋」等の傍題があり、例句を調べてみると傍題を使った句のほうが圧倒的に多いという話題が、火曜日「俳句道場」に寄せられていました。となれば今週の天には「登山」という季語をそのまま使った句を推すべきではないかと、探したのがこの句です。

一句の調べは、七五五。「豪雨の登山」の七音が読者を否応なく豪雨の中に引きずり込みます。そして、いきなりの「ふれたれば」という措辞。「豪雨」で視界がきかない中での「登山」ですから、足を取られそうになって、思わず何かに縋ったという状況かもしれませんし、何気なく手に触れるものがあつたという状況も考えられます。何か硬いもの、冷ややかなものに触れてみると、それが「遭難碑」であつた！という驚きに、読者の心も揺れます。

「遭難碑」の石の肌には流れるような雨が降りしきります。かつてここで亡くなった山男たちがいたという事実が「登

山」という季語の持つ危険性を再認識させます。「登山」というナマな季語の現場が、「豪雨」という状況、「遭難碑」というモノ、「ふれたれば」という手触りで立ち上がってくる見事な作品でした。

## 地

登る吾に縄文杉は去ねと言う

理酔

同じ作者の句で、逆に「登山」といわずして登山を描く句もありました。「登る吾に」だけで登山とは分からないのですが、「縄文杉」の出現で、登山のみならず屋久島という土地までもが一気に見えてきます。こういう荒技ができるってのが、ベテランの巧さ。「縄文杉は去ねと言う」という擬人化が浮ついておらず、ズシンと読み手の心を打ちます。

登山道朽ちた鎖の臭いかな

理子

「登山道」の様子を視覚的に描写する句はたくさんありましたが、「朽ちた鎖の臭い」のみで「登山道」を描いている点にリアリティがあります。鎖場のような場所を思ってもいいですし、転落防止の柵が朽ちている光景を想像してもよいのですが、「登山道」という季語には「朽ちた鎖の臭い」がするものだよ、という詩的定義として読んでみるのも面白いですね。

## 修験者の跳びし裂け目や登山道

金子加行

かつて「修験者」たちが修行をつんだこの山には、様々な言い伝えの残る場所があるのでしょうか。この深い「裂け目」を跳んで、千日の修行を積んだそうだよという話を聞きながら、登っていく「登山道」かもしれせん。「跳びし裂け目や」という中七の叙述と詠嘆が巧い作品です。

次の歩の位置をまさぐる登山靴

樹朋

「登山靴」の一物仕立て。「次の歩の位置」のあとに出現する「まさぐる」という動詞にリアリティがあります。下五に「登山靴」という季語が出てきた瞬間、「まさぐる」という感触が我が靴底にありありと蘇ってきます。

登山靴へ次々纏わる小さな死

初蒸気

「登山靴へ」という措辞がどう繋がっていくのか、興味をそそられながら中七下五へと読みを進めると、その意外な展開に驚きます。「登山靴」に踏まれていく生き物の「死」を「小さな死」と捉えたのでしょうか。「登山靴」が巻き込まれる「大きな死」を連想させるところが不気味な作品です。

強靱な登山靴ひたひた迫る

登美子

後ろから追ってくるかのような「登山靴」を想像しました。へばりつつ、ゆっ

くりと登っていく自分の足音とは違う足音が、かすかに聞こえてきて、やがてどんどん近づいてくるのです。「強靱な登山靴」とは、強靱な足音で近づいてくる登山靴の意を省略した独自の表現。「ひたひた」のオノマトペがベストかどうか少し迷ったのですが、心理的な表現として受け止めました。

登山馬を遣り過ぐす間の花図鑑

紀貴之

「登山馬」には、少しのんびりとした気分があるかと思いますが、その気分が中七下五でうまく表されています。「遣り過ぐす間の」によって、そこにいる人物の動作や表情もみえてきます。最後にでてくる「花図鑑」が一句の光景に彩りを添えます。

歯磨きの猛者奮めける登山小屋

奈津

朝の慌ただしい「登山小屋」を「歯磨き」で表現する発想にオリジナリティがあります。一瞬「歯磨きの猛者」か？と思わせておいて、山の「猛者」たちが歯磨きをしている場面だと分かる展開も愉快。「奮めける」が「山小屋」の朝を活写しています。



ひやくものがたり

# 百物語

## 天

猿の爪のごとく黒き夜百物語 ねこ端石

「百物語II夜」という発想はベタですが、こんな比喻が入るだけで、作品は一気にオリジナリティを取り戻します。

「猿」の一字から始まりますから、読み手の脳内には当然「猿」の姿が浮かぶのですが、すぐに「猿の爪」という部位に焦点が絞り込まれます。おー「猿の爪」かと思つた瞬間に「〜ごとく」と比喻を表す一語が入り、さらに「黒き夜」が出現する語順は、読み手の脳内にさまざまないメージが立ち上がらせませす。

「猿の爪のごとく黒き夜」という夜の描写、巧いですね。「猿の爪」の黒さをよくよく見たことはないのに、こんな爪を知っているかのような錯覚を起こさせるのがこの句の不敵な企み。さらに下五にて出現する季語「百物語」は、上五中七の世界を二気に巻き込んで、腥い猿の息をも思わせるリアリティで読者を翻弄します。

似たような言葉を使った句はありましたが、一句の持つ世界の深さという意味において、この作品は一步抜きん出ておりました。

## 地

百物語固唾のやうに蠟融けて

このはる紗耶

「百物語II蠟燭」という発想の句はさらに山のようにありましたが、この句も一カ所に比喻を入れただけで、必要な分量のオリジナリティを手に入れています。「百物語」を聴くときにありがちな「固唾を飲む」という慣用句を、「蠟」の融ける比喻に転用するのも、詩を発生させるテクニクの一つです。

聴き慣れぬ声美しき百物語 今野浮儚

「百物語」という季語の成分のかんりのパーセンテージを「怖ろしさ」という感情が占めているわけですが、その怖ろしさを表現する時に、逆にうっとりとし美しものを取り合わせてみる手もあります。

誰かが語り出した何話目かの「百物語」。この「美しき」声は誰なのだろう、「聞き慣れぬ声」であるよ、という思いの底からじわじわと恐怖がせり上がってきます。いるはずのない人がいるという発想の句も勿論あるのですが、「声」に絞った表現によってリアリティを獲得しました。

伽羅匂ふ口百物語終へてより とおと

嗅覚で「百物語」という季語を表現しようとした句もありました。この作品の特徴は、「百物語」という場に「伽羅

匂」が匂っているのではなく、「百物語」を語り終えた「口」から匂ってくるという美しい怖ろしさ、冷やかな妖しさ。「百物語」を語っていた人物こそが、最後に出てくる「あやかし」そのものであった……という恐怖かもしれません。

かわきりの百物語くどやくどや 破障子

こんな愉快もあつていいでしょう。これから「百物語」を語るといふのに、「かわきり」の一話目が長くて長くて、皆うんざりとしているのです。「くどやくどや」のリフレインが可笑しみを誘います。

百物語戻りし席にすでに吾 白豆

いるはずのない人がいるという発想はありますが、そこにいるのが「吾」であるという不可解な怖ろしさ。いきなり「吾」でなくなっている「吾」という不条理を、「百物語」という季語がひたひたと包みます。

氷漬けのははの半眼百物語 登美子

季語「百物語」に対して怖ろしいモノを取り合わせるといふ手法の句も色々ありましたが、「氷漬けのははの半眼」という発想に肝を冷やしました。「氷漬け」と夏「百物語」の対比、耳で聞く「百物語」に対して「半眼」といふ表情の怖ろしさ。「氷」の中の眼がうつすらと開いていきそうな恐怖が、読み手の心を襲います。

百物語こゑにうつすら海藻が Y音絵  
かなり感覚的な発想ですが、「百物語」を語っている「こゑ」に「海藻」が絡んでいるかのようなという比喻の一句。「海藻」の一語が濡れた触覚、潮の匂いなど五感を触発する仕掛けも見事です。語っている人物の足元はじつとりと潮濕りしているに違いありません。

百物語尽きて覺のぶよぶよと 西田克憲

「百物語」という季語の成分には、湿度もあります。「百物語」が尽きたとたん、足元の「畳」がいきなり「ぶよぶよ」と湿気ていくという生々しさ。皮膚が感じ取る湿度で恐怖を表現することもできるですね。昨日の「人選」にいたいた「百物語果ててそそけし畳かな／破障子」も言葉は似ているのですが、「尽きて〜ぶよぶよ」という湿度の実感が勝つているといえるでしょう。

抽斗に二千三百物語 ひでやん

こりゃあ、凄くて怖ろしい！いくらでも怖ろしい話は蓄えているというのですね。「抽斗」を開けて、さあ今夜はどの話から始めようかと考えている人物を思うと、可笑しくも怖ろしい一句。「二千三百物語」という季語のアレンジが、まさにコロンブスの卵的な作品となりました。

# 葛餅くずもち

## 天

低気圧来て葛餅のうすにぎり くらやぎ

「葛餅」には吉野の葛を使った関西の「葛餅」と、澱粉を使って発酵させる関東の「久寿餅」があるという話題で、火曜日の俳句道場は賑わいました。

どちらの葛餅なのか分かるように作り分けるのが無難な方向だと思っただけですが、この句は両方の「葛餅」に共通するイメージをつかみ取っています。

「葛餅」の特徴である「うすにぎり」に対して、「低気圧来て」と葛餅には全く関係のない事象を取り合わせます。関係のない二つの言葉が一句の中で取り合わせられると、そこには小さな言葉の花が発生します。人は、それを詩と呼ぶのです。

この句は「葛餅」を切る前の状態ではないかと読みました。うまくできあがった「葛餅」の美しい「うすにぎり」。刃を入れようとするとき、ふと「低気圧が近付いており天気は下り坂です」というニュースの気象予報官の言葉が頭をよぎったのかもしれないし、「葛餅のうすにぎり」を眺めながら「低気圧」ってこんな感じのものかな、なんて空想した

のかもかもしれません。

涼やかな「葛餅」の印象をストリートに描くのではなく、雨の来そうな空模様を思わせることで、ここ数日の好天や暑さを匂わせるあたりがニクイ技ではありませんか。

## 地

葛餅の切りくち凜としてうつろ

はまゆう

「葛餅」の「切りくち」を「凜として」と涼やかに表現する発想はあるかと思いますが、最後の「うつろ」の一語が巧いですね。「葛餅」を口に入れた感触や、その色合いの印象がこの一語にて実感されます。

葛餅や井戸の木桶に袖濡らし

今治の代行運転

「葛餅」の涼やかな印象をどう表現するか、いろんなアプローチがありましたね。水を詠み込んだ句もたくさんありましたが、「井戸の木桶に袖濡らし」という措辞が、実に涼やか。冷蔵庫のない時代、冷たい井戸水で冷やしていた時代を思わせる作品です。

葛餅は夜の小雨の味がする 竹内青雨

食べた感触を表現する方法もあります。蜜や黄な粉のかかってない部分の「葛餅」の味って、たしかに「夜の小雨」みたいに冷やかだけど、味があるようなないような……味だなあと、納得します。余談ですが、かつてワタクシは「葛餅は龍の目玉の味したり」と比喻で表現したことがあるのですが、今回の兼題を出すに当たって、自分が「葛餅」だと思っていたのは、実は「葛饅頭」だったことを知りました。が、竹内青雨さんのこの句に出会って、「夜の小雨」の味は「龍の目玉」の味に近いのではないかと、ちと勇気をもらった次第です（笑）。

葛餅のひとつは富士のやうに立つ

まどん

これは関東風の硬いほうの「葛餅」だなど思わせるのが、「富士のやうに立つ」という比喩の力。三角に切って小皿に盛りつけてみると、なんとも立派に立ち上がった「葛餅」。実に痛快な一句です。

「ひとつは」という措辞によって、そこには三角に切られた無数の「葛餅」があることを示唆するテクニクも見事です。

葛餅や鎌倉にけふ日陰なし 今野浮儂

こちらは、比喩としてではなく、ズバリ地名を詠み込んだ作品。「葛餅」の涼やかさを表現する方法として、「鎌倉にけふ日陰なし」＝鎌倉は今日も夏の日差しが厳しくて暑いですよ、という措辞を取り合わせる、実に巧い語り口です。

下五「日陰なし」と言い切った後で、日陰と冷たい「葛餅」に惹かれて店に入っていく作者の姿も想像させます。これも「天」に推したかった作品です。

これがあのごろごろ水の葛餅か

あるきしちはる

今週のお便りで「ごろごろ水」、実は吉野葛で有名な奈良県吉野郡天川村に湧く名水であります」という情報が届いていました。「ごろごろ水」という呼び方が愉快であると同時に、「これがあの」という措辞によって、「ごろごろ水」という名水の湧く土地の有名な「葛餅」という思いが端的に表現できています。「ごろごろ水」の語感と、「葛餅」の食感の対比も楽しいですね。

葛餅や山門に礼僧に礼 酒井おかわり

「葛餅」を名物としている寺町の光景でしょうか。用あつて訪れた山寺にて「葛餅」を振る舞われた帰り、かもしれません。僧手作りの「葛餅」をいただくつつ、清談のひとつき。辞する際の「山門に礼僧に礼」と畳みかける措辞もまた涼やかな一句です。

葛餅や葬らるるによき日陰 Y音絵

「葛餅」という季語から、己の死を発想した句が二句ありました。まずはこちらですが、「葬らるるによき日陰」とい

う措辞に驚きます。心地よい日陰の下の床几にて「葛餅」を食べながら、葬られるのならこんな日陰がいいなあ、なんて思ったのでしょうか。「葛餅」の涼やかな食感が、ふと、こんな思いを持たせたのかもしれない。

### わたくしの忌の葛餅をくださいな

紆夜曲雪

さらに空想的なのがこの一句。「わたくしの忌」に作られた「葛餅」を欲しがるという発想に惹かれます。時間軸をねじ曲げることによって詩を発生させるテクニクを見事に使いこなしています。

(蜜と黄な粉をかける前の)「葛餅」の存在しているようなしてないような味わいが、虚実のあわいに漂うような発想を生み出したのかもしれないね。  
**葛餅の冷たいんだか鈍いんだか**  
クズウジュンイチ

一読笑ってしまいました。これも蜜と黄な粉をかける前の「葛餅」に対する正直な感想だと思います。「葛餅」という言葉は涼やかな印象を持つるのに、実際に食べてみると「冷たいんだか鈍いんだか」ってつぶやきたくなるような食感。正直なつぶやきも詩になりますね(笑)。

## ハンカチ

天

ハンカチになったかもめを胸に挿す

ぼたんのむら

手を拭いたり、お洒落として使ったり、「ハンカチ」には様々な用途があります。夏、の季語となつていることを考えると、汗を拭くことが印象として大きな部分を占めているためかと考えられます。

が、そのみを強く押し出すと「ハンカチ」ではなく「汗拭い」でもいいんじゃない?ということになりかねません。「汗拭い・汗ふき・ハンカチ・ハンケチ・ハンカチーフ」など傍題のニュアンスを意識しつつ句作することが肝要な兼題でありました。

掲出句を「天」に推したい一番の理由は、夏らしい爽快感を持つていることです。その爽快感を演出しているのは「ハンカチになったかもめ」という比喩表現。この比喩から読み取れるのは、白いハンカチであること。そして「かもめ」の羽のようにピンと「胸」ポケットに挿されていること。光景としては、お洒落のために「胸」に挿した「ハンカチ」があるだけです。その涼やかな表情がいかにも夏らしい作品ですね。「ハンカチ」とい

う季語が、こんなお洒落な比喩によって表現されることのカッコよさに脱帽した一句です。

地

ハンカチの薔薇日輪のごと濡れし

紆夜曲雪

今週はのつけから比喩の句ばかりが並ぶのですが、特に比喩が好きだから選んでいるというわけではありません。秀逸な比喩の句が沢山あったので、必然的にそうなつていただけです。

この句の比喩にもうっとりさせられました。「ハンカチ」に描かれている「薔薇」がまるで「日輪」のように濡れているというのです。手を拭いた後のちよつと湿つた「ハンカチ」でしょうか。薄手の「ハンカチ」を太陽に透かすと、こんなふうに見えることあるなあという納得のリアリティ。「薔薇」の図柄もまた鮮やかに見えてまいります。

ハンカチをソルベのように選ぶ妻

ジャンク洞

「ソルベ」とは、シャーベットのことなのだそう。シャーベットを選ぶように「ハンカチ」を選ぶとは、なんとも楽しそうでカラフル!「ソルベ」という響きがオトナっぽくて、これまたカッコイイ作品です。「ハンカチをソルベのように選ぶ妻」

を見る夫の視線も優しく素敵!

夜の砂丘よりなめらかなハンカチ買ふ

Y音絵

「夜の砂丘」のひんやりとした感触と砂の「なめらかな」手触りが、絹のハンカチを思わせます。「夜の砂丘」という比喩がオトナっぽいイメージを演出。「より」と比較することによって生じるタイプの比喩の手法を見事につかひこなした作品です。

アイロンの蒸気に匂ふ花ハンカチ

山西琴和浦

「アイロンの蒸気」の匂いがありありと我が鼻腔に蘇ってきました。下五「花ハンカチ」という表現がやや寸詰まりな感じもしますが、上五中七の表現のリアリティに共感。「匂ふ」の一語が、実に巧い描写です。これも絹のハンカチを想像しました。

ハンケチを花のごとくに使ふひと

大塚迷路

これも比喩ですが、季語そのものを比喩するのではなく「ハンケチ」を使う仕草を比喩するという発想にオリジナリティがあります。四角く折りたたんだまま使うのではなく、くしやりとつかんでいるんだけど、実に美しい形にみえる。そんな感じを想像しました。「ハンカチ」

ではなく「ハンケチ」という傍題を選んでいる点も効果的です。

リースハンカチ老嬢めきて黄はみゆく  
雪うさぎ

こちらの比喩は、「リースハンカチ」を人間に喩えるという発想。「老嬢めきて」という詩語を「黄はみゆく」という描写が支えます。下五のリアリテイが比喩表現を確かなものにしていくわけです。

私はアガサクリステイーの小説に出てくるミスマーブルのような「老嬢」を想像しました。ほんとに今週の比喩の句には舌を巻くばかりです。

あだ名は赤おに汗ふきはくしやくしや  
雨月

やつと出てきた汗系の一句。こちらは「ハンカチ」というよりはやはり「汗ふき」という傍題を選ぶべき内容ですね。「あだ名」は「赤おに」ですから、汗かきでいつも顔を真っ赤にしている人なんですよ。「汗ふきはくしやくしや」と畳み掛ける対句表現が楽しい！

小一にハンカチ大き過ぎまいか

マーペー

こんなつぶやきも俳句になるのだから！小学校二年生には、ランドセルも制服も帽子も何もかも大きすぎるように思えるのですが、持たせる「ハンカチ」に

までも「小一に」大き過ぎまいか」といつつぶやいてしまう親心。いやなに、ご心配は要りませんよ。この夏の汗を「ハンカチ」はたっぷり吸い込んでくれるはずです。

忘れ物またタミさんのハンカチね

らっこマミー

人名の入った句も幾つかあったのですが、一読した瞬間、アルアル感に笑ってしまいました。なぜ「忘れ物」が「タミさん」のだと分かるのか。「また」とありますから、タミさんは忘れ物の名人なんでしょう。いつも持ってくる「ハンカチ」に特徴もあるのかもしれない。「タミさん」が愛用しているのは、ガーゼのハンカチでしょうか、タオルでしょうか、はたまた高級な絹でしょうか。いろんな「タミさん」が想像できて、楽しませてもらった一句です。

第122回 2015年8月10日週掲載

蟋蟀  
こおろぎ

天

蟋蟀に寄れば沃土が匂ひけり

有櫛水母男

文語「寄れば」には三つの意味があり

ます。「寄ってみると、寄ったので」という確定条件(原因理由)、「たまたま近寄ってみると」という偶然条件、「近寄るときはいつも」という恒常条件の三つです。どの意味を選択して解釈鑑賞するかは、読者に任されているわけですが、私としては、三つ目のニュアンスで読みたいなあ。

「沃土」とは、地味が豊かで作物のよくてできる土地を意味します。「蟋蟀」の声に誘われるように近寄るときはいつも豊かな土が匂うのだよ、と鑑賞したい一句です。

「蟋蟀」はほとんどが夜行性ですから、この季語には夜の感触があります。鳴き始めた「蟋蟀」、夜のささやかな涼気、暗く湿った土の感触、そこに匂ってくる「沃土」。この土の豊かさがたくさんの「蟋蟀」が育っていく基となっているに違いないと思うのと同時に、この地における膨大な数の「蟋蟀」の死もまた、「沃土」の一部として循環しているに違いありません。

じっくりと読めば読むほど、深みの増してきた作品でした。

地

蟋蟀や埃まみれの後ろ脚 風ひと葉

この「蟋蟀」は家の中に迷い込んだヤツなのでしょ。箆笥や本箱の後ろに隠れて鳴いていたのが、ひよんな拍子にピョ

ンと飛び出しきたのでしょ。よくよく見ると、「後ろ脚」が「埃まみれ」だよという小さな発見。こんな「蟋蟀」見たことあるある、という実感の一句です。

蟋蟀群れる蟋蟀という字のごとく

とりとり

「く」という字のごとく」という発想の句は時折見ますが、「蟋蟀」という字は「蟋蟀」が群れている様子みただといわれると、まさにそんな字に見えてくるから愉快です。一匹の「蟋蟀」ではなく「群れる」という状況を想像すればするほど、この字面に納得させられます。

聞喰ふが故こほろぎの腹は臆む 三重丸

基本的には夜行性ですから、「こほろぎ」に「聞」のイメージはつきものですが、「聞喰ふが故」という比喩に詩的リアリティをもたらしているのが「腹は臆む」という下五の幻想です。「こほろぎ」という生き物が持つ、ある種の禍々しさをこんなふうに表示する句があってもよからうと思えます。

こおろぎや昼の太陽知らんぶり

麦花

こちらは昼の「こおろぎ」です。うつかり出てきたか、何かに驚いて石の下から飛び出してきたか。わざわざ「昼の太陽」という必要はないと考えるむきもあるでしょうが、「夜の月」に対して「昼

の太陽」とはという寓意を含んだ対比だと読めばよいでしょう。

「こおろぎ」の困惑に対して、「昼の太陽」は「知らんぷり」したままだよ、という絵本のような可愛い作品です。

### 銀ブラの果て蟋蟀の蕎麦屋かな ぐわ

都会の「蟋蟀」をこんな具合に軽やかに描けるとは、見事です。「銀ブラ」の二語で状況を、「果て」で時間経過を語るテクニク。下五「蕎麦屋」という着地点も鮮やかです。老舗の「蕎麦屋」に代々住み着いている「蟋蟀」も、店の味わいになっているのでしょうか。「くかな」という詠嘆も巧いですね。

### 店にこおろぎ鳴かせ常連二人

のり茶づけ

こちらは小料理屋というか、一杯飲み屋って感じですね。同じ「こおろぎ」でもちと侘びしい鳴き方に思えるのが、この句の味わい。下五「常連二人」と女将が一人。破調の調べが、侘びしさに似合います。

### 蟋蟀の取り巻く残照の鍵つ子

めいおう星

こんな「蟋蟀」の情景も確かにあるに違いないと共感した一句。夕暮れになって活動を始める「蟋蟀」に取り巻かれてくる原つば。「取り巻く」という複合動

詞が、「残照の鍵つ子」の淋しさを際立たせてます。「残照」の一語が、一句全体をシルエットのような味わいにします。

### 蟋蟀に雲梯の手の錆びくさし マーペー

一日遊んだ「手」には「雲梯」の「錆び」の匂いが染みついていてるのです。「雲梯」臭い「手」の中に捕まえられた「蟋蟀」の困惑を、「に」という助詞で読み取らせているところに工夫があります。作者自身が「蟋蟀」に成り代わってみることで、こんな発想も生まれるのでしょうか。

### こほろぎが三交替の中にある

クズウジュンイチ

こちらは労働の一句。「こほろぎ」が三交替で鳴いているのではなく、「三交替」で働く人々が入り出す時間と空間の「中」に「こほろぎ」があるという把握。「こほろぎ」が中心にポツンと置かれているかのような感覚にオリジナリティがあります。

### 蟋蟀や尻洗ひの手の止まり 内藤羊草

「尻洗ひ」とは何でしょうか？ ひよっとすると何か特殊な風習があるのかもしれないが、ひとまず「湯灌」仏葬で、死体を棺に納める前に湯水でぬぐい清めること」と読ませていただきました。

手順どおり粛々と行われていた「尻洗ひの手」がふと止まったのは、「蟋蟀」の

声に気付いたからでしょうか。上五「蟋蟀や」の詠嘆に、深い感慨が滲みます。

第123回 2015年8月17日週掲載

## 桔梗

きぎょう

### 天

#### 青磁なる壺中覗かば桔梗の野 山上博

「桔梗」を「青磁」の「壺」に活けるといふ句は幾らでもあるでしょうし、「壺」の中を覗き込むという発想もありはします。が、「青磁なる壺中」に「桔梗の野」が広がっているよという幻想に美しい眩暈を感じてしまいました。

「覗かば」は、未然形＋「ば」ですから、もしこの「青磁」の「壺中」を覗いたとしたらという仮定の意味になります。つまり、眼前には「青磁」の「壺」があるのみなのです。「青磁」の青が「桔梗」の色を思わせるのかもしれないし、風に吹かれる「桔梗」の絵がほどこされた

「壺」だったのかもしれない。いずれにしても、作者の意識は「青磁なる壺中」に飛び込み、その脳内に「桔梗の野」を見ているのです。「壺中」に吸い込まれるようにしてたどり着くのは、花野に点々と咲く「桔梗」でしょうか、それとも二面にひろがる「桔

### 地

#### たへきれぬかたちならば咲く桔梗 凡鑽

「桔梗」の咲き方をさまざまな方法で表現しようとした作品は沢山ありましたが、「たへきれぬかたち」になると「桔梗」は開くのだよ、という把握に詩的真実があります。

ちよつと悩んだのは、「ならば」の部分。これも未然形＋「ば」ですから、仮定の意味になります。この句の場合は「なれば」としたほうが良いかもしれない……とも思う一句です。

#### 瞬きを知らぬ桔梗や山雨急 めいおう星

「桔梗」を擬人化した句もありました。擬人化はなかなか難しいテクニクです。この句の巧さは、季語と擬人化のバランスの取り方です。「桔梗」は確かに目をパチリと見開いたような印象のあ

る花。「瞬きを知らぬ」という擬人化の措辞は「桔梗」という季語に対して、言葉の質量に過不足がありません。

さらに巧いのが、中七「桔梗や」と強調したあとの、下五の置き方。「山雨急」という三つの漢字が示す状況が、「瞬きを知らぬ桔梗」を揺り動かします。山の雨粒にゆれる「桔梗」の表情がみえてくる鮮やかな作品です。

きぎようからパチンと星がおちてきます

ひろしげ 8さい

季語「きぎよう」に対して「星」という言葉を使った句も沢山沢山ありました。その中で金曜日に推したのがこの句です。「きぎよう」そのものが「星」みたいな花だというのではなく、「きぎよう」から「パチン」と音をたてて「星」がおちてきます」という措辞が表現する率直な詩情。「パチン」と「おちて」くる「星」たちは、紫色の美しい火花をつぎつぎに飛ばしそうな楽しさです。

桔梗や湖水を渡る馬頭 蘭丸

上五「桔梗や」とクローズアップした後、中七下五でカットが切り替わり、鮮やかな光景が広がります。「湖水」の「語で」と光が広がり、「を渡る」で何が渡るのだろうと心が動き、そして下五「馬頭」という見事な映像化。言葉でここまで映像が描けるって、カッコイイですよ。

はや朝を濡れきちこうの野の行者

ウエンスデー正人

この句の構造の巧さは、まず「はや朝」で時間を、「濡れ」で状況を、「きちこうの野」で場所をという具合に、一語一語が丁寧に映像を創り上げている点です。上五「くを」の助詞の使い方も巧みですね。「朝」という時間と空間を早くも濡れながら「きちこうの野」を歩いている「行者」という人物へ焦点があたりと見せかけて、実は「朝」の「きちこうの野」の美しさが、一句の眼目となっているあたり、よく考えられた作品です。

桔梗や黒く描かれし雨の線 井上じろ

今週の「天」に推した句は、壺中の幻想の「桔梗の野」を描いていましたが、こちらの句は現実の「桔梗」を起点として、絵画の世界へ時空間移動しているかのような作品です。「黒く描かれし雨の線」という措辞のなんと渋い味わい。「黒い」「線」で描かれた「雨」の下には紫の「桔梗」も描かれているのかもしれない。虚実のあわいに降る「雨」と「桔梗」、深い滋味のある一句です。

今日の死の数だけ投下する桔梗 初蒸気

街角の警察署の前には「今日の死者数」なんて数字が掲げられていますから、「今日の死の数」という言葉が、特別突飛なわけではありません。が、「今日の

死の数だけ投下する」という措辞は読者の心を不穏にします。爆弾なのか、死の灰なのか……そんな恐怖の感情を揺すつておいて、最後にくるのが季語「桔梗」となれば、「投下される桔梗」は追悼の花ということになります。嗚呼、そういう意味でありましたかと肯う、なんと怖ろしくて美しい虚実の句であります。

桔梗にも眠りの時間ゆふまぐれ

今野浮夢

普通俳句で「くにも」なんて助詞を使うと、その一点が散文的になってしまう。ただけなものなんです。この句は「にも」がちゃんと機能しています。「桔梗にも眠りの時間」があると述べることで、それ以外に「眠りの時間」を持つ生きとし生けるものが、やわらかい表情でつきつきに想起されていきます。「眠り」という安らぎの言葉が、「ゆふまぐれ」の「桔梗」の表情を描きます。

味噌売りや味噌と桔梗を売り来たる

丸山清子

こんなのもいいなあ！いつもの「味噌売り」が「味噌」を売りに来たんだけど、今日は「桔梗」も売ってるのだという。山路を越えてくる途中に「桔梗」を見つけた、それもついでに売ろうと思ったのか。はたまた庭に咲かせている折々の花も商う物の一つなのか。古き時代の「味噌売り」

が売る「桔梗」の素朴な美しさを、この目に見せてもらったような一句。説明しにくいけど「味噌」と「桔梗」の取り合わせがやはり絶妙というしかありません。

枝豆

えだまめ

第124回 2015年8月31日週掲載

天

枝豆のしほあぢ龍のなみだほど

どかてい

「枝豆」とくれば、塩味を描いた句は当然たくさん作られます。今週の木曜日は、塩、塩、塩のオンパレードでした。「枝豆のしほあぢ」を何かに喩える句も当然でてくると思っていたのですが、その発想の句がそれほどなかつたのは意外でした。

かつての「枝豆」は「月見豆」と呼ばれ、十五夜にお供えするものでした。春には淵をでて天へのぼる龍、秋になると淵に潜む龍。「龍のなみだほど」という比喩は、「しほあぢ」の塩梅を表現するだけでなく、「枝豆」が秋の季語であるという事実をさりげなく伝える工夫でもあります。

「龍のなみだほど」という比喩、きれいですね。大皿山盛りの「枝豆」ではなく、

会席膳に上品に添えられた「枝豆」を想像しました。「枝豆」の莢の中にあるさやかな「しほあぢ」を味わう度に、これは「龍のなみだ」の味なのだと思えば淵に潜みて、十五夜の月を水底から見上げる龍の心持ちに寄り添えそうな気がいたします。

## 地

### 枝豆の大皿がゴングいざ飲まん

豆腐太郎

中八の句ですが、ハマってしまいました！(笑) 今の世の「枝豆」は、「とりあえず枝豆！」が合い言葉となる居酒屋定番メニュー。季節感の有無を問われると、やや苦しいところもありますが、これぞ現代の「枝豆」ではありませんか。

運ばれてきた「枝豆の大皿」が、二時間飲み放題の始まりの「ゴング」！ビールジョッキを片手に、「あ、これ冷凍じゃないね」「やつぱり旬の枝豆は美味いね！」なんて会話が交わされることを期待します。

### 枝豆やジョッキの花に囲まるる

博泉

これも似たような現場の「枝豆」ですが、「ジョッキの花」という比喩がいいなあ！乾杯！と合わせた「ジョッキ」の形を、瞬時にこう把握できるのが、俳人の目とセンス。「枝豆」が「ジョッキの花」

に「囲まるる」という描写も確かです。

### 枝豆と話の接ぎ穂取りに立つ 麻中蓬子

会話が滞る、ちょっと気まずい時間。「枝豆」をとつてくるような顔をして、「話の接ぎ穂」も「取りに立つ」という発想に共感します。「と」と並立したところも工夫です。

### 枝豆を茹づ和多都美の渦のごと 紀貴之

「枝豆」を茹でる句もたくさんありましたが、「和多都美の渦のごと」という比喩に個性があります。「和多都美」という大袈裟な漢字も効果的。「和多都美」の意味が脳に届くと、自ずと塩あじをイメージさせるのも、納得の工夫です。

### 直会の枝豆青く甘かりき

雨月

「直会」とは、神祭りにおいて、神に供えたものと同様の御膳(斎食)、あるいは、神に供えた神酒や神饌のお下がりをちよくだいする行事です。お下がりにしていただいた「枝豆」は旬のもの。その色の「青」、その味の「甘かりき」という措辞が、収穫を司る神への感謝も表現します。

### 反省完了さあ茹でたての枝豆を ぐわ

「枝豆」という季語から、愚痴、本音、反省という言葉を連想する句もたくさんありました。その中で、これを金曜日

推したのは、あつけらかんとした明るさです。「反省完了」という措辞が、反省してるんだかなんだか分からないところもありはしますが(笑)、いやいや、反省つてのはいつまでもウジウジやつてるもんぢやないのです。「反省」をしつかりと「完了」させ、次の一步を踏み出さねばいつまで立つても「反省」は反省のみに終わってしまいます。「さあ茹でたての枝豆を」という後半の措辞に、勢いがあった、大好きな句です。

### 枝豆や詩人の血こそ欲しけれど

トレ媚庵

「枝豆」という季語には、内省的な淋しさを思わせる要素もあります。誰でも知ってる「枝豆」を「詩」にする難しさをかみ締めつつ、「詩人の血こそ欲し」と呟くに静かな共感を抱かずにはいられません。下五「欲しけれど」の余韻に滲む淋しさ。ここが「枝豆」という季語との接点となります。

### 淋しい文明また枝豆をつまみあげ

Y音絵

「淋しい文明」という詩語と「枝豆」という季語との出会いに、ドキッとします。文学的遊民の悲哀と読んでもいいでしょうし、現代社会への乾いた諦観と読むこともできます。「また枝豆をつまみあげ」というさやかな動作に、その感

情が纏わりつきます。

### 枝豆の流れ弾飛ぶ大広間

三重丸

「そういえば、「葉莢」にも「さや」という漢字が。」という作者のコメントに、ニヤリ。「枝豆」が投げつけられる「大広間」は、かなりの盛り上がりというか、修羅場というか(笑)。社内旅行の夜の宴の荒れた結末?を想像して、可笑しくなった一句です。

### 枝豆の殻も律儀な野田社長

佐藤直哉

嗚呼、こんなおつちゃんおるなあ〜と、共感しきり。「枝豆の殻」なんて、空いた皿にでも放り込めばいいってもんですが、「律儀な野田社長」は、自分の箸袋の横のあたりに、きつちりと揃えて置いていくんでしょう。課長とか部長ではなく「社長」という肩書きも泣かせます。叩き上げてコツコツ会社を立てた中小企業の社長でしょうか。「野田社長」という固有名詞がハマリ役であります。



# 秋の蝶あき ちよう

天

秋の蝶ほしはゆつくりうごくけど

さな (3さい)

小さな子どもたちの俳句との出会いは、家族との会話から。五七五だとか季語を入れるだとかのルールを説明するのはなく、お話を聞いてやることから、始まります。

さなちゃんのお祖母ちゃん誉茂子さんからのお便りを、先に紹介しておきましょう。

●「今度は秋の蝶々さんよ。何かお話を聞かせて」といってできた五七五です。さながうちに来ると、まず机の上の俳句ボスト作品集のよしあき君を見て、国語辞典をバラバラめくっています(笑)。／誉茂子「何かお話を聞かせて」という呼び掛けは、とても素敵です。ただおしゃべりをするのではなく、「今度(の兼題)は秋の蝶々さんよ」と誘導することで、子どもなりに「秋の蝶」という季語とのささやかな体験やイメージを語り始めてくれます。

子どもたちのおしゃべりをそのまま十二音に書きとめてあげましょう。ここですべてはいけないのは、子どもの十二

音を五七、あるいは七五に整えるために、オトナが勝手に手を入れないことです。子どもは子ども心に、プライドを持ってきます。自分のしゃべったことがそのまま「俳句の種」になることは嬉しいけれど、オトナが少し直していることに気付くと、ちよつとヤナ気持ちになるのです。今回の、さなちゃんみたいに、ぴったり七五になつておしゃべりがでてきたら、もう大喜びで誉めてあげてください。そして、少々音数が合わなくても、そこに詩の欠片があれば、充分「俳句の種」になります。ここから始まる、小さな俳人たちの表現活動。小さな「俳句の種」を掬いとつてあげるのは、オトナたちの楽しい務めです。

さて、本題に入りましょう。「秋の蝶」は弱々しいと解説している歳時記もありますが、私は切ない焦り、衰えてゆく美しさ、静かに浸食してくる狂気などを感じます。夏の蝶に較べると確かに弱々しいのですが、「秋の蝶」は小さな叫び声をあげながら、切々と飛び回っているように思えます。

さなちゃんは、お祖母ちゃんから「今度は秋の蝶々さんよ」と言われて、蝶々が秋という季節に急かされるように、せわしく飛んでいるさまを思い出したのかもしれません。「ほしはゆつくりうごく」けど」という言葉がどんな会話の流れでできたのかはわかりませんが、悠久の

動きである「ほし」と死を拒絶するようになり飛び回る「秋の蝶」の対比は、一句の世界に深い奥行きを作ります。「秋の蝶」も「ほし」も、時間の長さは違いますが、いつかは滅びていくもの。静かな滅びの影も感じ取るのは、オトナの側の深読みではありません。

地

蔓はもうつかむものなし秋の蝶 雨月

夏のあいだ、「つかむもの」を求めてグングン伸びていた「蔓」ですが、秋になるとその勢いも衰え、これ以上伸びることができず、「もうつかむものなし」と空虚な風に揺れ始めます。下五「秋の蝶」という季語が出現したとたん、「蔓」の姿と「秋の蝶」のさまが重なっていきます。

光る秋蝶へ光らぬ秋蝶は Y音絵

切なく美しい二句。「光る蝶」へ向かって儚げに飛んでいくのは「光らぬ蝶」。下五「は」という助詞のあとの余韻のなんと寂しげなことでしょう。そして季節は否応なく進み「光る秋蝶」のひかりもやがて失せていきます。

秋蝶の骸は濡れて反転す 吟爾郎

しつかりと観察し写生しています。「秋の骸」が「濡れて」いることに気付けば、おこれ一句できると、観察を打ち切

る人が多いのですが、そこをもうちよつと根気よく続けると、濡れたまま、風に吹かれて「反転」する瞬間に出会うことができる。これが俳人の持続性をもった観察です。「濡れて反転す」という後半の措辞に、哀れが募ります。

岬は秋のアサギマダラの中継地 ポメロ親父

「秋の蝶」という兼題で、「秋」と「蝶」を切り離して使う技に挑戦した作品です。「アサギマダラ」は海を越えて旅をする蝶。「秋のアサギマダラ」と敢えて具体的な名前を入れることで、この「岬」の光景が鮮明に広がってきます。「中継地」の一語で、ここまでの、そしてここからの「秋のアサギマダラ」の旅の様子も想像されます。

蝶は秋従へ翅の重し重し ウエンズデー正人

「秋」と「蝶」を離して使う技をもう一つ紹介しておきましょう。「秋の蝶」といわず、「蝶は秋を従へ」と表現。本来春の季語である「蝶」が「夏蝶」となり、そして今は「秋」という季節を従えて秋蝶となっている、という時間の流れを表現。後半の「重し重し」はまだ練る余地のある措辞ですが、難しいテクニクに挑戦している点を評価したい一句です。今週の「人」選に、「無数の秋が蝶と

なりふりそそぐ／牟礼鯨」もいただいておりました。発想は似ているのですが、こちらの句はむしろ「秋」を主たる季語として捉えるべきではないかと思えます。ほんのちよつとした匙加減ではありますが、重要なポイントです。

### 酸っぱ過ぎはせぬか夕日は秋蝶に

ハラミータ

秋の「夕日」も淋しげなものです。その気分を「酸っぱ」と表現できるのが、この作家の個人的な感覚。「秋蝶」の儂げなさまを眺めるにつけ、「夕日」は「秋蝶」にとって「酸っぱ過ぎはせぬか」と眩く作者の心根のなんと優しいことかと。

### 秋蝶に与える泪のナトリウム トボル

「秋蝶」を詠みつ、一句の奥底には「秋思」という季語が潜んでいる作品です。「与える」という動詞から「泪」というモノがコロンと転がり出てくる語順も巧いですね。さらに「のナトリウム」としたことで、叙情に流されない作品となりました。

### 傷ついた心と国と秋の蝶 ぼろよい

「秋の蝶」は、我が身を嘆きながら飛んでいるみたいな生き物です。「傷ついた」という措辞は、「心」「国」「秋の蝶」と三つのものにかかっています。一瞬、

難民の坊やが亡くなったニュース映像を思いました。世界中の人が俳句の心をもつて下さると、世界は絶対に平和になつていくと思うのですが……。

### 白骨の罅より百の秋の蝶 中原久遠

兼題「秋の蝶」から、このような幻想的な光景も生まれてくるのだなあと、さ

やかな驚きを覚えました。「白骨」に入った「罅」から、「百」の「秋の蝶」が飛び立っていく光景に背筋がゾクゾクします。智内兄助さんに、この句の世界を描いてもらいたいような、うっとり怖ろしい作品です。

### へその緒は暗所に緒く秋の蝶 紆夜曲雪

「へその緒」が暗い抽斗の中に入っている句なんて、いくらでもあるのですが、この句の魅力は「緒く」という措辞です。普通「へその緒」はカラカラに乾いてしまうのですが、この「へその緒」はいつまでも生々しく緒いままなのでしょう。ひよつとすると、この「へその緒」から、逆に胎児が再生されていく？ ような妄想が頭から離れなくなつて、困惑しています。生きることに抗う「秋の蝶」と、嬰兒の生を繋いでいた「へその緒」。ひよつとすると、この「へその緒」はいつまでも脈打っているのではないかと、怖ろしくなつた作品です。

### 永遠に兄はみどりご秋の蝶 直木葉子

「永遠に兄はみどりご」という措辞に、はるかな哀しみが籠もります。「みどりご」と平仮名で書かれた言葉の美しさを改めてかみ締めました。「秋の蝶」は追悼の思いを抱いて、ひかりの中へ消えていくかのような味わいです。「生後2週間のいのちだったそうです」という作者の言葉もまた、事実の重みをもつて私たちの心に響きます。

第126回 2015年9月14日週掲載

## 蓮の実

天

### 蓮の実は出自の穴を仰ぎみる 大塚迷路

兼題「蓮の実」には「蓮の実飛ぶ」という傍題があります。花が散つた後の青い花托がやがて黒ずみ、実が黒く熟し、その実を水に飛ばすわけですが、花托のシャワーみたいな形を眺めていると、成る程こちらから飛び出すんだと納得がいきます。

が、「蓮の実」は飛ぶのではなく落ちるのだ、という科学的な情報を知ると、「蓮の実飛ぶ」という傍題が非常に大げさでユーモラスなものにも思えてきます。考えてみれば、「蓮」という植物ほど

様々な表情をもつて、俳人魂を喜ばせてくれるものはありません。仏の花として崇められ、「蓮の台座」<sup>うてな</sup>仏・菩薩の座つている蓮の花の台座「なんて言葉もあり、優美にして圧倒的な蓮の花の存在感は他の追随を許さないほどの高貴。そして、「蓮の実」「破蓮」「蓮根掘り」とその表情を次々に変えていきます。

「蓮の実」は、ハツと目を覚まします。そして自分が水の中に落ちていることに気付きます。落ちてしまった「蓮の実」は、水の面を見上げます。水面のむこうには、首をかしげた蓮の花托が見えます。そこに「ただけ実のない穴がある。ああ、わたくしはあの「穴」から落ちてきたのか」と「蓮の実」は己の「出自」を、穴の空ろに知るので。さざやかな風にゆらめく水面、その向こうにある我が「出自の穴」。生まれ落ちるといふのは、こういうことなのかと「蓮の実」は静かにその穴を「仰ぎみる」のです。何千年もの蓮の輪廻とはこのようにしてめぐつてきたのだと、私たち読者もあらためて「蓮の實の出自の穴」をしばしばと眺めてみるのです。

地

### 蓮の實の落ちたる空ろつことに水 理子

「虚ろ」と書く和心理的なものが難しりますが、「空ろ」と書く、それはた

だのからつぽ。「蓮の実の落ちた」からつぽの穴こそが「空ろ」です。その「蓮の実」が落ちた「空ろ」の数だけ、種の落ちた波紋が生まれる。「蓮の実」が落ちることによって、「水」の存在が認識される、という把握にささやかな感動を覚えます。これも「天」に推したかった作品です。

### 蓮の実やおよづれごとを言ふごとく

菅茂子

「およづれごと」とは「根拠のない、人を迷わすうわさ」を意味し「妖言」と書きます。「蓮の実」を抱いた花托を怖ろしいと感じる人も多いようですが、実がびつしりと集まったあの形状は、人を迷わせる噂の集合体のようにも思えてきます。下五「言ふごとく」という措辞はまだ推敲の余地があるかとは思いますが、「蓮の実」Ⅱ「およづれごと」という比喩の力に惹かれる一句です。

### 蓮の実飛んできたま古墳群 江戸人

●「埼玉県」という県名発祥の地とされる「埼玉」の地にあつて、前方後円墳8基と円墳1基の大型古墳が残る全国有数の大型古墳群です。現在は国の史跡として整備がなされています。「埼玉」を「きたま」と読んでいたようです。この池に大賀博士の大賀蓮が元気に咲いています。／江戸人

江戸人さんは、日本中に知られている

わけではない固有名詞を使うことは非を心配されてもいましたが、いえいえ「きたま」という言葉は、詩になるイメージを充分もっています。「さき」は「幸ふⅡ豊かにさかえる」の「さき」を語源としているのでしょうか。「たま」は「玉」でしょうか、いやいや「魂」<sup>たま</sup>かもしれせんね。

仏教的イメージも持つ「蓮の実」、そして「きたま」と名付けられた「古墳群」の広がる光景。二つの要素が実景としても、詩的イメージとしても、味わいのある取り合わせになっています。

### 蓮の実を撃ち尽くしたる夕日かな

井上じろ

「蓮の実」そのものというよりは、「蓮の実」が落ちてしまったあとの蓮の花托の光景が眼前にあります。「蓮の実」は飛ぶのではなく落ちるのだ、という科学的情報に拘泥することなく、蓮の花托は「蓮の実」を全て「撃ち尽くし」、この「夕日」の中に佇んでいるのだという把握に、詩的リアリティがあります。

中七下五「撃ち尽くしたる夕日かな」によって、夕日のただならぬ赤が引き金となつて、「蓮の実」が撃ち尽くされたかのような妄想も生まれてきます。

### 蓮の実もメコンの河も泥臭し まどん

「メコン河」で食べた「蓮の実」の実

感でしょう。「蓮の実」と「メコン河」を並列で置いて、下五「泥臭し」という事実を共通項として提示するという型。読み終わったとたんに、読者の鼻腔に行つたこともない「メコン河」の「泥」の臭いがありありと再生されてきます。

### 蓮の実をほじつたあとが青臭い

有櫛水母男

「ほじつた」ですから、無理矢理花托から掘りだしたと読めばよいのでしょうか。「蓮の実」を取り出した穴を、「ほじつたあと」と表現するところに臨場感があります。下五「青臭い」と愛想もなく言い放つところに、さらなるリアリティが表出します。

### 蓮の実を籠にバイクは五人乗り

佐藤直哉

東南アジアのどこかの国の光景を思いました。「蓮の実を籠」に入れた「バイク」ならば、日本でもある光景ですが、「バイクは五人乗り」で、さすがに日本ではないことが分かるという仕掛けに工夫があります。「バイク」ではなく、「バイクは」とした点も、旅行者の視点として評価できる選択です。

### 蓮の実の飛ぶ夜の雨は糞靨 どかてい

「糞靨」は色の種類です。「藍染の淡い青色を表す伝統色名。布地を藍の入った

糞の液にほんの少し浸したことの形容とされる」と辞書には解説してあります。「蓮の実の飛ぶ」頃の「雨」ですから、時雨の類いでしょうか。今夜の雨は「糞靨」の色だなあとという感知そのものが詩です。淡い夜の闇にかさなる、さらに淡い雨の線が見えてくるような、かそけき一句です。

### 蓮の実とぶ子亀の空の一大事 岩魚

正岡子規の句に「蓮の実飛や出離の一大事」というのがあります。この句を知っていたのなら、一種の本歌取りといふところでしょうし、あるいは知らないままに作つた偶然的の産物ということも考えられます。

「蓮の実」が飛んだ水面にいる「亀」を詠んだ句は結構あつたのですが、「子亀の空」という表現が楽しいですね。子亀たちにとつては、いきなり飛んでくる黒い種は、まさに「一大事」の波紋です。

### 坊さんの艶は蓮の実食べてより 登美子

一読、テカテカしたスキンヘッドが浮かんできて、笑つてしまいました。「坊さんの艶」としか言つてないのですが、どう考えても「坊さん」の禿頭が思い浮かびますよね。

寺の池に生えている蓮の実を、今年初めて収穫したのでしょうか。あの「坊さんの艶」は「蓮の実」のおかげだよ、な

んて言ってる檀家の人たちの噂話が聞こえてくるような愉快な一句でした。

第127回 2015年9月28日掲載

## 秋風

あき かせ

## 天

### 秋風や死者に優しき晴れ三日

きらら☆れい

今週の兼題「秋風」を上五か下五に置いて、残りの十二音で季語を含まないフレーズを作れば、ひとまず俳句にしてくれるという懐の深い季語です。が、和歌の時代からの伝統的な情趣もあり、本当の意味では使いこなすのが難しい季語でもあります。

が、今週は豊作でした。「地」に推している句のレベルが非常に高く、嬉しい悲鳴の選句でありましたよ。悩んだ末にこの句を推そうと決めたのは、季語「秋風」が内包する淋しき、愁いとともに秋という季節の晴れやかな空気も一緒に表現している点を評価してのことです。

まずは「秋風や」と詠嘆したあとに出てくる語順が実に巧いですね。中七にいきなり「死者」とくれば、蕭条たる「秋風」の寂しさが一気に詠まれるのだと、読者の脳は先走ります。(私たちの脳が

スゴイのは、単語一つが目に入ったとたん、想念はすでに次のイメージをコンマ何秒の速さで推測してしまうことです。)

ところがどっこい、この句の眼目は、次に連なる言葉の選択。「(死者に)優しき」とは?と思った瞬間、さらに出現するのが「晴れ」という一単語です。「死者に優しき晴れ」という意味が脳内で成立したとたん、読み手の心には悲しいままで晴れ渡った秋空がパンと広がります。

「秋風」の中に佇む作者は、今日の空を見上げます。訃報が届いたその日から「三日」目は、お葬式の当日でしょうか。「死者」を労るように悼むように続く三日間の「晴れ」を、作者は天の優しき配慮に違いないと受け止めます。上五「秋風や」の詠嘆は、死して風となった故人を想うところであり、頭上に広がる美しい秋空の青に象徴される悲しみでもあります。

## 地

### 秋風は月の裏側より戦ぐ めいおう星

こんなこと想像したこともありませんでした。「月」は代表的な秋の季語ですが、「月」という大きな力をもった季語ならば、「秋風」という波動を地球に伝えることができるに違いないと想わされます。下五「戦ぐ」という動詞の「戦」の一字が、「裏側」という負のイメージを持った言葉と響き合い、季語「秋風」の世界を増

幅させていきます。

同時投句「秋風を精製したる手風琴」の発想にも惹かれました。「精製」という言葉が見事に「秋風」と「手風琴」のイメージをつなぎます。

### 飛び降りるなら秋風の曲がるところ

Y音絵

これまた、こんなことを想像したことありませんでした。「飛び降りるなら」という不穏な仮定から、「秋風の曲がるところ」というピンポイントの場所が指さされる、この怖ろしさ。ふっと「飛び降り」てしまう人は、「秋風の曲がるところ」が見えてしまった人なのかもしれませんか。

同時投句「秋風へ機械なんでも歌へるよ」も軽やかな発想。

### 秋風の輪護謨よく飛ぶ六道へ 紆夜曲雪

さらにこれまた、こんなことを想像したこともありませんでした。「輪護謨」は「輪ゴム」ですね。「六道」とは「仏教の輪廻思想において、衆生がその業に従って死後に赴くべき六つの世界」と辞書には解説してあります。

まるで「輪護謨」がピンピン飛ぶように、人間たちも「六道へ」と飛び込んでいくよ、という寓意が隠されている作品です。「秋風や」ではなく「秋風の輪護謨」とすることで「六道へ」飛ぶ輪ゴムが虚

のリアリティとして立ち上がってきます。同時投句「秋風を束ね童子の笛となす」の幻想もまた捨てがたい魅力をもっています。

### 鏡のなかの鏡のなかを秋の風 とりとり

「鏡」の中に「秋の風」が吹き込んでいくという発想の句は、他にも投句されていましたが、この作品の叙述が圧倒的に巧いですね。「鏡のなかの鏡のなかを」という措辞によって、読者は否応なく「鏡のなかの鏡」を覗き込まされ、そこに吹く虚の「秋の風」を味わうこととなります。「くを」という助詞の効果をしっかりと機能させている作品です。

### 漆彫る刃先の光秋の風 ぐわ

モノの「光」を描くことで「秋の風」を感じさせようという発想の句は沢山ありましたが、この句材がいいですね。木や銅板ではなく「漆」という素材の光と「刃先の光」とが異質の光を見せてくれ、そこに「秋の風」の風情が立ち上がってきます。

同時投句「秋風や小さき刃を研ぐ沈金師」も同じ現場の一句だと思われれますが、丁寧な吟行をしておられますね。

### 秋風や交換しあふ貝の殻 葦信夫

「秋の風」は「色無き風」、秋は「白秋」などとも呼ばれますが、「秋風」に白の

イメージを重ねる句もたくさんありました。それらの中では、この句に二工夫がありましたね。白といわず「貝の殻」というモノで白のイメージを伝え、さらに中七「交換しあふ」という行為によって人の姿や、ある種の寓意も浮かび上がってきます。

同時投句「秋の風貼り紙は猶ねこ探す」の「猶」の二字も効果的に使われています。

秋風の纏はりつくよ老人に 井上じろ

自画像でありましょうか。「纏わりつくよ」という中七の詠嘆の先に、「老人」という実体が出現したとたん「秋風」という季語が生々しく臭ってくるような作品です。

同時投句には「秋風や酒は飲めなくなつたといふ」「秋風は十分窓は閉めてくれ」など、自然体で「若い」を詠んだ句もあり、今後のこの作家の作品、注目せねばと思っております。

秋の風乾されし魚乾きし実 むじじ

「乾されし魚乾きし実」と読むと、調べが生きてきます。「秋の風」に乾いていく干物とドライフルーツと読んでもいいですし、干物を並べている干し場の傍らに、木になったままの果実が干からびている光景を思ってもいいですね。

「秋の風」という季語の現場で見つけ

たものを並べてみるだけで、作品が成立するというお手本のような一句です。

秋風を噛みくたびれて結婚す 中原久遠

うわくびつくり〜！そうか、ある種の「結婚」はこういう心理によって決断されるものなのかと、妙に納得させられました（笑）。それにしても、「秋風を噛む」「くたびれる」「結婚する」と三つの動詞を使って「秋風」を表現するのは、この作家の発想力には毎回舌を巻くばかりです。

第128回 2015年10月12日週掲載

## 秋の雲

天

秋の雲海から揚がる象の骨 ポメロ親父

一瞬、海から象の骨が？ 動物園の象を水葬にした?!と思つたのですが、念のためネット辞書を調べてみると、以下のような記述もありました。

「日本では13点の化石が発見されている。そのうち12点が北海道で発見され残り1点は島根県日本海海底約200メートルから引き揚げられた標本である。加速器分析計による放射性炭素年代測定が行われ、8点が測定可能で、得られた

結果は約4万8千年前〜2万年前までであった。これらの結果から約4万年前より古い化石と約3万年前より新しい年代を示す化石に分けられ、約3万5千年前あたりを示す化石はなかった。マンモスに替わってナウマンゾウが生息していた時代ではないかと推測されている。」

なるほど、動物園の象ではなく、ナウマンゾウだったのか。そうとなれば、一句の世界は大きく広がってきます。「海」から引き揚げられた化石、「骨」の大きさに驚く人々の声、数万年前に生きていた「象」の時代へ思いを馳せる研究者達の熱気。さまざまな想像が一気に動き出します。

かつてナウマンゾウたちが生きていた大地、何らかの理由で滅びていった事実、「象」たちの死骸もろとも大地を飲み込んだ海。そんな悠久の時間を慈しむかのように「秋の雲」は、静かに広がります。海の波のようにさざめく「秋の雲」は、「象」の肋骨のような形状にも、「骨」のような色にも思えてきます。

冬へ向かっていく淋しさを内包しつつ、その感情を慰めるかのような優しさも持ち合わせている季語「秋の雲」は、「海から揚がる象の骨」という措辞と、付かず離れずのイメージを重ね合いつつ、時空を広げていきます。懐の深い一句でありました。

地

草の果てここは秋雲製造所 とおと

「秋雲」を「製造」する、という点において似た発想の句もあつたのですが、上五「草の果て」という場を特定することで、中七下五の空想を浮き上がらせず、読者の心に光景を立ち上げます。こういう小さな配慮が、一句の発想を成功させるか否かの違いになってくるのだなあと、改めて思つた次第です。

秋雲は秋雲にしかぶつからず 大塚迷路

いやいや、飛行機にもぶつかります、なんて言いだすのは無粋というものです。秋の空には「秋の雲」しかないのですから、当たり前のことを当たり前に述べただけの一句ですが、これは一つの詩的定義です。「秋雲」という季語が内包するささやかな孤独感は、「秋雲にしかぶつからず」という措辞によって、その思いを再度かみ締めることになります。

千仞を跳ねゆく山羊や秋の雲 長緒連

かつてウチの子どもたちが大好きだった『3匹のやぎのやらがらどん』という絵本を思い出しました。ノルウェーの昔話らしいのですが、3匹の山羊がもつと太りたいといつて、山へ行く冒険です。3匹目の山羊がトロールをやっつけるシーンが、子どもたちのお気に入りでした。

「千仞<sup>せんじん</sup>」とは険しい山のこと。勇ましく「千仞を跳ね行く山羊」の姿を、「秋の雲」がゆつくりと追いかけているかの印象の一句。「跳ねゆく」の複合動詞や、切れ字「や」の効果など、きつちりと考えられている点を誉めたい一句です。

柩には繪筆も入れよ 穠の雲 百草千樹  
旧字「繪筆」「穠の雲」の効果によって、一句にしみじみとした時代の背景を感じ作品。「柩」に入れるものとして繪筆が選ばれているわけですから、亡くなった人物は画家であつたに違いないと想像できます。「くも入れよ」という呼び掛けが、読者の心を動かします。見上げる秋の雲もまた追悼の白さです。

### 家壊す音と匂いと秋の雲

田中ようちゃん

この実感に共感をおぼえずにはいられません。産まれ育つた「家」を「壊す音」を聞く強烈な淋しさ、壁土の匂い、古い梁の匂い、微臭い思い出の匂い。「くくと」と並べられた最後に出現する「秋の雲」は、嗚呼と見上げた視線の先に広がっております。

### 道草を食つて秋雲を味方にす

吟爾郎

この破調のリズムが、子どもの他愛ない「道草」ではなく、大人の悲哀に満ちた「道草」を思わせませす。行きたくない、

帰りたくない、大人だつて嫌なことは一杯あるのですものね。後半の「秋雲を味方にす」という措辞に、じわりと共感が滲み出します。

### 偶数は二つに割れる秋の雲

酒井おかわり

「偶数は二つに割れる」これも当たり前前のことです。当たり前のことを改めて述べてみることで詩を発生させるのも、テクニクの一つですが、この句の場合には下五に取り合わせる季語によって、詩の質や成否が決定されます。

果てしなく続く秋の筋雲は、ひよっとすると二筋ずつが対になっているのかも？と思わせるのが、発想のミソ。そして「偶数は二つに割れる」という事実が内包するそこはかとなし淋しさも、季語「秋の雲」の感情と響き合います。

### 秋雲とほろほろ鳥の Pasta です

けん G

「ほろほろ鳥」って食べたことありませんか。ワタクシは、以前飼っていた「ほろほろ鳥」を泣く泣く食べた経験があるのですが、この話は長くなるので、また次の機会に〜(苦笑)。

「ほろほろ鳥の Pasta」という響きは、なんだかお洒落ですし、美味しそうです。この句の工夫は上五の置き方です。「秋雲や」「秋の雲」ではなく「秋雲と」と並列にすることで、さらにお洒落な味わ

いとなつていきます。「秋雲とほろほろ鳥」で作った「Pasta」とも読めますし、美しい「秋雲」と美味しい「ほろほろ鳥の Pasta」を両方味わっているとも読めるところが楽しい作品です。

### 尚妻の通話圏外秋の雲

大阪野旅人

ははは！笑っちゃ気の毒だが、笑ってしまいました。用があつてさつきから何度もかけているのに「尚」も「妻」のケイタイは繋がらず、「通話圏外か、電源が切られているか」というお決まりのメッセージが流れるばかり。だんだん切なくなってくる夫の心に、「秋の雲」の淋しさが重なります。ははは！

第129回 2015年10月19日週掲載

## 栗

### 天

いにしへのいのちの糞や栗集む

クスウジュンイチ

今回の兼題「栗」について、あれこれ調べていて、「栗」が縄文時代からの食べ物であつたという事実を知り、へえ〜！と思つた人も多かつたのではないでしようか。「縄文」という言葉を詠み込んだ句「人」選や並選にもありましたね。

掲出句の一番の工夫は、「縄文」という言葉を使わずしてその時代を匂わせた点です。「いにしへ」「いのち」とイ音を響かせて調べを構成しました。

「いにしへのいのちの糞」という詩語は豊かなイメージを持つてはいますが、抽象的な意味合いに読まれる可能性もあります。が、さすがはクスウジュンイチですね、下五が実に巧い！下五に「栗」という季語が出現したとたん、「糞」に貯められているのが「栗」であることが分かると同時に、この「栗」が「いのち」を繋ぐための食物であることが分かります。季語の出現によって、一句は一気に映像化され、「いにしへのいのちの糞」という措辞は映像の中で生かされ、確たる意味を持ち始めます。

さらにダメ押し巧さを發揮しているのが、「集む」という動詞の選択。生きるための営みがこの一語によって、見える行為となります。「いにしへのいのちの糞」を満たした「栗」のひかりは、生きるといふ健全な美しさなのです。

### 地

栗に穴一瞬虫の尻の見ゆ ポメロ親父

ああ、見たことあるある！というリアリティの一句。上五で「栗に穴」とクローズアップの映像をもってきたところも巧いですね。読者も思わず「穴」を覗き込

んでしまいます。「一瞬」という時間のあとに出てくる「虫の尻」の映像も愉快最後の「見ゆ」の一語もこの場合は必要な動詞です。

栗の虫潰せば栗の匂ひする 雪うさぎ

「栗の虫」を思わず潰してしまうこともあるでしょう。その虫の匂いを嗅いでみるのも、俳人にとっては大切な取材です。「くせばくする」という型は、因果関係を述べますので、ややもすると散文臭くなるのですが、この句はそれが飄々たる味わいになっています。

山姥と熊に分けをく栗拾ひ 老人日記

何もかも根こそぎとってくるのは、共存という言葉を知らない輩の行為。山の恵みの「栗」も、自分たちの生活に必要なだけをいただくことが、暗黙のルールです。分ける対象として選ばれている「山姥と熊」という措辞によって、なかなか奥深い山であることも想像できる点も巧いですね。

笑栗やほほを豊かに道祖神 ほろよい

「ほほを豊かに道祖神」という描写に対して、「笑栗」をもってきた点が工夫ですね。「ほほを豊かに」という表情は笑っているかのように見えますから、「笑栗」はびつたり。基本の型にしつかりと入れている句なので一語一語がゆ

らぎません。

栗の毬裂けはるかなる弥勒かな

トレ媚庵

眼前にあるのは裂けた「栗の毬」ですが、作者の想念は「弥勒」という存在へと遙かな時空を越えていきます。「くはるかなる弥勒かな」という措辞を読み終わったとたん、私の脳裏には日本史の教科書に載っていた、頬杖をつくかのような弥勒菩薩のお顔が浮かびました。「はるかなる」表情の切れ長の目と、静かに裂けていく「栗の毬」、不思議な取り合わせの魅力にうっとりしております。

銅像にもたれて栗を喰う広場 スズキチ

「銅像」にもたれる?と「瞬首をひねってしまうのですが、最後まで読んでいくと、一気にパリの「広場」にワープさせてくれます。名物の焼き栗を入れた袋を小脇にかかえているのでしょうか。「銅像」にもたれて「栗」を食べる姿は、映画の登場人物のように小粋です。

犬吠える的屋は栗を売りまくる 理酔

今度は「的屋」です。私の脳裏には、秋祭りの光景が広がってきました。賑やかな人波に興奮して「犬」が吠えます。「犬」に負けない声で「的屋」の兄ちゃん、くりく甘い焼き栗ッ!と大声で客引きします。最後の「売りまくる」とい

う複合動詞が、いかにも威勢の良い「的屋」を的確に描写しています。

栗を剥くこな村より力士かな もね

「栗」の産地といえば、稲作のできな山深い里が多いのでしょうか。「栗」を剥きつつ、村の人たちが噂話をしているのでしょうか。

「栗」しか取れない、何にもない「こな村」から「力士」が生まれた!「栗」で育った体を張って、一日も早く十両にあがって欲しいものだ、願う気持ちも読み取れます。

栗はなぜ仇討ちに身を投じたか

ウエンズデー正人

兼題「栗」から、猿蟹合戦のお話を思い出した人たちもいました。一種の本歌取り(本話取り?)の発想ですが、これを成功させるのはなかなか難しい。あのお話全部を一句の中に取り込むことは不可能ですから、どこかの場面に限定する必要があります。

この句の面白いのは、「栗」という人物?に絞って語っている点です。猿蟹合戦のお話は、蟹が猿に虐められた果てに死んでしまったため「子供の蟹達は親の敵を討とうと栗と臼と蜂と牛糞と共に猿を家に呼び寄せ敵討ちの算段」をしたのでしたね(と、ネット辞書には書いてあります)。

となると、なぜ「栗」は、自分には関係のない「仇討ち」に「身を投じ」ようとしたのか、という疑問が生まれてくる。それをそのまま一句に掬いとった発想に、拍手を贈りましょう。

「○○はなぜ仇討ちに身を投じたか」の○○の部分には、「栗」「臼」「蜂」「牛糞」の四択が考えられるわけですが、「臼」「牛糞」は季語ではないので論外。「蜂」でも成立はしますが、「仇討ち」という言葉と尻に針を持つる「蜂」はちよつとイメージが近いね。どこか生真面目で律儀で意志の固そうな「栗」が、やはりびつたりなんじゃないかなあ(笑)。

家ぞくひく父の数だけ栗がある おお

ツポに入ってしまった!「家ぞくひく父の数」だけある「栗」は、お店で買った焼き栗でしょうか。残りは四個。お君と二人のお姉ちゃんとお母さんで一個ずつ食べると、ちょうどびつたりなんだけど、お父さんの分がなくなってしまったよな。「家ぞくひく父の数」という引き算の公式が、この家族の力関係を物語っていて、爆笑いたしました♪



# 秋刀魚さんま

天

火の玉の秋刀魚七輪轟かす もね

今週の兼題「秋刀魚」も楽しませてもらいました。物語性のある句、意表を衝く発想など、どの句を「天」にするか迷いに迷ったのですが、今回は直球勝負の一句を推すことにしました。

「秋刀魚」を「七輪」で焼いたことのある人は、そうそんな具合になるよねと共感しきりではないかと思いますが、そういう意味ではこの光景を詠んだ「秋刀魚」の句は五万とあるかと思えます。

こんな場面を詠みつつ、ある程度のオリジナリティを確保するのは難しい。ワタシならば、絶対にこの句想には近寄らないと思います。もねさん、ど真ん中によくもまあこんな直球を投げ込んだものだ！と、その心意気に一票です。

まずは「火の玉」から始まる一句。読者の目に「火の玉」の一語が飛び込んできたとたん、幽霊？狐火？と一度はそっちの方向に連想が走りますが、コンマ何秒でそれが「秋刀魚」の形容だと分かれます。この措辞が「秋刀魚は火の玉」だったら面白くないわけですね。「火の玉の秋刀魚」という措辞は、「七輪」と

いう言葉を持たずして、七輪の上で炎をあげている「秋刀魚」を思わせます。そこにダメ押しのように「七輪」の一語が出現。やっぱり七輪だ、と思った瞬間の動詞「轟かす」がこの句の眼目です。七輪の上で火を噴いている「秋刀魚」は、自ら「火の玉」となって「七輪」を轟かしているよ、という擬人化。受動的に焼かれているはずの「秋刀魚」が、能動的に「七輪」を轟かせているという発想が、結果として季語「秋刀魚」をありありと描写することになっているのです。

地

けづらせて泣かせて秋刀魚まつりてふ 毛利あづき

ははは！これも語順の勝利だね。「けづらせて泣かせて」までは状況が一切分からなくて、何事だろうという疑問を読者の心に投げかけます。そして後半「秋刀魚まつり」によって、売り出しセールど真ん中にあることが分かる。この煙は一体なんだよ?!という答えが「秋刀魚まつりてふ」という措辞となって、読者の前に転がり出てくるような楽しさがあります。「てふ」は、「ちよう」と読んで「く」という」を意味する言葉です。

秋刀魚焼け酒は二升息子来る とりとり  
なるほど息子が帰省するんですね、と

通り過ぎようとした一句でしたが、最後の動詞「来る」で、あれ？と立ち止まりました。独立してる「息子」が久しぶりに実家に戻ってくるのならば、「来る」とはいわれないんじゃないかな？「子が帰る」とすれば息子かなと想像もつくし……とあれこれ考えているうちに、あ、ひよつとして！と思いついたストーリーがひとつ。娘の許嫁がやってくる、って読んでもいいなあ、と。「秋刀魚焼け」という命令形の弾み、「酒は二升」という量が示す「息子」の人物像、その息子を迎える両親の喜び。娘ばかりの家にくる「息子」かもしれないな。こんな持てなし方をされたら、この「息子」、肩肘張らずに寛げるだろうなあ。

ボタ山のストの終わりの秋刀魚食ふ さんさん珊瑚

「ボタ山」で場所と職業が分かり、「スト」で状況がわかり、「終わり」でやれやれという思いを共有し、最後に「秋刀魚」が出てくると、読者も共に「スト」の一日を体験したかのような気持ちになります。「スト」の果ての交渉の結果については、述べていませんが、「秋刀魚」という季語が、日々続いていく小市民の悲哀を思わせませう。

失職や秋刀魚の骨は軽く折れ ウエンズデー正人

いきなり上五「失職や」と打ち出しました。この型は一句全体の言葉のバランスが取りにくいのですが、うまくおさめています。中七下五「秋刀魚の骨は軽く折れ」という措辞で、今きれいに食い終わったところなのだということが分かります。腸も何もかも綺麗に食い尽くした「骨」は実に簡単にボキンと折れてしまいます。箸先から伝わって手に残るそのかすかな感触が、「失職」という事実を否応なく再認識させるのです。

秋刀魚の香サーカス団は父さらふ 酒井おかわり

突然失踪してしまった「父」。父ちゃんには「サーカス団」に攫われたんだよ……なんて言い訳してた時代が確かにあったなあ。ワタシの住んでいる四国では「お遍路さんに連れていかれた」なんて言っていましたけどね。

「サーカス団は父さらふ」という措辞には、ある時代の悲哀がこもります。子ども心に「父」を探そうと、町にやってきた「サーカス団」を偵察に行く子。「サーカス団」のテントの裏側で焼いていた「秋刀魚の香」。大人になった今も「秋刀魚」を食べるたびに、心の傷が痛む、という私小説を読ませてもらったような作品でした。

## 居続けのセンセイ露地に焼く秋刀魚

めいおう星

読んだ瞬間になぜか永井荷風を思い浮かべました。というよりは、一枚の写真を思い出しました。たしか、踊り子か芸者の中に座って三味線弾いてたんじやないかと思うんですが、そんな「センセイ」なんだろうな、と。

「居続け」は①長い間よそに泊まって自宅へ帰らないこと。入りびたり。②遊里などで、何日も遊んで家へ帰らないこと。また、その客。を意味します。「居続け」で状況がわかり、「センセイ」の一語と表記でこの人物が見えてくる。一句で短編小説に匹敵する世界をもっている句だと思えます。

**東北に荒ぶる火あり秋刀魚焼く 檜の木**  
この句にもドキッとしました。「荒ぶる火」は原子力発電所の「火」でしょう。制御できない「火」を手に入れてしまった人類。「秋刀魚」を「焼く」ための「火」は、人々の暮らして共存してきたはずなのに、私達はこの「荒ぶる火」をどう扱えばよいのか、という迷いと戸惑い。「東北」の一語に鎮魂の思いもかさなります。

## 秋刀魚焼くデモクラシーのこゑの底

今野浮樗

今年是不漁らしく、近隣諸国が「秋刀魚」を食べ始めたために水揚げが減っ

ている?というニュースも耳にします。「秋刀魚」という季語は、基本的に廉価で庶民の味方の魚、というイメージですね。昨今の政治状況の中で痛切に感じる「デモクラシー」という言葉への思い。小市民である私たちは「デモクラシーのこゑの底」で今日も「秋刀魚」を焼き続けるのです。

## 参加賞秋刀魚三匹もらいけり

八十八五十八

ごめん、笑ってしまいました。どんな大会?に参加したのでしょうか。運動会なんてことはないでしょうか……クイズ大会? サンマのつかみ取り大会? 考えているうちにだんだん愉快になってきました。「秋刀魚三匹」、ひよつとして家族が4人だったらどうする? なんて、どこでもエエことまで想像して、またまた笑ってしまいました。

第131回 2015年11月9日週掲載

## 葱鮪

天

東国の荒ぶるころ葱鮪鍋 井上じろ

「葱鮪」の鍋の熱々の実感で攻めていくか、「葱鮪」という鍋の生まれた背景

を押し出すか。冬の季語として数々ある鍋類との違いをどう表現していくか。そこが難しいところでありましたね。

「葱鮪」の鍋は、日もちしない「鮪」の部位を放り込んで出汁とし、葱を美味しく食べるといふシンプルにして荒々しい男料理ですが、集まった投句を分析していくと、江戸のイメージを色濃くもっていることに気付きます。「鬼平犯科帳」の鬼平がでてくる句がかなりあったのもその発想でありましょう。

今週の「天」に推したこの一句は、「葱鮪」の持つこのような要素をなんともまあ見事に抽出したというか、他の鍋との違いを明確に詠み放つてくれたというか、こんなやり方もあったかと驚いた作品でした。

「葱鮪鍋」はグツグツ煮えたぎっています。鍋を囲んでいるのは、「東国」の荒々しい武士でしょうか、はたまた「東国」の「荒ぶるころ」をDNAに残した働く男たちでしょうか。「東国の荒ぶるころ」という措辞は、関東という土地を意味するだけではなく、男という種族が持つ荒々しい闘争心をも思わせませす。「鮪」と「葱」だけの質素な鍋が醸し出す旨味は、「東国の荒ぶるころ」が生み出した逸品。酒を飲みながら交わされる議論もまた次第に熱を帯び、荒々しくなっていくに違いありません。

「東国」名産の太い葱、「東国」を吹き荒れる乾いた冬風。「東国」の一語から

## 地

### 出ずに出せぬ葱鮪の葱の熱きこと

一生のふさく

まさに「葱鮪の葱」らしい実感に思わず笑ってしまいました。落語『ねぎまの殿様』も同じように熱い「葱」に舌を焼いたに違いありません。「出ずに出せぬ」という状況から一句を始めた点も工夫ですね。口中の実感が下五「熱きこと」という措辞にて読者の共感をかきたてます。

### 浅草より海まで三里葱鮪鍋 みちる

「葱鮪」という鍋の特色を表現するために「浅草」という地名を入れた句もかなりありました。その中でこの句を金曜日に残したのは、中七の発想ですね。「海まで三里」は、江戸の頃のイメージを彷彿とさせる措辞。「浅草」の「海」が句い立つような「葱鮪鍋」は美味そうに煮えています。

### 鉄砲の渡来何年ねぎま鍋 どかてい

こういう発想もあっていいよね! 落語『ねぎまの殿様』の噺にてくる「食べるとネギの芯が鉄砲のように口の中に飛び込んできた」テッポウ」という言葉が、この句の発想の元になっているの

# ねんねこ

天

ねんねこより初めて見しは荒るる海

雪うさぎ

「ねんねこ」なんて見たこともないという若い人たちもいるはずですが、俳人たちは想像力という武器を使ってこの季語に挑戦してくれました。その一方で、「ねんねこ」を知っている世代（であろうとと思われる人たち）の句は、非常に生々しく、やはり体験は強いなあ！と実感しました。

さて、「天」に推しましたこの句、たった十七音で人生のドラマが立ち上がってくる作品。さすがだなあ、雪うさぎさん。「ねんねこ」という季語をつぶやいただけで、背負われている赤ん坊と背負っている人物がそこに存在します。「ねんねこ脱ぐ」「ねんねこ畳む」と動詞を添えない限りは、季語「ねんねこ」は二人の人物が存在することを語っているのです。そんな「ねんねこ」という季語の特性を踏まえて作られたこの作品。「ねんねこ」という言葉に出会うと、必ず想い出すのがあの日のあの「荒るる海」。母におぶわれた「ねんねこ」の中の記憶は、幼心に刻印されています。初

を悼む期間を終えて、と読んだほうがいいですね。

「忌み明け」という状況、「土間」という場所、「匂へる」という嗅覚情報、それぞれ言葉が他の言葉と重なることなく機能しています。下五「葱鮪かな」という詠嘆が「忌み明け」の安堵感に繋がりますね。しみじみと飲む酒の匂いもできます。

矢野リンド

「葎酒山門に入るを許さず」は、「禪寺の門の脇の戒壇石に刻まれる句。清浄な寺門の中に修行を妨げ心を乱す不浄な葎酒を持ち込んだり、それらを口にしたいものはいることを許さないの意」とネット辞書には解説してあります。吟行で訪れる寺で、よく見ますね、この言葉。

ただでさえ「葎酒山門に入るを許さず」であるのに、ましてや「葱鮪」などという生臭くて、酒のすすむような食べ物をおの門の内に入れるわけにはいかないぞ！という一句ながら、寺には酒のことを般若湯と言ひ換える粋な計らいもあり、この寺の生臭坊主たちは、堂々と美味い「葱鮪」を食べながら酒を飲んでるに違いない、と思ってしまうワタクシでございます（笑）。

味わいです。

やつちや場の湯気まうまうと葱鮪汁

あつちやん

「やつちや場」とは、青物市場のことです。表記は歴史的仮名遣いです。読み方は「やつちやば」と読みます。青物市場の競りを終えて、市場の食堂で「葱鮪汁」を食べている男を思いました。使われている「葱」は今日のイチオシの新鮮な品。「湯気まうまう」という措辞が臨場感となって立ち上がります。

つひに此処の男となるか葱鮪汁

越佐ふみを

「つひに此処の男となるか」という眩きにドラマがあります。この土地のあたかさに触れて流れ者が居着いてしまふ……というストーリーか、はたまた情の濃い女につかまってしまった男か。季語「葱鮪汁」が背景を描きだします。上五中七だけで一編のドラマが書けそうな一句です。

忌み明けの土間に匂へる葱鮪かな

スズキチ

「忌み明け」を辞書で調べてみると、「出産・死などによる汚れのために忌み慎んでいた期間の終わること」とありました。死だけではなかったのかとハッとしたのですが、この句の意味としては身内の死

でしょう。「鉄砲の渡来何年」と吹いているのは受験生でしょうか、こんな疑問がふと頭をよぎっているサラリーマンでしょうか。発想の愉快を楽しませてもらった一句です。

葱鮪鍋陰間と沈む夜のほとり

西田克憲

「陰間」とは男色の意ですね。「葱鮪鍋」の荒々しい男のイメージが、そこにたどり着くとは！と驚きました。差し向かいで「葱鮪鍋」を食う二人の男が沈んでいく「夜のほとり」には、淫靡な闇が漂いはじめております。

葱鮪なべ男根神を祀る島

中原久遠

「東国の荒ぶるころ葱鮪鍋」「葱鮪鍋陰間と沈む夜のほとり」などの句と発想の出発点は同じかと思いますが、最後に「島」の光景となることで「葱鮪なべ」の鮮度が一気にあがってきます。「男根神を祀る島」の荒々しい鍋は今煮えたぎっております。

熱量は葱鮪の葱の眠たさへ

Y音絵

「葱鮪」に入っている「葱」に焦点を絞った句もたくさんありましたが、この句の味わいは不思議です。「葱鮪の葱」の持つ「熱量」が「葱鮪の葱の眠たさ」へと変換されていく、というのでしょうか。お腹がいっぱいになったあとの「眠たさ」が、虚の世界へと漂いだしていくような

めてやってきた両親の生まれ故郷でしようか。何かの理由で、両親はこの町を追われたのでしょうか。はたまた、夜逃げ同然にたどりついた未知の町か。「ねんねこ」の中の赤ん坊であるワタクシと、「ねんねこ」の母はこの後、どんな人生を送っていくのか。読み手の想像はどんな広がっていきます。

「ねんねこ」という季語の成分には、そのあつたかさ、幸福感に満ちた匂いなどが内包されているわけですが、この句はそれらの要素を逆手にとりつつ、「ねんねこ」の本意を表現します。「荒るる海」から吹く風の凶暴な冷たさ、不安を募らせる潮の匂い、「ねんねこ」から出ている顔の凍るような冷たさ、「ねんねこ」に包まれた体の暖かさ、母の酸っぱく甘い匂い。たった十七音から、読み手に果てしない物語を感じさせる言葉の力を堪能させてもらった作品です。

## 地

**ねんねこや鬢の匂いに空の青** 豆蘭

「ねんねこ」をストレートに描いた二句。おんぶされた時の記憶を辿っていきば、母の「鬢の匂い」がありありと思ひ出されるのでしょうか。「鬢の匂い」という嗅覚に、下五「空の青」の視覚が鮮やかに広がります。

**安売りの列へねんねこ揺すり上げ**

トボル

「安売りの列」に並んだものの、長い列は延々と続いています。「ねんねこ」の赤ん坊は次第に重みを増し、くずりだしそうになり、思わず「ねんねこ」を「揺すり上げ」という動作のリアリテイ。句を読んだ人の脳裏には、ほとんど100%に近い確率で、同じ映像が浮かぶに違いない一句。描写の力の賜物です。

**ねんねこの中で泣こうがゴロベース**

藤鷹圓哉

「ゴロベース」というのは「ゴムまりを地面に転がして、バットではなく自分の手で打つ三角ベース」なのだそうです。なるほど、あの遊びかと合点がいきました。それにしても上五中七の描写が巧いですね。「ねんねこの中で」赤ん坊が泣こうがわめこうが、兄ちゃんは「ゴロベース」の仲間に入って遊びたいんだよな。んで、この兄ちゃんは、「ねんねこ」の中に赤ん坊背負っていても、ゴロベースには無くてはならない存在なのかもしれない（笑）。古き良き昭和が思い浮かぶ一句です。

**ねんねこや臍の緒どこへ仕舞つたか**

かをり

ふつとこういうことが心にひっかかったりしますよね。あれ、わたしや、この

子の「臍の緒」をどこへ仕舞つたんだか……。 「ねんねこ」の赤ん坊をよしよしと揺すりながら、しばし心当たりの仕舞い場所を思い浮かべているのでしょうか。ささやかな心の動きが、季語「ねんねこ」のシーンとしてありありと描かれていきます。

**ねんねこや臍の緒は仏壇の中**

酒井おかわり

「臍の緒どこへ仕舞つたか」という問いに答えるような一句もあって、ちと笑えました。大事なものは「仏壇の中」ってのは、我が生家でも同じだったなあと共感。うちの祖母ちゃんは、私ら姉妹が持つて帰る成績通知表も、仏壇に飾ってましたもん（笑）。  
見つけた「臍の緒」の入った桐の箱は、線香の匂いがしみついていたのでしょうな。「ねんねこ」そのものも線香臭く思えてくるのも、ちと笑えます。

**ねんねこや夜ごと鳴くとぞ赤子石**

檜の木

季語「ねんねこ」は、母性・暖かさ・優しさのような正のイメージを持つ一方で、泣く・不安・怖ろしさのような負のイメージも内包しています。「ねんねこ」の赤ん坊が泣くばかりで寝てくれない夜「夜ごと鳴くとぞ赤子石」と赤ん坊を脅すような子守歌をうたっているのかもしれない。

れません。ひたひたと怖ろしい「夜」が、「ねんねこ」を包囲していきます。

**ねんねこがふと軽くなる狐道** 雪うさぎ

「ねんねこ」の赤ん坊がだんだん重くなるという発想の句は沢山ありましたが、「ねんねこがふと軽くなる」という措辞は、それらの発想を逆手にとりつつ、「ねんねこ」という季語が内包する恐怖めいた感情を読み手に手渡します。下五「狐道」という言葉だけで、ここまで怖ろしくできるんだもんなあ。

**ねんねこ下ろすかるくつてぞつとする**

豆腐太郎

さらに怖い！「ねんねこ下ろす」という動作のあとにでてくる「かるくつてぞつとする」というフレーズに、ぞつとします。「ねんねこ」の赤ん坊はどこにいったのか。いや、そこにいる赤ん坊はすでに死んでいるのか。妖怪変化のたぐいだったのか。考えれば考えるほど、ぞわぞわと怖ろしくなっていく作品です。

**ねんねこで避難訓練現れる** 谷山みつこ

町の「避難訓練」には色んな人が集まってくるわけですが、「ねんねこ」のお母さんも参加者の一人。……と書いたけど、「ねんねこ」のお父さんでもいいわけ、専業主夫の背負う「ねんねこ」の中には赤ちゃんがすやすや。下五「現れる」

という動詞が、私の脳内に専業主夫を出現させたのかもしれないなあ〜と自分勝手に納得しています(笑)。

陳情の母達はみんなねんねこ 小市

「陳情」という言葉が生々しいなあ。誰に何を陳情しているのかは述べてないけれど、「母達」「みんな」という複数の表現から、悩みと協議の果ての「陳情」だということが分かりますし、場の切実な空気も読み取れます。「母達」の前にいるのは、役場の課長でしょうか、工事現場の責任者でしょうか。どんな人が立っているかを想像すると、「陳情」の内容が自ずと浮かんでくるのも、面白い構造の一句です。

ねんねこの人が実行委員長 長緒連

こちらの「ねんねこの人」はさらに前向きに活動する人です。なんの「実行委員長」かは語られていませんが、「実行委員長」ということは、そこには実行委員会があり、目的を同じくする人たちの活動があり、何らかのイベントや大会に向けて共に頑張っている現場もあるというわけです。「ねんねこの人」はエネルギーなお母さんだろうな。子どもが4人ぐらいいいそうな気もするな(笑)。

二丁目の魔子のねんね金のラメ

鈴木麗門

「二丁目の魔子」は、もちろん愛称、通称、源氏名というやつでしょう。ホステスカ、娼婦か、ストリップパーかど、読み手の想像はどんどん膨らんでいきます。「二丁目の魔子」という人物のあと、「ねんねこ」という季語をこの位置におく巧さ。そして、とどめは「金のラメ」という描写。そんなねんねこなんてあるのかね?と疑ってかかるよりは、この句の境界に心をおよがせてみるのが、読み手としての粋な楽しみ方というもんです。

第133回 2015年12月7日掲載

## 蜜柑

みかん

## 天

にきたつの月の凝りたる蜜柑かな

とおと

今週の兼題「蜜柑」は、JAえひめ中央さんと共催企画。伊予国えひめならではの「蜜柑」を探しておりましたところ、この格調高い一句を発見。迷わず「天」に推させていただきます。

「愛媛には三つの太陽がある」という言葉を存じでしょうか。空から降りそそぐ太陽の光、海から照り返す反射光、

傾斜地から照り返される太陽、この三つが愛媛の蜜柑を甘くさせている。そんなネット情報をゲットした皆さんから「太陽と蜜柑」の句が沢山寄せられた今週、まさか「月と蜜柑」でこんな作品ができるとは!と、驚いております。

「にきたつ」は「熟田津」と書きます。万葉集の額田王の歌「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」で有名な「熟田津」にきたつは、伊予の国の三津浜あたりといわれております。まずは地名を詠み込むことで、挨拶の心を表現。さらに、「にきたつ」に上ってくる「月」が凝ったかのような「蜜柑」であるよ、という措辞に詩的断定があります。

「凝る」には①夢中になる。ふける。②細かい点まで趣味を貫く。③筋肉が張ってこわばる。④一か所に寄り集まる。などの意味がありますが、ここは当然④の意味。「にきたつ」の「蜜柑」が美味しいのは、「にきたつ」の「月」が凝っているからだよ、という発想が実に美しいですね。④のなかに「氷結する」の意味もあると知り、その詩的幻想も香しく思えます。甘いだけの「蜜柑」ではなく、レモンイエローめいた程よい酸味を含んでいるのが「にきたつ」の月の凝りたる蜜柑の味ではないかと、味覚的想像もふくらんでいきます。

## 地

投げ入れるやうに蜜柑を喰ひ若し

クズウジュンイチ

「蜜柑」を剥いたかと思うと、何房かを一挙に口のなかに「投げ入れ」ていく人物が、目の前にいるのです。小気味よいほどに次々剥けば「蜜柑」の皮は爽やかに香り立ち、放り込まれていく口中には甘い汁が満ちていきます。最後の一語「若し」は、その食いつぶりを愉快に眺める爽快感と読むべきか、はたまた圧倒してくる若さを微笑ましくも疎む中年の心情か。なかなか心理的奥行きのある句でもあります。

蜜柑山明るき午後死後のやう 葦信夫

人っ子ひとりいない「蜜柑山」を歩いていると、その明るさに圧倒されるって感覚、分かるなあと思います。「蜜柑山」の広がり、「蜜柑」の色の明るさが「明るき午後」という時間の印象となり、それが自分の「死後」の光景のようにも思えてくる。死ぬならこんな日のこんな時間がいよいよなあと思感した一句です。

捨て山に切り火のごとく散る蜜柑

西田克憲

詠んだとたんに、我がふるさと愛南町の実家の裏山が浮かんできました。(うちの場合は橙畑だったので)祖父が

病気になる手入れする人もいなくなつた

頃、「切り火のごとく」勝手に実つてい  
る果実がなんと哀れでした。

「捨て山」という率直な表現の後に「切  
り火」という言葉が出てくる不穏、さら  
に「切り火のごとく散る」が「蜜柑」の  
比喩であることが分かったとたんのリア  
リティと納得。このような負の側面もま  
た「蜜柑」という季語の切実な現場です。

小結は五勝七敗みかん剥く 山香ばし  
テレビで大相撲中継を観ているので  
しょうか。それとも柵席にて観戦して  
いるのか。土俵に登場した「小結」は「五  
勝七敗」、この一番に負け越しかかって  
おります。力士の緊張した横顔を眺めつ  
つ、気楽に「みかん」を剥いている脳天  
気な気分が、まさにミカンの味わいで  
す。(笑)。

白組の5組目蜜柑5、6個目 村上海斗  
「白組の5組目」に重ねて「蜜柑5、6  
個目」とくれば、NHK紅白歌合戦に違  
いない！しかも、明らかに自宅で剥いて  
いる「蜜柑」であることも分かる。巧い  
もんだなあ、海斗くん。複数の数詞を使っ  
ても一句を破綻させていませんし、季語  
「蜜柑」のアルアル感も見事に表現。

傷みたる蜜柑を捨つる連夜かな

内藤羊草

「連夜」とは【葬式、年忌法要の前夜  
の意味】として使われる言葉です。明日  
の弔問客に出す座布団やら湯のみやらの  
準備の一つとして、「蜜柑」を取り出して  
いるのでしょうか。箱の底に「傷みたる蜜  
柑」を見つけて「捨つる」行為は、沢山  
の人の誰かの死をイメージさせます。  
気丈に涙を堪えていた心の堰を切るのは、  
こんな何気ない出来事なのではないかと、  
我が身の経験がふいに蘇ってきた作品で  
す。

剥いたみかん見つめるだけの母となりぬ

豆蘭

「剥いたみかん」は、作者が剥いて母  
の前に置いてあげたものでしょうか。は  
たまた母自身が剥いて、そのまま置かれ  
たままになっているのでしょうか。深い  
悲しみの放心か、認知症の日々か。「剥  
いたみかん見つめるだけの母」という措  
辞に、子としての切なさが見えます。

執拗に筋剥かれ蜜柑ひりひり トボル

「蜜柑」の気持ちになつて「蜜柑」を  
詠むという発想の句もあつてよいでしょ  
う。「執拗に筋剥かれ」という説明的描  
写が、実に「蜜柑」への感情移入の言葉  
に転化されていく点に、工夫があります。  
特に最後の「ひりひり」は、「蜜柑」に

憑依してこそ感じ取れるリアリティある  
オノマトペです。

都合悪いと蜜柑ばかり剥いて、もう

不可可

読点を巧く使った一句。二人の人物が  
いるわけですが、女性と思われる側の言  
葉（あるいは心の内の言葉）を書き留め  
ることによって、両方の人物を描写して  
いる点が興味深いですね。最後の「もう」  
の部分で、どんな台詞まわしで声にする  
かによって、一句のドラマはいかように  
も変化していきます。

伊予国の蜜柑のことは儂に訊け

ポメロ親父

ははは！この自信、笑つてしまいました  
た。句と作者を一体化させて楽しむべき  
作品でしょうね(笑)。俳号ポメロ親父の  
「ポメロ」とは【ムクロジ目ミカン科ミカ  
ン属の低木と果実のこと】で、「柑橘類の  
総称みたいなもん」なんだそうです。ポ  
メロ親父の台詞がそのまま俳句になつた  
愉快を樂しませてもらいました。(笑)。



## 山眠る

やまねむ

天

山眠る熊胆闇色に干され 牛後

佳句多く、心楽しい悩みの末にこんな  
句を発見。思いがけない句材を味わわせ  
ていただきました。

「熊胆」は「ゆうたん」と読みます。  
日本大百科全書には以下のような解説。  
【中国の唐代にその使用が始まったと思  
われる漢薬で、クマ類の胆汁を乾燥した  
もの。市場には胆囊に入つたままの状態  
で出まわり、日本産はそのまま板に挟ん  
で乾燥させるので、円板状である。】

この句の描く光景は、市場に出回る前  
胆囊に入つたままの状態です。干されて  
場面でしょう。先ほどの辞書によると「熊  
胆は採集する時期によつて色が異なり、  
色調によつて黒様、琥珀様、青様などと  
称される。わが国では一般に淡黄色の琥  
珀様が賞用される」とあります。掲出  
句「闇色」は黒様というヤツでしょうか。  
ちなみに「熊胆は苦味健胃のほか、鎮痛  
鎮けい、利胆、消炎、解熱などの効能  
があり、胃腸病、黄疸、小児の疳、腸内  
寄生虫症などに応用される」のだそうで  
す。「熊胆」がどれぐらいの大きさなのか、  
具体的知識はないのですが、熊と人間の

大きさの比較から相対的に想像。だんだん脳内にリアルな光景が立ち上がってまゝいりました。

「山眠る」頃は、猟の季節でもあります。食べ物を求めて里に下りてくる「熊」を撃つ。これもまた里山に生きる人たちの切実な仕事です。

昨日撃つた「熊」は丁寧に解体され、肉は肉として、皮は皮として仕分けられています。取り出された「熊胆」は貴重な漢方薬。値の見込める大事な部位です。冬の乾いた風の中、昼と夜を繰り返しながら「熊胆」はゆつくりと乾いていきます。眠ったかのような山に生きる熊と人間の関わり、生きるための営みが、曼茶羅図のように組み込まれている一句に深い感慨を覚えます。

## 地

丸太へと鉦の一喝山眠る 中原久遠

「丸太へと鉦の一喝」という擬人化の見事な切れ味。中七の終わりに、振り下ろした「鉦」の音が響きます。上五「へ」の助詞の選択も巧みです。「丸太へ」向かって振り下ろされる「瞬から、鉦」の刃が「喝」の音を立てるまでを、助詞「へ」が表現。下五の季語「山眠る」が一句をどうしりと支えます。

湯川とて少し温か山眠る ぐわ

体言「湯川」に付く助詞「とて」は「くだけあって、くなので、くであるから」という意味になります。「湯川」と言われるだけあって、確かに「少し温か」です、と読めばよいでしょう。

「少し」という言葉を入れた句をよく見るのですが、その大多数が3音足りなから入れてみた……という残念な使い方。要注意の単語の一つですが、掲出句は「少し」が的確な描写の言葉として機能しています。上五中七は、作者の実感。この率直な眩きが季語「山眠る」を表現さざりげない技が光る一句です。

湯の花や御嶽山の眠らざる 雨月

「山眠る」の「山」の名前を具体的に入れた作品も沢山寄せられました。その中で金曜日に残したのがこの一句です。活火山である「御嶽山」を「眠らざる」と表現するのはありがちな発想ですが、その発想を具体的な光景へと転化しているのが、「湯の花や」という上五です。冬を眠らない「御嶽山」を描くことで、そのほかの冬を眠る山々を想像させるテクニクを、「湯の花」の一語が支えます。「湯の花」と「山」との遠近感、そこには硫黄の匂いも立ちのぼってきます。

山眠る茶碗に雨の名を与へ 希望峰

雅な一句もありました。「山眠る」とい

う季語には静寂という聴覚情報が内包されています。その静けさの中に置かれた一個の「茶碗」。後半「名」を与えようというのですから、飲み食いした茶碗ではなく、抹茶茶碗であることは一目瞭然ですね。

蕭条たる山の眠りに包まれた茶室、置かれた一個の茶碗、折しも「雨」の音がきこえているのでしょうか。「山眠る」頃の「雨の名」を「与へ」られた茶碗の色合いまでもが想像される作品です。

山眠るさて獲物でも洗おうか てまり

「天」の句の何時間か前の台詞がそのまま一句になったかのような味わいです。「さて獲物でも洗おうか」は、狩人たちの現場の生々しい眩き。そのリアリティが「山眠る」という季語の手触りを伝えます。5音の季語一つと、12音の眩きだけで、俳句の器は満たされるのです。

山眠る真珠のごとき天文台

このはる紗耶

眠っている山の一点に真っ白な「真珠のごとき」建物が見える。下五「天文台」という具体的なモノが提示されることによって、中七「真珠のごとき」が白だけではなく、丸い形の形容でもあることが分かります。率直な比喩が生きている一句です。

山眠るよき田の水を蔵しつづ 石井せんすい

「山眠る」頃、棚田もまた水を落としたり眠りの時期に入っています。が、この山には、次の年の豊作が約束されているかのような「よき田の水」が蔵されているのだと、語る一句。下五「蔵しつづ」という切れのない叙述は、「蔵しつづ」山は昏々と眠っているのですよ、と循環する意味を表現します。

山眠り脱鞍したる馬に湯気 灰色狼

「脱鞍」ですから、鞍を外すことですね。競馬場脱鞍所の光景でしょうか、乗馬クラブでしょうか、映画の撮影、流鏑馬のような行事の現場、さまざま「脱鞍したる馬」の光景が浮かんできます。

この句の巧さは下五。「く馬に湯気」という映像の切り取り方が的確です。上五「山眠る」とするか「山眠り」とするか、悩まれたらどうと思えますが、「山眠り」という切れのない、つまりカットを切らないで「山」から「鞍」「馬」そして「湯気」と映像をとらえていくカメラワークを、ワタクシも良しとしました。

抜髪のからむ湯殿や山ねむる 比々き

この目のつけどころにもささやかな驚きを覚えました。木の葉髪という季語がありますが、「抜髪」という一語のインパクト。さらに「かむ」という状況、そ

れが「湯殿」であるという光景、「や」の切れ字もきつぱりと利いています。下五「山眠る」という季語をこんな形で表現できるとは、いやはや畏れ入りました。

### 馬の目の周りに山は眠りけり

酒井おかわり

「馬の目の周りに」という把握にオリジナリティがあります。作者は「馬」に憑依しつつ、その馬を客観視しているという、俳句の幽体離脱状態に自分を置いて、「山眠る」という季語を眺めているのです。「馬」である自分の「眼の周りに」山々は眠っているよ、という措辞が馬特有の大きな真つ黒な眼球を意識させます。不思議な句ですが、魅力があります。

### 蜂蜜に沈む知恵の輪山眠る

岩魚

さらに不思議な句をもう一つ。「蜂蜜」の中に落とされた「知恵の輪」が沈んでいくということです。なぜそんなことをやっているのだ？と行為そのものを否定するのは、愚というものです。金色の「蜂蜜」の中、そのささやかな重さをもってゆつくりと沈んでいく「知恵の輪」の美しさ（私は銀色の「知恵の輪」を想像しました。）金色に透きとおった「蜂蜜」、銀色の「知恵の輪」、大口のガラス瓶の奥には遠く眠る山も見えてくるようです。

「蜂蜜」「知恵の輪」に象徴的な意味を与えて解釈することも可能ですが、個

人的好みとしては、そのような理屈ではなく、この不思議な光景を率直に美しいと思うのです。

第135回 2016年1月4日週掲載

## 歌留多

天

どうかしてゐる歌留多にひらがなは群れて

Y音絵

「歌留多」にも色々な種類がある……という話が、火曜日「俳句道場」にも寄せられておりましたね。一句に詠み込まれている「歌留多」が、どういう種類の歌留多なのか分かるように描かれているとカッコイイね！というのが、今週の兼題へのチャレンジでありました。

これは、いろはカルタね、こっちは百人一首かな？と考えながら読むのも楽しい選句でありましたが、今週の天に推した句の感覚は独特のもです。

上五でいきなり畳みかけられる「どうかしてゐる」という眩きに惹きつけられます。呆れかえっているのか、困惑しているのか、憤っているのか、そんな展開を想像しつつ、中七に出現する「歌留多」の一語、読み手は、なるほど理不尽な負け方でもしましたかと、一句の展開を見

抜いた気になります。が、作品の肝は後半。「ひらがなは群れて」の措辞に、読み手の心はハツと動きます。

「どうかしてゐる」は、目の前にある百人一首の取り札に向けられた眩き。長方形の札いっぱい「ひらがな」ばかりが「群れ」ていることへの美しい困惑。初めて百人一首の取り札を見たときに、たしかに私自身も感じそのまま忘れ去っていた違和感が、「どうかしてゐる」という独白によって、ありありと蘇ってきたことに驚きました。

私はこの句に出会って、何年かぶりに新しい百人一首を買いました。そして取り札を二枚一枚眺めながら「どうかしてゐる」「ひらがなは群れて」という詩語の鮮度に、改めて感じ入りました。今年最初の天は、我が愛唱の一句となりました。

地

美しき鱧ひらめかせ歌留多取る

めいおう星

これも百人一首でしょう。「美しき鱧」は振り袖かもしれませんし、掛けた襷の結び目かもしれません。「ひらめかせ」という措辞の選択が「鱧」という比喻を際立たせます。下五「歌留多かな」とかではなく、「取る」と動作をはっきり言い止めた点も、的確な判断です。

痛そうな犬の顔ある歌留多かな

井上じろ

読んだだけで「いろはカルタ」だと分かるのが、さすがですね。「犬もあるけば棒に当たる」と読み上げられ、ハイ！と威勢よく「い」の札を叩き、手にとつてみると、そこにはいかにも「痛そうな犬の顔」が描かれている。飄々たる俳味の一句です。

歌留多には円空仏のごとき姫 初蒸気

こちらの「歌留多」は百人一首の読み札であることが一目瞭然です。「歌留多」の読み札に刷られている十二単の「姫」の顔はどうにも「円空」が彫った「仏」みたいだよ、という愉快。この作家らしい視点から生まれるウィット。我が家の百人一首の中にも、こういう顔つきの「姫」がいっぱいいますよ。

ゆんでは軸めては歌留多を打ち飛ばす

えらいぞ、はるかちゃん！

「ゆんで」は左手のこと、「めて」は右手のことです。「ゆんで」は「軸」として支え、「めて」でもって「歌留多」を取るといふ当たり前の動作を描写しているだけなのですが、見事な言葉の映像となつていきます。下五「打ち飛ばす」という複合動詞の迫力が一句を支えていることは言うまでもないですね。

## 目の前のかるた取らるるみぜらぶる

葦信夫

自分の「目の前」の「かるた」を取ら  
れてしまった……という発想の句は、掃  
いて捨てるほどありました。が、この句  
の愉快は下五にあります。「みぜらぶる」  
は、「レ・ミゼラブル」を意味する5音。ヴィ  
クトル・ユーゴーの著書で、原題「Les  
Misérables」は、「悲惨な人々」「哀れな人々」  
を意味します。（邦訳は『あゝ、無情』）  
後半の「トラルルミゼラブル」という音  
の愉快をも楽しませてもらった作品です。

## 姉の恋皆知つてゐる歌がるた 雨月

かつての歌留多会は、普段は話す機会  
もない若い男女の社交行事でもあったわ  
けです。「姉」が密かに恋している人が  
誰なのか、「皆知っている歌留多会」「姉」  
の好きな恋の歌がどれか、「姉」の得意  
な恋の札がどれか、皆知っている歌留多  
会。華やかにしてほのかな「歌がるた」  
のシーンです。

## 歌留多大敗白妙の電気ケトル Y音絵

「ちはやふる」「玉の緒の」「これやこ  
の」など、百人一首の詠いだしの5音を  
一句に取り込んだ句もたくさんありまし  
たが、「春過ぎて」から始まる一首の下の  
句が「白妙の」ですね。

「白妙の」は、「衣」「袖」「袂」「たす  
き」などにかかる枕詞でありつつ、「白妙」

そのものは「白色」を意味する言葉。「歌  
留多大敗」の後に続く「白妙の」は、枕  
詞かと思わせつつ、ただの白い「電気ケ  
トル」つまり湯を沸かす電気ポットのこ  
とを述べるといふ、肩すかしの技。思わ  
ず笑ってしまいました。芸の細かさに  
舌を巻いた一句でもありません。

## 沈金の三段御重かるた読む 七草

「かるた」そのものを描くのではなく、  
その場にあるものを取り合わせて場を描  
くという発想。新年の季語「かるた」を  
目度度く華やかに際立てているのが「沈  
金の三段御重」というモノです。お節料  
理が並べられたお座敷で、「かるた」遊  
びが始まった様子がありありと想像され  
ます。下五「読む」という動詞によつて  
読み札を読むのびやかな声や取り手たち  
の賑やかな笑い声も想像されます。

## 花骨牌リトル・トーキョーてふ柑塙

このはる紗耶

「歌留多」は「骨牌」とも書きますが、  
「花骨牌」は花札のこと。「リトル・ト  
ーキョー」とは、ロサンゼルススのダウンタ  
ウンにある日本人街の通称です。この名  
が転じて、日本国外にある日本人街全  
般を指す言葉としても使われています。  
「てふ」は「ちよう」と読んで、「〜とい  
う」を意味する言葉。「柑塙」は「るつ  
ぽ」と読んで「物質を焙焼、強熱、融解

するなど高温処理や高温反応に用いられ  
る耐熱性容器」のことですが、ここでは  
比喩の意味に使われていますね。歌かる  
た、いろはカルタ等とは違ういかにも「花  
骨牌」らしい猥雑な光景を、この一語で  
比喩した発想に拍手を贈りましょう。

第136回 2016年1月18日週掲載

## 冬風

ふゆなき

## 天

冬風や浜舐め戻す波うすし み藻砂

「冬風」という名詞の季語。上五に「冬  
風や」と置いて、さまざまな光景やモノ  
を取り合わせるのが与しやすいう方法だろ  
うと予想しておりました。が、この句は  
ほぼ一物仕立てといつてよいやり方で「冬  
風」という季語に挑んでいます。その努  
力に敬意を払いたいと思います。

一物仕立ての「二物」とは季語を指し  
ます。季語のことだけで一句を構成する  
テクニクです。一物仕立てが難しいの  
は、ひたすら観察し、映像化し、他の人  
が言い得なかった表現を追求するしか  
ないという点です。「冬風」という季語だ  
けをじっと見つめて、どう描写するか。  
これは胆力の必要な作業です。

掲出句には、「冬風」以外にも「浜」

という言葉が入っていますが、これは「冬  
風」という季語の周辺に当然ある光景で  
すから、「冬風」という季語が持つ背景  
であると判断できますので、一句そのも  
のは「一物仕立ての句である」と考えるのが  
妥当でしょう。

「冬風」は広々と静かに無音で眼前に  
広がっています。が、「冬風」の端の端  
である波打ち際にはかすかな「波」がか  
すかに動いています。その「波」の様子  
を「浜」を「舐め戻す」と表現したとこ  
ろにオリジナリティとリアリティがあり  
ます。舐めるように静かに引いては戻っ  
てくる様子を「舐め戻す」とは、よく表  
現したものです。さらに中七の擬人化を  
浮き上がらせていないのが、下五「波う  
すし」という押さえです。「うすし」の  
質感が「冬風」の実体に通じます。

「天」に推すかどうか迷ったのは、「冬  
風」という季語の背後にある、やがて荒  
れてくる不穏な気分がこの句には薄いと  
いう点です。仮に「朝風」「夕風」のよ  
うな夏の季語に入れ替えても良いのでは  
ないかとも悩んだのですが、「冬」とい  
う季節感が「うすし」という語感と響き  
合っているのだなど、己を納得させた次  
第です。言葉によって映像を再生するの  
は、簡単にみえて最も難しい技。それも  
これも観察という基本を疎かにしない人  
だけに、俳句の神様が見せてくれる季語  
の姿なのであります。

帯電したまま冬風を飛んでゐる Y音絵

「天」に推した句のような写生の味わいもあれば、このような感覚的作品もまた至福の味わいです。「帯電」とは電気を帯びている状態ですね。ががつと獲物を狙う鷗みたいな飛び方ではなく、鳶のような飛び方ではないかと思えます。「冬風」を上空から眺めるという視点の句は他にもありましたが、翼のあるものに憑依したかのような発想はこの句だけでした。Y音絵ワールドは、読み手の脳髓をうつとりと楽しませてくれます。「帯電」という言葉の奥にかすかな不穏も感じ取れます。

### 冬風やフェリーの窓に乾く潮

矢野リンド

こちらは手堅い作品です。「フェリー」の嵌め殺しの「窓」には、飛沫が乾いて塩のようなものが張り付いているのです。それをフェリーの窓に乾く「潮」だと表現したところが巧いですね。

「冬風」の海ですから、今日は潮の飛沫が飛んでくるようなお天気ではない。「フェリーの窓に乾く潮」に荒れた海のありさまを見てとることによって、今日の「冬風」を描く。これがこの句の眼目というやつです。やがて荒れ始める海の一さまでも想像できるあたりが、さすがの一

句です。

冬風や塩の欠片のやうに島 檜の木

「冬風」の光景の中に「島」を配置した句は、当然ながら膨大にありましたが、「塩の欠片のやうに」という比喻に個性があります。「冬風」の光を反射するかのよう、遠く遠くにきらりと見える小さな「島」。「冬風」「塩」「島」と近い言葉を重ねながらも、個性的な表現は可能なのだなど、改めて感じ入りました。

冬風や固き漁協のメロンパン トボル

「冬風」の港には、漁業協同組合のスーパーがあるのでしょうか。朝を食べ損ねて「漁協のメロンパン」を齧り始めたものの、固いメロンパンだなあ……という実感に、思わずくすりと笑ってしまいます。「冬風」「漁協」は近い言葉ですが、そこに「メロンパン」という異質なイメージの言葉が入ることで、取り合わせの楽しさが生まれます。

冬風の港に匂うC重油 スズキチ

「C重油」とはなんぞや？ 調べてみると【B重油、C重油は、船舶用の大型ディーゼルエンジン、工場や発電所、地域冷暖房などの大規模ボイラーの燃料などに用いられる】ものなのだそうです。これに対してA重油は、【農耕機や漁業用の中小型船舶の燃料。最近では環境問

題や大気汚染問題に配慮するため、ビル、ホテル、寮、病院、学校の暖房・給湯用、食品工場の加熱用、クリーニング工場のプレス・温水供給・温室などに運用されるボイラー】に使われるとか。

ということは、「冬風の港」で私たちの鼻がキャツチする匂いを「C重油」と確定するだけで成立している句だということですね。風の強い日には意識されにくい匂いの種類を描くことで、「冬風」という季語を表現しようという意図が発揮されている作品です。

### ぐつぐつと滾るアーク炉冬風ぎぬ

比呂無

「アーク炉」とはなんぞや？ 調べてみると【電気炉の一種。アーク放電時には電流が両極間の気体中を高密度で流れ、同時に強い熱（アーク熱）と光が放出されるがアーク炉の場合はその熱を利用して炉内の加熱を行う。空中窒素の固定時や銅アルミニウム合金の溶解、電気製鋼など多岐にわたって用いられる】のだそうです。

「アーク炉」が「ぐつぐつと滾る」のは当たり前ですが、下五「冬風ぎぬ」と取り合わせることで、対比という視点が生まれます。「冬風」の港の一角には金属工場があるのでしよう。傍らには「ぐつぐつと滾るアーク炉」があり、休憩時に出てみるとそこには「冬風」の

海がある。光景の立ち上がってくる一句です。

冬風や潤びし骨の蹴りごち とおと

「冬風」の浜を歩いていると、打ち上げられた「骨」に遭遇することがあります。うっかり踏んでしまつてギョとした経験がありますが、下五「蹴りごち」という押さえがニクイですね。蹴ろうとして蹴ったというよりは、うっかり蹴ったものが「潤びし骨」であつたことになさやかな驚きを感じつつも、「蹴りごち」と言えるのが俳人という人種の持つ余裕。「冬風」の微動だにしない海と、心中のひそかな動揺。足には「潤びし骨の蹴りごち」が残つたままの「冬風」の砂浜です。

冬風や死んでも猫はやわらかく

江口小春

こちらは生々しい死です。「冬風」という季語の世界に骸や死体を思い描いた句も幾つかありましたが、この句の生々しさが季語「冬風」と響き合います。「猫は死んでも」ではなく「死んでも猫は」の語順もよく考えられている上に、下五「やわらかく」の実感に哀しみが滲じみまします。「冬風」という冷たさと静けさゆえに、その哀しみには透明感があります。猫の逝去、冥福を祈ります。

## 冬風や妻の座讓る日の朝の

一句に描かれた場面の生々しさに「瞬間ギョツ」としましたが、「妻の座讓る日の朝の」決意たるものは、まさに「冬風」であるに違いないと痛く納得させられました。冷たく静かに冷ややかに固めた決心の奥には、荒れる心を封じているに違いないありません。「冬風」はやがて海の荒れる前兆。「日の朝の」という切れのないう終わり方に、さまざまな感情が沈められている気が漂います。

## リーマンゼータ関数めく冬風

「リーマンゼータ関数」と「冬風」をイコールで繋いだだけの句ですが、そもそも「リーマンゼータ関数」とはなんぞや？ 調べるまでもなく、作者のコメントに目にとまりました。

●数々の数学者の人生を狂わせた恐ろしいほどの魅力を持つリーマンゼータ関数。つい先週、全方位ディスプレイを使いこのゼータ関数の中に入る体験をしました。波打つ高い山、突起、無限に広がる風、数式の中に居るとは思えない情景でした。下五を冬の風とするか迷いましたが、やはりゼータ関数では素数である17を使うべきと判断しました。／とはとる

全方位ディスプレイ吟行と呼ぶべき体験でしょうか。未知の領域なので、ひたすら羨ましいです（笑）。この句の比喻の是非をきつぱり判断できない自分をも

どかしく思います。これからの時代を生きる人たちにはこんな句材も生まれてくるのだと、感慨深く拝読。いつかワタクシも「数式の中に居る」体験をしたいものです。

第137回 2016年2月1日週掲載

## 伊予柑

天

### 伊予柑の海に朝鮮通信使

一斗  
例えば「夏蜜柑」と「伊予柑」を比較した時、季語「夏蜜柑」には「夏」という直接的な季節が入っているのに対し、季語「伊予柑」は「伊予」という地名が入っているのが最も大きな特徴となります。他の柑橘類ではなく「伊予柑」である必然性を確保しようとする時、地名のイメージをどう活かすかという発想は、この季語を表現するための大きなポイントになります。

一句の工夫は「朝鮮」という地名の入った言葉を後半にどっしりと入れたことです。ネット辞書には、「朝鮮通信使」に関して以下のような解説があります。「朝鮮通信使とは、室町時代から江戸時代にかけて李氏朝鮮より日本へ派遣された外交使節団である。正式名称を朝鮮聘

礼使と言う。】一時途絶える時期もありますが、朝鮮からの使節団来訪は江戸時代まで続き、狭義の意味での「朝鮮通信使」は江戸時代の使節団を指すのだそうです。

瀬戸内海の鞆の浦（広島）という湊にも「朝鮮通信使」は訪れております。広島と伊予（愛媛）は海を隔てての隣同士。鞆の浦には使節団の宿泊所となった寺が、今も残っています。さらに「伊予柑」の元となる品種が産まれたのは、同じく瀬戸内海に面する山口県。さらにさかのぼると、「伊予柑」の原種は朝鮮から渡ってきたという歴史的な事実もあります。伊予という地名を含んだ季語の特性を補完する方法を「三重三重に仕組んでいる点を、率直に誉めようではありませんか。

はるばる荒波の外洋を渡り、瀬戸内海にたどり着いた「朝鮮通信使」は、鏡のように穏やかな海に、心から安堵したことでしょう。「伊予柑」を育む瀬戸内の太陽、鏡のような海、美しい島々。「伊予柑」という季語との遭遇が、瀬戸内の「海」への賛美となり、「朝鮮通信使」の歴史への薫陶となる。そんな作品に出会えたシアワセを喜びたい作品です。

## 地

### 伊予柑ひとつ東京を明るうす

三重丸  
季語「伊予柑」に対して、「東京」という地名を入れた作品です。柑橘類の色が周りの光景を「明るうす」という発想はありますが、「東京を明るうす」という把握に望郷の思いがにじみます。「伊予柑ひとつ」というカットが切り替わり、いきなり「東京」という大都会の光景が立ち上がる展開が鮮やかな一句です。

### 伊予柑を置いてあかるくなるベッド

とりとり

これも「伊予柑」によって何かが明るくなるという発想。「伊予柑を置いて」という動作、「あかるくなる」という状況が述べられますが、最後の一語の選択が巧いですね。「ベッド」の一語によって、場面が映像として確定します。「伊予柑」の春の明るさが一句を引き立てます。

### 伊予柑やもとより母性半疑なる

西田克憲

「伊予柑」という季語から導かれる「地方」故郷」というイメージを背後に据えての中七下五の措辞「もとより母性半疑なる」は、さまざまな思いをかき立てます。「母性」に対して「半疑なる」と言い切るところに、「伊予柑」という季語が持つ故郷のイメージを裏切り、そこに

切なる詩が発生します。

### 伊予柑を剥き二畳庵のしづけさよ 紫羽

「二畳庵」とは、かつて俳人松根東洋城が暮らした庵です。ネットを検索すると、以下のような解説も出ております。

【俳誌「浜柿」の創始者で、宇和島出身の俳人松根東洋城が、かつて1年3カ月の間、実際に生活をした場所。自然豊かで空気が澄んだこの地を気に入る、惣河内神社の社務所の二畳の間を借りて暮らしたことからこの名が付けられた。】愛媛出身の俳人ゆかりの「庵」の名を入れることで、「伊予柑」という季語の必然性を確保するという一手です。

が、「二畳庵」がどういふ人のどういふ庵なのかを知らなくても、「二畳」ほどの「庵」を世捨て人が名付けたに違いない、という想像は充分に可能です。下五「しづけさよ」には、そんな想像を受け入れられるだけの懐の深さがあります。

### 子規の恋ありえず伊予柑甘くない

藤鷹圓哉

「二畳庵」に住んでいた松根東洋城も有名な俳人ですが、「子規」の知名度には及びませんね。「子規の恋ありえず」と言い切り、「伊予柑甘くない」と重ねることによって、フレイズ同士が詩という火花を散らします。季語「伊予柑」は愛媛松山に生まれた「子規」の人生と

重なりつつ、酸っぱい思いを醸し出します。若くして結核を患い、残る人生の全てを俳句革新・短歌革新に捧げた「子規」にとつて「恋」をする時間は寸毫もなかったはず。

### 観潮船待つ伊予柑の二個目かな まどん

「観潮船」を季語として載せてない歳時記もあるかもしれませんが、「渦潮」は春の季語になります。「観潮船」とあれば「渦潮」の傍題か?と思うのですが、一句を読み通してみれば「伊予柑」が主たる季語であることが分かります。瀬戸内海はかつて水軍という名の海賊たちが跋扈した海。海賊たちは激しい渦潮を味方として敵を翻弄しました。が、今はその渦も観光資源。「観潮船」を待つことを楽しむ「二個目」の「伊予柑」です。

### 五軒目のママに伊予柑で帰さるる

初蒸氣

「五軒目」は、ちと飲み過ぎですワな、初蒸氣くん(笑)。「五軒目のママ」という人物を置くことで、一句の状況をありありと見せるあたりは、やはり巧いですね。

さらに「伊予柑で帰さるる」となれば、飲み過ぎをいさめてくれる「ママ」は同郷の人で、「今日は飲み過ぎでしょ」なんて優しくたしなめてくれたつ、故郷から送られてきたか「伊予柑」を剥いて

てくれた、なんてことでしょかね。いやいや、「今夜はもう閉店だから」って、体よく追い払われるお愛想の「伊予柑」を二つ貰ったということか。いずれにしても、同郷のママにいなされたという一句でありましようなあ。

### 大吉を引いた手で伊予柑を剥く 捨楽

なんと縁起の良い「手」でございませうか。神社に詣でて「大吉」を見事に引き当てたその「手」で、分厚い「伊予柑」を剥いているというのですね。立春大吉の春を迎えた気分として、気持ちよい一句です。松山では、椿神社の椿祭りがある。春が来るといわれております。そして、「伊予柑」のキャッチコピーは「いい予感!」ですね。

### 伊予柑の香るルソーの森のこと 鞍草子

美術の教科書で観た「ルソー」の絵の中に、影のような森の木々にオレンジ色の柑橘が描かれているのがあったように思います。「伊予柑」は「ルソーの森のこと」香るのだよ、という新鮮な感覚にハッとします。「伊予」という地名と「ルソー」という人名がミスマッチだと感じる人もあるでしょうし、そのミスマッチを味わいだと受け止める人もあるでしょう。興味深い作品でありました。

### 伊予柑や母のアンダーロー見た 貝ヶ森

なんで「伊予柑」?とも思いましたが、「伊予柑」って女子ソフトボールの球のような大きさではありませんね。「母のアンダーロー」が「伊予柑」のほのぼのとした気分と響き合います。「見た」の一語を不要だと考える人もいるでしょうが、この一語は、あまりに驚いた作者の気持ちを表現していますから、私は必要だと考えます。ぶふふと笑えて、愛してしまっただけです。

第138回 2016年2月15日週掲載

## 野焼の やき

### 天

#### 河原辺の野焼きに爆するボールはも くらげを

春の初めの頃、草原や堤の枯草を焼き払う作業が「野焼」です。牛馬の飼料となる青草の生長を促し、害虫を駆除するとして、全国の野や川べりでよく見られた光景ですが、今は、飼育される耕牛耕馬の数も減りましたし、ダイオキシン等の問題がクローズアップされ、届け出のない「野焼」は御法度となりました。かつて世界中に伝えられた焼畑農法の

一種「野焼」は、日本でも縄文時代から行われていましたが、現在は観光の名目で見物するものばかりとなりました。

今週「天」に推した二句、下五最後の「はも」は「くはなあ」という意味で、詠嘆を表します。(文中に使われる場合は「くはまあ」と訳され、同じく詠嘆を意味します。)万葉集をはじめとする奈良時代く平安時代の和歌にみられる用法です。「はも」の意味が分かれば句意は読みとれますね。「河原辺」で行われている「野焼」の最中に、ボンと爆ぜるものがある。それが「ボール」であることに気付いた時の軽い驚きを、「ボールはも」と表現したわけです。

焚火も野焼も自由にやれていた数十年前には、確かにこのような経験がありました。河原で三角ベースをしていて無くしたに違いないボールが何個も焼け焦げになって転がっていること、ありましたよね。

「爆ずる」の一語が、爆ぜる音、火の匂い、「ボール」の焦げた臭いなどをありありと想像させ、ある時代の「野焼」という季語の現場の手触りを伝えます。さらに、「はも」という悠長な語り口が、「野焼」が行われてきた悠久の時代の気分や春の長閑やかな気分を感じさせます。おまえも絶滅寸前季語に救えられるようになったか、「野焼」よ、という感慨に寄り添ってくれる一句でもありました。

## 地

恵方より野焼きの火種授かりぬ ぐわ

「野焼」ですから、「火」を読む句は当然たくさん出てくるわけですが、「恵方より」火種を「授かりぬ」という表現に敬虔な祈りを感じます。清浄な火を味方とし、人間たちはさまざまな文化を育てていくのですね。「野焼」という農耕文化もまた、その一つでありましょう。

まつみづをたんと祠へ野焼く朝

このはる紗耶

火を操るようになった人間たちは、火の怖ろしさも知るようになります。先ず「みづ」を「たんと」お供えをするという行為に、禍々しい火を怖れる気持ちが滲み出ます。後半「祠」という映像、「野焼く」という行為、「朝」という時間がきつちりと映像化されています。

野焼の火とも纏足の少女とも Y音絵

「野焼の火」と「纏足の少女」をイコールで結びつつも、それが別の何かの比喩になっているという構造の作品。

チョコチョコと燃え始める「野焼の火」とチョコチョコと歩く「纏足の少女」、自然の推移を断ち切って人工的に野を推移させる「野焼」と人為的に足の成長を阻止する「纏足」、さまざまな類似点を想起しつつ、隠された別の何かを想像する

詩的興奮。Y音絵ワールドというべき一句に、わたくしドキドキしております。

貧相な川輝ける野焼後

葦信夫

「貧相な」という言葉が「川」の形容となりつつ、「野焼」という季語を表現していく構造に、ほお！と感心しました。「川輝ける」なんて措辞自体もなんの変哲も無いものなのに、言葉がこんなふうに関わり合われるだけで、生きてくるのですものね。言葉つてほんとに面白い！

境界杭煤け野焼きの遠ざかる

ポメロ親父

眼前にあるのは「境界杭」。それが「煤け」ていることが分かり、煤けている理由が「野焼」であることが分かり、すでに野焼きの火は「遠ざか」っていることが分かる。クローズアップの「境界杭」から、はるかな「野焼」の野へ、カメラワークが巧みな作品です。

船頭の犬は野焼に怯えけり 灰色狼

「野焼」という季語の世界に、火に怯える「犬」を見いだす発想の句は他にもありました。船頭の犬」という措辞が見事に映像を立ち上げます。「船頭」の可愛がっている「犬」は、ともに舟に乗っているのでしょうか。岸辺の枯草がバチバチと爆ぜる音に、「犬」が怯えて、舟上をうろろろしつつ吠え始める。そんな

な光景がありありと見えてきます。

野を焼きてあをぐるき雪じゆつと消ゆ

鈴木牛後

北国の野焼ならば、残る「雪」とのこんな場面もあるのだろうと、新鮮な思いで受け止めました。勿論季重なりではありませんが、野焼が主たる季語として立っていますね。「あをぐるき雪」が汚れた残雪を的確に描写。火が「じゆつと」消えるという一見ありがちなオノマトペが、思いの外の臨場感を表現していることも付け加えておきましょう。

一秒に二十四齣野は焼ける ジャンク洞

こんな発想ありか?!と吃驚した一句です。野火が走りゆくさまを「一秒に二十四齣」と表現。これは映画のコマ数なのだそう。野焼のシーンがまるで無声映画のようだよという発想の句もありましたが、そこをさらに「一秒に二十四齣」とすることで、映画フィルムが動いていくさまをスローモーションで見せてくれるような効果を狙っています。

「野焼II野を焼く」ではなく「野は焼ける」という表現になっている点に引っかかりを感じる読者もいるとは思いますが、野焼の現場ではない場所で、野焼を感じるとするという手法の面白さを味わえばよい句ではないかと考えます。

俳句ポスト365とは松山市が運営する、俳句の投稿サイトです。隔週で新しいお題(兼題)が出題され、結果が発表されます。また、俳句を学べる「俳句道場」などもあります。どなたでも無料で参加出来ます。



# 俳句の街 まつやま 俳句ポスト365 とは？

<http://haikutown.jp/>

出張俳句ポスト365

ヤクルト戦編 2015年4月14・15日

坊っちゃんスタジアムの、セ・リーグ公式戦、東京ヤクルトスワローズ vs 広島東洋カープにあわせて出張俳句ポストを開設。兼題は「春の月」。少し肌寒い春の夜、うるんだ月を見上げながら作句。(現地投句数：114人/119句)



出張俳句ポスト365

俳都松山キャラバン2015編

大阪 2015年7月4日 / 東京 2015年7月12日

大阪(クレオ大阪西)と東京(国立科学博物館)で開催された俳都松山キャラバンイベント会場でも、俳句ポストを開設しました。俳句対局で盛り上がる会場で、観覧者も投句に挑戦しました。兼題は「ハンカチ」。

(現地投句数：大阪61人/65句、東京60人/61句)



コラボ企画

J A えひめ中央 × 俳句ポスト365 ※2回開催

J A えひめ中央さんのホームページ「J A えひめ中央 えひめ柑橘大学」(<http://kankitsu-ehime.jp/>)開設を記念したこの企画。天・地の句に、J A さんより豪華な柑橘詰め合わせがプレゼントされました！

第1弾 兼題「蜜柑」(全投句数：735人/3352句)

【天】 紅まどんな3キロ&ゼリーのセット

【地】 紅まどんな3キロ

第2弾 兼題「伊予柑」(全投句数：685人/3057句)

【天】 宮内伊予柑3kg(みきゃんピラー付)

+ シトラスジューサー

【地】 宮内伊予柑3kg(みきゃんピラー付)

出張俳句ポスト365

俳句甲子園 東京会場編

2015年6月14日

第18回俳句甲子園、関東地区大会東京会場となった羽田空港にて、出張俳句ポストを開設。兼題は「南風」。俳句甲子園の参加選手や実行委員会メンバー、観戦に訪れた方などたくさんの方の投句が集まりました。

(現地投句数：272人/282句)



# 365オフ会

2016年1月9日

(in 国際ホテル松山)



▲北海道・鈴木牛後さんによる乾杯の挨拶。



▲翌日の第14回まる裏俳句甲子園の様子。



▲参加者全員で記念撮影。あっという間の2時間でした。

今回で2回目となった365オフ会。北はなんと北海道から、南は九州・福岡まで、全国津々浦々から48名が集結しました。今年も、まる裏俳句甲子園前夜の開催。オフ会参加メンバーで、まる裏出場チームをマッチングしましょう、というのがねらい。俳号と実像がつながり、そのギャップが次々に明かされ、新チームも結成され、大いに盛り上がる会となりました。(おかげで、まる裏の出場チームは過去最高の46チームになりました)。

# 世界へ、そして100年後の未来へ、 俳都松山が今動き出す!!



2016年 夏目漱石 没後100年

& 小説「坊っちゃん」発刊110年

2017年 夏目漱石・正岡子規生誕150年

愛顔えがおつなぐえひめ国体・えひめ大会

俳句ポスト365選者  
夏井いつき プロフィール

1957年（昭和32年）愛媛県生まれ。松山市在住。8年間の中学国語教諭の後、俳人へ転身。「第8回俳壇賞」受賞。俳句集団「いつき組」組長。創作活動&指導に加え、俳句の授業（句会ライブ）、全国高等学校俳句選手権「俳句甲子園」の創設にも携わるなど幅広く活動中。MBS「プレバト!!」俳句コーナー出演中。「NHK俳句」平成28年度選者、愛媛県公式サイト「吟行ナビえひめ」選者、朝日新聞愛媛俳壇選者、愛媛新聞日曜版小学生俳句欄選者。句集「伊月集龍（朝日出版社）」、句集「伊月集梟（マルコボ、コム）」、「100年俳句計画（そうえん社）」、「絶滅危急季語辞典（ちくま文庫）」、「超辛口先生の赤ペン俳句教室（朝日出版社）」、「夏井いつきの美しき、季節と日本語（ワニブックス）」など著書多数。2015年5月、俳都松山大使に就任。

「愛ある伊予灘線」を走る観光列車  
いよなだ  
伊予灘ものがたり

車窓からは伊予灘の穏やかな海を間近に眺めながら  
四国・愛媛ならではのおいしい食事をお楽しみいただける、  
JR四国が運行するレトロモダンな観光列車です。  
車内には松山市の観光俳句ポストを設置しておりますので  
旅の思い出をどうぞ俳句に詠んでお寄せください。



「俳句ポスト365」  
PC・スマートフォンサイト



<http://haikutown.jp/post/>



「俳句ポスト365」  
Facebook ページ



<http://www.facebook.com/haikupost>



松山市